

# 魔導装甲アレン

第二部 黄昏の帝國

秋月あきら

第一章 アレン始動

《1》

砂漠に水が湧けば、自然とそこに町ができる。

水の多さに比例して町も大きくなっていく。

そこは砂漠の真ん中にある小さな町。これと言った産業はないが、一件だけ酒場がある。酒が飲める場所があるだけでも、ほかの町や村よりはマシだ。砂漠にある町はそれほどまでに貧困に喘いでいる場所が多いと言うことだ。

今や世界の三分の二が砂漠地帯であり、人間が住める土地を差し引いた場合、砂漠地帯に住んでない人間のほうが少ない。

砂漠地帯では作物が育たない。作物が育たなければ、家畜も育てることができない。深刻な食料不足の連鎖。

生きるためには金がいる。

金がない者は飢え死にをするだけだ。

そんな世の中で、クローンのような大都市ならまだしも、こんな田舎町で店のメニューを片っ端か注文する大食らいは珍しい。

しかし、大男ではなく、小柄な“少年”というのが、周りを非常に驚かせた。

山積みになった空の皿がテーブルに積み上げられていく。

そのようすを見ていたカウンター席の男が、マスターにひそひそ話をする。

「あいつ化け物か？ 店の食いもん全部喰われるんじゃないかねえか？」

「そりゃ困るよ。あんな客想定外だ。店の食料だって町のものと、外からたまにくる、普通

”の客の分くらいしか用意してないよ”

マスターは溜め息を落とした。

一時的に売り上げが伸びても、食料が底について臨時休業となれば、結局は同じ売り上げになっってしまう。それに常連たちには文句を言われることだろう。

救いがあるとしたら、あの客が酒を注文しなかったことだろう。

「もし食料が底をついちまったら、常連さんには酒だけを出すしかないな」

つぶやいてマスターは大食らいの客からもらった金を数えはじめた。

この店では常連でない者からは、先払いで金をもらうことにしている。それが今回は仇となった。こんな金の大事な時代だからこそ、金を目の前に出されたら、それを突き返して帰ってくれとは言えない。

フードを目深に被っていた少年がマスターに顔を向けて、大きく手を振った。

「おい、おっさん！ この肉料理うまいから五人目くらい追加、

金はここに置いとくぜ」

大食いでも周りを驚かせたが、金の羽振りの良さも目を引いた。テーブル席の三人組も“少年”の話をひそひそとしていた。

「あいつ何もんなんだ？」

「俺さつき便所行くとき見たんだが、ただの餓鬼だったぜ。そうだな、歳はやつと毛が生えそろつたつてところじゃねえか？」

「そんな餓鬼がなんであんな金持つてるんだよ？」

「盗みでもしたんじゃないか？ それ以外考えられるか？」

二人が話している中、同じ席の男はひとり黙っていた。顔が少し青いような気もする。

心配になった仲間が声をかける。

「腹でも痛いのか？ 飯も酒も進んでないぞ？」

「……俺も便所に行くとき見たんだよ、あいつの顔」

青い顔の男が重い口を開いた。

二人の仲間の視線が青い顔の男に強く刺さった。

なにを怯えているんだこいつ？

そして、青い顔の男は再び重い口を開くのだった。

「保安所の壁に貼つてあつた賞金首にそっくりなんだよ……あいつ」

「どうせちゃんけな盗人で三〇〇イエンくらいの賞金だろ？」

少額の賞金首であつたなら、男はこれほどまで青い顔をして怯えるだろうか？

轟音！

店のドアが破壊され、武装した屈強な男たちが続々と店内に入ってきた。

人数は五人。先頭に立っている男は、ほかの者よりも身体が一回り大きく、リーダーの風格が伺える。

リーダーの男が店内を見回した。

「一〇〇万イエンの賞金首はどいつだ！」

この屈強な武装集団が店内に現れた衝撃を凌ぐ一言だった。

一〇〇万イエンと言えば夢の金額だ。貧困層は一生掛かっても稼ぐことのできない金額。そんな賞金を出せる者も限られてくる。

テーブル席に男がつぶやく。

「二桁間違つてんじゃねえか？」

同じ席で青い顔をしていた男は首を横に振った。

「本当だ、三ヶ月の前の噂知ってるだろ……あいつが“雷獣”だつたんだよ」

“三ヶ月前”で通じる話題と言えば、クーロンでの事件だ。

クーロンに現れたシユラ帝國の巨大飛空艇キユクロプスが放った魔導砲。それとは別の脅威も人々は見た。あれがなんだつたのか、未だに多くの人々は知らずに、数え切れない噂話が生まれた。

そして、同時期に高額な賞金首を懸けられたのが、“雷獣”の通り名を持つ“少年”だった。

賞金を懸けたのはシユラ帝國。事件との因果関係を誰もが勘ぐるだろう。

“少年”は屈強な男たちが乗り込んできたあとも、構わず食事を続けていた。まるで何事もなかったように。

リーダーに睨まれた客たちが次々と首を横に振る。俺は“雷獣”じゃないと。

そして、最後に残ったのが“少年”だった。

「テメエが“雷獣”か？」

リーダーが凄みを利かせて尋ねたが、“少年”は答えず食事を続けている。

次の瞬間、銃声が鳴り響き、“少年”がフォークで持ち上げていた肉に大穴が開いた。

“少年”は凍り付いたように動きを止めた。

子分の一人が笑い出した。

「ギャハハハッ、あの野郎、ビビって小便でも漏らしたんじゃないか？」

ほかの子分も続いた。

「一〇〇万イエンなんて何かの間違いだと思つたぜ」

同じ額の懸賞金を懸けられている男がいる “暗黒街の一

匹狼”だ。彼はその賞金にいたる悪評や噂の数々がある。それが“雷獣”にはなかった。

どこかで 歯車 の音がした。

“少年”が肉ごとフォークをテーブルに突き立てた刹那！

「俺の首狙うなら、顔くらい覚えてこいよ、なッ！」

店にいた者たちが気づいたときには、“少年”がリーダーの顔面を拳で抉った瞬間だった。

この場で誰よりも巨大のリーダーが大きく吹っ飛ばされ、後ろにいた子分たちを巻き添えに、ボーリングのピンのように次々と倒れた。

客たちは眼を剥いた。

しかし、これで終わりではなかった。

男たちは“雷獣”の意味を知ることになる。

“少年”が懐から隠し持っていた“銃”を抜いた。

閃光！

瞬く間に稲妻が店内を翔け抜けた。

雷音はまるで獅子の咆吼。

屈強な男たちは立ち上がる隙も与えられず、聞くに堪えないおぞましい絶叫をあげた。

魔導銃 グングニール の稲妻は、身体の芯から肉を焼いた。被っていたフードがいつの間にか取れていた“少年”

いや、少女アレンはマスターに顔向けた。

「さっきの肉料理まだかよ？」

店内に立ちたちこめる肉料理のような臭い。

客たちが一斉に嘔吐した。

平然とした顔をしているのはアレンだけ。その顔を見ただけで、幾つもの修羅場をくぐってきたことはわかる。

恐怖で言葉を失っていたマスターだったが、ついにこう言ったのだ。

「テーブルの金を持って……さっさと出てってくれ」  
ときにその言葉は命取りになる。相手はつい今し方、屈強な

男たちを一瞬で倒した一〇〇万の賞金首だ。

しかし、アレンは金を持たずに店の出口に向かって歩いた。「ごちそうさん、うまかったぜ。金は店の修理代にでもしてくれよ」

アレンは店を出た。

次の瞬間、緊張の糸が切れたマスターは気絶してぶっ倒れた。食事を済ませて、軽い運動もしたアレンは、店の裏に停めてあつたエアバイクを取りに向かった。

店の裏まで来ると、なにやら三人組の男たちがエアバイクの周りを囲んでいた。

「おい、タイヤがないけど大丈夫かよ？」

「バラしてジャンク屋に売れば問題ないだろ」

「そうだな、さっさと運んじまおうぜ」

そう言った男がエアバイクに触れた瞬間、バチバチと音と火花を散らせながら泡を吹いて気絶した。

周りの男たちは慌てて何もできない。

そこへアレンがやって来た。

「人様のもん盗もうとするからだぜ」

“失われたロストテクノロジー科学技術”の産物であるエアバイクの、行きすぎた防犯対策が発動したのだ。

アレンは戸惑って動けずにいる男たちを掻き分け、エアバイクに乗ろうとした。

「気絶しただけで命の心配はねえから、これに懲りたら盗みなんてするなよって伝えてくれ。あんたらもだぞ？」



仲間がやられ、説教までされた。

男たちはアレンが信じがたい額の賞金首だとは知らなかった。

目の前にいるのはただの餓鬼だ。

「よくもこの野郎！」

男がアレンに殴りかかった。

どこかで 齒車 の音がした。

「懲りてねえな糞野郎ッ！」

重いアレンの拳を喰らった男が五メートル以上吹っ飛んだ。

よろめいて五メートル下がったのではなく、宙を五メートルも  
の距離を跳んだのだ。

残る一人の男は仲間を置いて走って逃げてしまった。

アレンは特に追うこともしない。降りかかる火の粉は払って  
も、遠くの火元まで消すのが面倒だった。

エアバイクに乗って走り出す。高度はあまり出ていない。地  
表から二〇センチ程度の高さを飛行している。

高度を上げれば、それだけエネルギーの消費も激しくなり、  
空を吹く風も強くなる。エアバイクにはバランス調整システム  
が搭載されているが、それでも高い高度での強風に煽られてし  
まう。それに、高度と風速と時速が加われば、それだけ体感温  
度は急激に下がる。エアバイクは高い高度を飛ぶようには設計  
されていないからだ。

町を出て砂漠地帯を走る。

砂漠と言ってもここは砂の広がる地帯ではなく、土砂漠だ。

この世界の砂漠の割合のうち、砂砂漠は四〇パーセントほど

である。残りを占めているのが岩石砂漠、礫砂漠<sup>れきさばく</sup>、土砂漠だ。

小高い丘に登るとアレンは遠くの景色を眺めた。

もう町は見えない。広がる景色はどこまでも砂漠。

空もまた、どこまでも広がっている。

降水量の少ない砂漠では、雲一つなく澄み切っている。

行く当てはない。

広がる砂漠と空になにもないのと同じで、アレンにも目的とする場所がなかった。

シュラ帝國に眼を付けられたために、同じ場所に長いもできなくなってしまうた。

一〇〇万の賞金首は途方もない額だ。そこまでの額になると、首を狙ってくるのは莫迦か自信がある者のどちらかだ。中途半端な者が狙ってくることはあまり少ない。

それでも時折、今日死ぬともわからない生活苦の女子供、年寄りに命を狙われたこともあった。そういうことがあってからは、なるべくそれなりの大きさがある町に立ち寄ることになっている。逆に大きすぎる町に行くと、顔が知れ渡っていることが多く、金の亡者どもがさらなる金を求めて狙ってくることも多い。

「……世の中どんどん住みづらくなってやがる」

アレンは吐き捨てて再びエアバイクを走らせた。

しばらく行く当てもなく走り続けていると、エアバイクが激しく上下に揺れた。風ではない。同じ高度を保っているのに大きく揺れたということは、地表に変化があったということだ。

崖が音を立てて崩れてきた。

「糞っ！」

ハンドルを切つて土砂を避けた。

だが、それで終わりではなかった。

まるで地の底で地獄の怪物が唸っているような地響き。

アレンの目の前で地面に亀裂が走った。

次の瞬間だった！

地中から水柱が天に向かって聳え立つたのだ。

噴き出した水にアレンは一瞬にして呑み込まれた。

濁流と共にアレンが亀裂の中に消える。

為す術もない出来事であつた。

威厳の象徴である広い玉座の間。

ヒールの音を響かせながら“ライオンヘア”がこの場に姿を見せた。

百獣の王で獅子が跪く相手　暴君ルオ。

「なんだい険しい顔をして？」

「またテロが起きたわ」

「規模は？」

「魔導炉が一つ、機能停止にまで追いやられたわ」

世界の電力を担っている魔導炉。その恩恵に預かっている大半は富裕層である。

シユラ帝國に対するテロ活動。一時は残酷無慈悲な帝國な所業を恐れ、なりを潜めていたが、ある時期からその活動が活発

になつて来た。

ル才は薄く微笑んだ。

「三ヶ月前から運氣が落ちたらしい」

「貴方ともあるう御方が、運などに左右されるのかしら？」

「いや、朕に切り開けぬ道などない」

その絶対たる自信。それがなければ、幼くしてシユラ帝國に君臨し、武力と恐怖よる政治は行えない。

シユラ帝國の皇帝が皇帝であるためには、人間を捨てた強靱な精神と力を持った魔人でなければならぬのだ。

運氣が落ちたという発言は弱音を吐いたわけではない。その状況を楽しんでいるのだ。

「弱い者を甚振つたところで楽しくもない。さて、魔導炉を機能停止に追い込んだ彼らは、今とても達成感に溢れ、シユラ帝國に一矢を報いたつもりになり図に乗っていることだろう。叩くには良い頃合いだと思うだろう？」

「ええ、叩くのなら容赦なく」

「そうだ、久しぶりに鬼兵団に任せてみるか。三ヶ月前の働きはろくなものではなかったからね。名譽挽回のチャンスを与えてやるのも一興。今度は全員だ、全員この場に招集させる」

「御意のままに」

鬼兵団と言えばアレンたちに放たれた刺客だ。

第一の刺客であった水を操る水鬼は、あと一步までアレンを追い詰めたが、真の姿を見せたりリスによって葬られた。

第二の刺客であった鋼鉄の肉体を持つ金鬼は、トツシユとの

戦いの末に口腔に銃を乱射され死んだ。

果たして残る鬼兵団の能力は？

再びアレンたちの前に立ちはだかることはあるのか？

運命の女神は時に残酷だ。

《2》

クーロンの住人にも忘れられてしまった廃れた教会。

神父が亡くなってからは、より廃れる一方だった。

三ヶ月前までは建物自体も崩れ落ちそうなほどだったが、今ではある者の援助によって、壊れた箇所や痛んでいた箇所が修復され、小綺麗な教会に生まれ変わった。

建物が生まれ変わっても、住人たちの心は変わらず、迷った仔羊すら教会に訪れる者はいない。

そんな教会であっても、シスター・セレンはこの場所を見放すことはなかった。

セレンもまたシユラ帝國に仇をなし、顔もこの場所も知られている。指名手配こそされなかったものの、教会に留まることは危険極まりない行為だった。

覚悟を決めてセレンはこの場にいる。

あれから三ヶ月経つが、なぜか未だに帝國はこの場に姿を見せることはなかった。その沈黙が逆に恐ろしくセレンを不安にさせる。

今日か、それとも明日か、寝ても覚めても帝國が現れること

に恐怖する。

とても辛かった。

慕っていたシスターが亡くなり、神父も亡くなり、独りになつてしまつてから、これほどまで独りということが恐ろしいと感じたことはなかった。

短い間であつたがアレンたちと行動し、危険な目に遭つて命を失いそうにもなつた。

それでも今の方が何倍も苦しい。

もしかしたら、アレンやトツシユとの関係が切れたから、帝國が現れないのかもしれない。

何を選ぶのかと訊かれたら、セレンは教会を選ぶ。

そのためなら、独りでも耐えられる。

セレンはだれも見えていなくても、笑顔を忘れない。

いや、だれも見えていないわけではない。

教会の裏庭に咲き誇る花々　彼らがちゃんと見守つていてくれる。

今のセレンの心を癒やしてくれるのは、この花々だった。

枯れた大地に色とりどりの花は珍しい。

クーロンは大都市で水もほかの地域に比べればあるが、それでもこんなに綺麗な花は珍しい。

セレンが水をやり、ときに鼻歌を聴かせ、丹念に育てた花。

それはセレンの心を癒やすと共に、生活費として生きる糧にもなつていた。

ほかの町や村では人々は花になど見向きもしないだろう。貧

「困層にとつて、花など腹の足しにはならない。クーロンは貧困層も多いが、富裕層も多く済んでおり、生活落差の激しい町だ。富裕層には少なからず、花を買ってくれる者がいるのだ。」

花壇の横には水路がある。クーロンの井戸などの水は浄化しなければ飲めないが、ここの水が水源が違つのか、澄み切つた綺麗な水だつた。

そして土も違つう。

水は元々この場所に湧いていたものだが、肥沃な土は神父が遠くから運んできたもので、さらにそこへ動物の死骸や野菜の残り滓を埋めて肥料にして育てた土だ。

少し心配な顔をしてセレンは花々を見つめた。最近、花の育ちが悪い。土のせいか、水のせいか、原因はわからない。

セレンは水を汲み、やかんを改造したジョウロで水を撒きはじめた。

先端を蓮口に改造されたやかんからは、シャワー状の水が優しく噴き出る。

甘い風の匂い。

上機嫌になつたセレンは鼻歌を歌い出した。

このときは帝國の恐怖などすっかり忘れている。

警戒心もなく、心穏やかに花と向き合う。

だから近付いて来た気配にまったく気づきもしなかったのだ。

「こんにちは」

優しい女性の声だつた。

驚いてセレンは振り向いた。

そのとき、ジヨウ口の水が相手のドレスに！

「あつ、ごめんなさい！」

「大丈夫ですよ、この花も水が欲しかったのでしょ？」

気品のある顔つきの女性は、そのドレスも大輪の花のように美しかった。

セレンはハンカチを持っておらず、自らの服で女性のドレスを拭こうと慌てた。

「本当にごめんなさい。突然だったもので、驚いてしまって、ごめんなさい」

「ですから、大丈夫ですよ。このドレスも綺麗な水が頂けて喜んでおりますわ」

花のような笑顔だった。

その笑顔に同性ながらセレンはドキツとした。

すぐにセレンは女性に見られていることが恥ずかしくなってきた。

同じ女性として、向こうは美しい花のようなドレスを着こなして、こちらは雑巾のように薄汚れた質素な尼僧服だ。

この尼僧服が気に入らないわけではない。愛着を持って大事にしている。それでも、こんな美しいドレスを見せられてしまったら、羨ましく思ってしまうのは仕方がないことだった。

ぼうつとセレンがしていると、女性の声が現実を引き戻した。「どうかなさいましたか？」

「あつ、いえ、美しい方だなあつて……はっ」

セレンは息の呑んで口を嚙んだ。つい口に出して言ってしまった



った。

「ありがとう、嬉しいわ」

嫌みのない笑みで女性は答えた。

この場の空気と女性は見事に溶け込んでいる。それがセレンには複雑な思いだった。

教会を今まで独りで守ってきて、自分の居場所はここしかないのに、一瞬にして花のドレスを着た女性は、咲き誇る庭園を我が景色にしてしまった。

セレンは気負いながらも、静かに対抗心を燃やした。

「あの、この教会のなんのようですか？」

あくまで女性はこの教会の住人ではない。何かの用で訪れた客人だ。

「花の匂いに誘われて……わたくし花が大好きで、花を売っている方がいると聞いて、ここまで出向いたのですが？」

「そうなんですか！」

セレンの心に花が咲いた。

自分の育てた花がもらわれていくのは、寂しくもあるが、それ以上に嬉しいことだった。

「どの花になさいますか？」

笑顔でセレンは尋ねた。

「そうね、二本ほどあなたが選んでくれるかしら。できれば、土ごと頂きたいのだけれど、よろしい？」

「はい！ 鉢がないので、新聞で土を包むことになりましたけど大丈夫ですか？ あっ、溢れないように何重にもして、丈夫に

包みますから」

「あなたにお任せいたしますわ」

「ちよつと待っててください新聞紙を取りに行つて……？」

セレンが走り出そうとしたとき、地面が少し揺れた。

だんだんと揺れが激しくなる。

地響きが聞こえた！

立つていられなくなつたセレンが地面に手をつく。

地の底で何かが流れているのがわかつた。

眼を丸くしたセレン。

地の底から水柱が天に昇つたのを目撃したのだ。

まさに土砂降りであつた。

地中から水と共に噴き上がった土砂が、空から降つてきた。

それだけではない。

なにが起きたのかわからぬまま、セレンは鉄砲水に呑み込まれ流されてしまつた。

叫び声すらあげられない。口を開ければ泥水が口の中に入つてくる。

流されたセレンは教会の壁に激しく打ち付けられた。

「うっ」

徐々に水が引いていく。

泥だらけになりながらセレンは立ち上がった。

「ああ……そんな……」

絶望的な声をセレンは漏らした。

美しく力強く咲いていた花々が刹那にして土砂に埋もれた。

同じく泥だらけになった女性がセレンに近付いてきた。

「大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。あなたこそお怪我はありませんか？ ドレスもそんなに汚れてしまつて」

「ご心配なく。それよりも……」

女性は少し離れた地面に視線を向けた。

同じ方向を見たセレンは、あまりの驚きにそれが現実だと思えなかつた。

「アレンさん！」

「水といつしよに噴き上げられてきたらしいですわね」

「そんなことが……それよりも今は！」

セレンはアレンに駆け寄つた。

泥だらけのアレンは気を失っている。

「アレンさん！ アレンさん！」

セレンの呼びかけにも答えず、蒼白い顔をしてまるで死んだように動かない。

慌てながらセレンはアレンの呼吸と脈を調べたがよくわからない。

「脈が取れません！」

「慌てないで、落ち着いて、わたくしに代わつてくださる？」

改めて女性がアレンの呼吸と脈を確かめた。

「まだ生きているわ」

「本当ですか！」

「ええ、辛うじて」

「……あっ」

セレンの目の前で女性はアレンに唇を重ねた。  
その行為は人工呼吸というより、ただの接吻に見えた。  
静かに唇が離された。

「脈も呼吸も正常に戻りましたが……可笑しいですわね」

「可笑しいってなんですか？」

「息を吹き返さない……この子、半分死んでいるわ」

「……半分」

その言葉にセレンは思い当たることがあった。

鼠色の金属に覆われたアレンの右半身。

「なにか心当たりが？」

女性に尋ねられ、セレンは少し戸惑った。

「いえ、その……」

あのことを言っているものなのかわからない。

たしか……セレンがアレンの身体を見たのは、この教会での出来事だった。あのとき、金属の半身を見られたアレンは平然としていた。まったく隠すそぶりも見せなかったが、見られたあとだから開き直ったのかもしれないし、アレンの了解を得ずに話すことは躊躇われた。

女性はそれ以上の追求をしなかった。

「まずは彼女を運びましょう」

「えっ、女の子だってわかつたんですか!？」

「格好は荒くれの男のようだけれど、唇の柔らかさは誤魔化せないわ」

女性は微笑んで、アレンの身体を抱きかかえた。大の大人ではないとはいえ、アレンをひとりで抱えるのは大変だろう。すぐにセレンも支えた。

「こちらです、教会の中へ」

二人でアレンを教会の中まで運んだ。

隅々まで掃除してあった廊下は泥だけになってしまったが、今はそんなことを気にしている場合ではないだろう。

「シャワールームは？」

女性に尋ねられ、セレンは申し訳なさそうな顔をした。

「シャワーはありませんけど、お風呂場はこちらです」

まずはこの泥を落とさなければ。

風呂場に着くとセレンはポンプを動かし水を出した。そして、この場を女性に任せて部屋を飛び出そうとする。

「タオル持ってきました！」

風呂場を飛び出し、急いでセレンは大きめのタオルをいくつも持って帰ってきた。

「あっ！」

セレンは顔を赤くして目を伏せた。

「すみません！」

再び風呂場に飛び込むと、女性もアレンも裸になっていたのだ。  
だ。

「同じ女同士なのだから気にしないで。あなたも泥を流して着替えたほうがいいわ」

「あ、あっ……は、はい」

少しセレンは恥ずかしそうにしながらも服を脱ぎはじめた。

ふと、セレンの脳裏に思い出される過去の記憶。

母のように、ときには姉のように慕っていたシスター・ラフアディナ。昔はよく彼女とお風呂に入っていた。懐かしく温かい記憶だ。

風呂場に飛び込んだ拍子に、二人の裸を見てしまったせいで考えが及ばなかったが、今さらながらセレンは気づいた。

「彼女の身体……驚かれましたか？」

アレンの身体を見られてしまった。あのとき口ごもったことも、意味を失ってしまった。

「ええ、こんな人間がいるなんて信じられないわ」

“失われし科学技術”の時代ならまだしも、今の時代にはありえない技術。医術と言うべきか科学と言うべきか、半身を機械に覆われた人間が存在していた事実。誰もが驚愕するだろう。自分たちとアレンの身体を洗い、バスタオルに来るんだアレンをセレンの部屋のベッドまで運んだ。

セレンと女性はバスタオルを身体を巻いて、着替える間もなくアレンの看病をした。

女性がアレンの様態を診る。

「様態は変わらないわ。良くもならず、悪くもならず、まだ半分死んでいる……」

「やはりお医者様を……でもお金が」

医者を呼ぶという選択は、意識を失ったアレンを見つけたときから考えていた。だが、ネックだったのは治療代だ。

「医者と呼ばなくていいわ。わたくしの見立てでは、ただの医者では治せないでしょう」

「もしかしてあなたはお医者様なのですか？」

「多少の心得はあるけれど、医者ではないわ」

「そういえば、名前を伺っていませんでした。わたしの名前はセレンと言います」

「あなたの名前は伺っているわ。わたくしの名はフローラ」

「わたしの名前を？」

「この場所を教えて頂いたときに、あなたの名前もいつしよに」

フローラは笑みを浮かべた。

「どなたから聞いたんですか？」

「うふふ、秘密。それよりも服を貸していただけるかしら？」

「ああ、気が利かなくてすみません。尼僧服しかありませんけど、それでよろしいですか？」

「ええ、ありがとう」

すぐにセレンは別の部屋に服を取りに行った。

部屋に戻ってきたセレンが持っている尼僧服はラファディナの遺品だった。

「フローラさんのドレスに比べたら粗末な服ですが……」

「どんな服でも構わないわ」

服を受け取り着替えをするフローラ。

セレンも着替えを済ませ、アレンも着替えをさせることにした。やはり服は尼僧服しかなく、セレンの物を着せた。

尼僧服を着たアレンの姿はセレンを驚かせるものだった。

「女の子みたい……あつ、はじめから女の子でした」

あとは髪を切って梳かせば、より女の子らしく見えるだろう。振る舞いや格好は少年だとしても、やはり少女なのだ。

セレンはアレンの手を握った。

「冷たい……このまま目を覚まさないなんてこと……フローラさん？」

悲痛な表情でセレンはフローラを見つめた。

「わたくしにもわからないわ。その子の状態を看ることのできる方は、医術ではなく、その半身の機械に精通した方でしょう」

アレンを助けるにはどうしたらいいのか？

大魔導師リリス。

その名がセレンの脳裏に浮かんだ。

しかし、問題はセレンがリリスの居場所を知らないことだった。

以前、リリスの家に行ったことがあるが、道はトツシユに任せていたために覚えていない。

そうなるとまずはトツシユを探さなければならぬ。だが、セレンはトツシユに居場所すら知らなかった。「あれ」から会ってもいないのだ。

アレンの意識が戻らないまま、様態が悪化してしまったら？ リリスやトツシユを探している間にも、そうならないとは限らない。



「あの人がこの町にいるかどうかも……」

独り言をつぶやいてしまったセレンにフローラは尋ねる。

「あの人？ その方がこの子を治せる方なの？」

「あいつ、違います。治せる可能性がある方は別の方なんですけど、その方の居場所を知っている方がまた別の方で……トッシュさんって言う方なんですけど」

「“暗黒街の一匹狼”と呼ばれていた方かしら？」

その通り名を出されてセレンは不味いと思った。評判の良い名前だ。セレンまでも同じと思われ、距離を置かれる可能性もある。距離を置かれるだけならまだしも、災難が降ってくる可能性もある。

不味いと思いつつも、セレンは消極的に首を縦に振った。

その嘘を付かなかつた行為が岐路を見いだしたので。

「その方ならよく存じ上げているわ。もちろん居場所も知っているわ」

「本当ですか!？」

「ええ、すぐに連絡をつけてみましょう」

「ありがとうございます！」

こうして再び齒車は回りはじめた。

《 3 》

「おう、久しぶりだなシスター。フローラその服はどうした？」

「少し汚してしまったのよ」

居場所を知っているというだけではなく、顔見知り以上らしい。

三ヶ月前となに一つ変わらないトツシユの姿。

しかし、大きく変わった点があった 周りだ。

“暗黒街の一匹狼”が群れていた。

酒場ならまだしも、酒もない場所で仲間たちといっしょにいたのだ。しかも、セレンの顔を見る寸前まで、真面目な顔つきで話し合いをしていた。

このことについて、道すがらセレンはフローラから話を聞いていた。

同じ環境保護団体で活動しているのよ。

と、フローラが言ったときには、セレンは言葉を失ってしまった。

同じ話を聞いて驚くのセレンだけではないだろう。“暗黒街の一匹狼”と環境保護団体というのは、冗談もいいところだ。

環境保護団体というが、集まっている面子の中には、がたいの良く血の気が多そうな者も多かった。

セレンは冗談でも言われたのかと思って、フローラに尋ねる。  
「本当に環境保護団体なんですか？」

「ええ」

と言ったフローラは見た目が合致しているが。

「本当に本当ですか？ だって、そこに置いてあるの銃ですよ  
ね？」

セレンの視線の先には壁に立てかけてあるライフルがあった。「ええ、本当よ。ただあなたが想像していたものとは、少し違ったのかもしれないわね。この名を聞いたことがないかしらジード」

「まさかそんなフローラさんが……」

フローラが発した名前を聞いてセレンは驚きを隠せない。もしそうだとしたら、セレンには似つかわしくない場所だ。逆にトツシユがいる理由は少なからず理解できるようになる。

ジードはここ最近頻繁に新聞に載っている団体だ。

ここに来るまでにセレンは可笑しいと思った点がじつはあったのだ。

まずこの場所が飯店の地下にあり、隠し扉と隠し通路を使って通ってきたこと。さらに見張りの者たちが武器を見えるように携帯していたこと。とても穏やかな空気とは言えなかった。それらの見てきたものが、フローラの言葉を裏付けてしまっている。

世間を賑わすジードは環境保護団体などと呼ばれていない。

「テロリストだったんですか!!」

セレンが叫んだ。

一瞬にして部屋に殺気が張り巡らされた。

周りにいた者の眼がセレンを捕らえて放さない。

今の発言がこの空気をつくってしまったことにセレンは気づいた。

助け船を出してくれたのはトツシユだった。

「まあ、新聞にもそう書かれてるからな。シスターがそう言うのも無理はない。おまえらもそう怖い顔するな、本当にテロリストみたいだぞ？」

殺気が治まった。

しかし、セレンはここにいるのが気まずくなくなった。

フローラが微笑む。

「奥の事務所で話しましょう。トツシユも早く来て」

セレンを逃がすように三人は事務所に入った。

部屋に入るとすぐにトツシユはテーブルに寄りかかって煙草を吸いはじめた。

「で、シスターがなんの用だ？」

「アレンさんのことで……」

「あいつか……帰ってくれ、俺は今とても平和に暮らしてるんだ」

周りからテロリスト呼ばわりされる団体にいながら、平和とはよく言えたものだ。

話も聞かずに追い返そうとするトツシユにセレンは詰め寄った。

「話ぐらい聞いてください、アレンさんが意識不明で大変なんです！」

「だから俺様になにをしろって言うんだ？ あいつを助ける義理なんて俺様にはないぞ。早く帰れ、アレンのこともほっとけ。俺様とあいつに関わらないことがシスターの身のためでもあるんだ」

「わたしだってあなたやアレンと関わりたいわけじゃありません。わたしだって平和に暮らしたい……でも、目の前に困っている人がいたら助けてあげたいと思うのが当然じゃないですか！」

必死な訴えはトツシユに伝わるのか？

「当たり前だと思ってるのは“お嬢ちゃん”だけだ。クーロンなんて街に住んでるクセに、世の中のことがまったくわかってないんだな」

「わたしだって世の中のことくらい……」

「わかつてない。シスターはクーロンにいる困ってる奴をいつも片っ端から助けてるっていうのか？」

「それは……」

「そりゃ助けてないよなあ。でもそういう奴がいることは知ってるはずだ。知っていても眼に入れないようにして、教会なんかに閉じこもってるんだらう？」

「もういいです、あなたなんか頼みません！」

啖呵を切つてセレンはトツシユに背を向けた。背を向けてから後悔をする。アレンを助けたいと思つてここまで来たのに、自分の一時の感情のせいでアレンを助けられなくなつてしまふかもしれない。

セレンが謝ろうとしたとき。

「彼女のことを助けてあげて」

フローラが優しく言った。

次の瞬間、空気ががらつと変わった。

「俺様がどんな奴でも助けてやるよ！」

トツシユは凜々しい顔をしてフローラに視線を送った。

変わり身の早さにセレンは唾然とした。そしてすぐに悟ったのだ。トツシユがフローラにどのような感情を抱いているか。

どう見ても今のトツシユの行為は、女の前で格好をつけたい男だ。そうする理由は一つだろう。

セレンはフローラの表情から、そのあたりの感情を察しようとしたが、こちらの想いはよくわからなかった。

別人のようなやる気を見せてくるトツシユ。

「俺様はなにをしたらいい？ 具体的な何かがあつて俺様を尋ねて来たんだろう？」

迫ってきたトツシユの気合いに押されてセレンが後退る。

「ええっと、リリスさんの家の場所を教えてもらえるだけでいいんですけど」

「よしわかった、車に乗せてつてやる」

話がとんとん拍子で進んでいく。

さらにトツシユが迫ってくる。

「アレンはどこにいる？」

これに答えたのはフローラだ。

「医務室に運んでもらったわ」

教会にひとりで残しておくわけにはいかず、手間取ったがここまで運んできた。

トツシユは大きく懐いた。

「ならすぐにも出発だ。フローラはどうする？」

「わたくしはここに残るわ。ジードの活動があるもの」

「そうだな……」

少しトツシユはうつむいて寂しそうな顔をした。とてもわかりやすい。

そしてトツシユは顔をあげた。

「さつき仲間と話し合ったんだが、やはり次のリーダーはフローラがいいとみんな言っている」

「困るわ、わたくしのいないところで話をするなんてずるい。

リーダー代行はしても、リーダーをやって皆さんを引っ張る器なんてないもの」

「そんなことあるか、みんながフローラを指示してるんだ」

「考えておくわ」

「みんなもいい返事を期待してる。よし、行くかシスター？」

トツシユに顔を向けられたセレンは頷いた。

「はい、いつアレンさんの様態が悪化するとわかりませんか、早く行きましょう」

こうして再び三人でリリスの元へ行くことになった。

まるで歴史が繰り返しているようだ。

玉座の間に集まった鬼兵団の数は三名。

ルオは不機嫌そうだった。

「二人ほど足りないようだな、朕は全員と言った筈だが？」  
皇帝を前に跪いている三人。

後ろの二人のうち、一人目は東方にかつて存在した花魁の格好をした狐顔の女。紅い着物が眼に焼き付く名は 火鬼<sup>かき</sup>。

横にいる土気色の肌をした大男。殺された金鬼の弟である土鬼<sup>どき</sup>。

そして、一步前に跪いている黒く塗りつぶされた仮面を被っている性別も不明な者。この者が鬼兵団のリーダーである  
隠形鬼<sup>おんぎょうき</sup>。

「鬼兵団八元ヨリ結束シテ集マツタ集団デハナイ故、自由ナ思想ヲ持ツテ招集ニ応ジル応ジサナイモ団員ノ自由」

隠形鬼の仮面の下から発せられた声は、まるで合成音のような響きをしていた。

ルオを守護していた 黒の剣 が唸った。

刹那、隠形鬼の首を突き刺そうと 黒い剣 が翔けた。

誰一人この場を動かなかった。動けなかったのではなく、動く必要がなかった。

「フフフツ、才戯レヲ」

黒の剣 は隠形鬼の前で止まっていた。切つ先が震えている。真横からでは何も見えなかったが、九〇度視点を変えると底には魔法陣が宙に浮いており、それが盾となつて 黒の剣 を受けていた。

さらに驚くべきことに切つ先を向けられ、魔法陣に守られているのはライザだった。

「なぜアタクシがここに!？」

本人すらそこにいたことを驚いた。



そして、本物の隱形鬼は平然とルオの真横に立っていた。

ルオは驚くことなく、黒の剣を鎮めて自分の元へ呼び寄せた。もう黒の剣に殺意はない。殺気は常に放っているが、「噂通りの実力というわけか……面白い。もっと面白い物を見せるといふなら、招集の件は不問にいたそう」

「今ノハホンノ余興デ御座イマス。御依頼ガアレバ何ナリト」

「ライザ、話してやれ」

「畏まりました」

返事をしたライザは鬼兵団に向けて話し出す。

「ジードというテロリスト集団はもちろん知ってるわね？」

「おら知らね」

口を挟んだ土鬼の頭を火鬼が引っぱらいた。

「あんたは莫迦なんだから黙ってな。どうぞ獅子の姐さん、話をお続けになってくんまし」

ライザは少し調子を狂わせられながら、話を続けることにした。

「ただの小うるさい蠅かと思っていたら、ついに昨日ジードにしてやられたわ。昨日起きたシュラ帝国領での大規模停電はそいつらのせいよ」

どこからか小さな笑い声が聞こえた。笑いの主は隱形鬼だった。

「ウッフフツ、魔導炉ガ破壊サレタト言ウノハ、嘘デハナカッタト言ウ訳カ」

ライザは鋭い眼で隱形鬼を睨んだ。

「うるさい蠅がこの部屋にもいるのかしら？ まあいいわ、アナタたちにはジードの壊滅、そしてリーダーと、ある男をルオ様の御前に突き出して頂戴」

ルオの眉が一瞬上がった。皇帝の知らない事柄があったらしい。

「ある男とは誰だい？」

「ジードにはある男が噛んでいることがわかったのよ……」暗黒街の一匹狼」

その名を聞いてルオが妖しく微笑んだ。

「面白い、久しく名を聞かんと思っていたら、ジードと行動を共にしていたとはね」

急にライザはルオに背を向けて、通信機を取り出してひそひそと話しはじめた。

そして、通信が終わると再びルオに顔を向けた。

「失礼したわ、緊急の連絡だったもので。シスター・セレンが動き出したそうよ」

セレンは帝國に見張られていた。それを示唆する言葉だった。帝國がセレンの前に現れなかったのは、ずっと密かに監視していたからだだったのだ。

「トツシユ、セレン、君のお気に入りの名前は拳がってこないのかな？」

ルオはライザに微笑みかけた。

「いえ、今のところは。シスター・セレンの動きに関して、まだまだ未確認の情報が多いわ。伝わってきた話によると、謎の女

がシスターの元に訪れた直後、教会の敷地から水柱が上がったとか何とか。その後、しばらくして数人の男が教会を訪れ、謎の荷物を運び出し、シスターと謎の女はどこかに向かったそう……水柱と荷物、謎の女、なんの関係があるのか今のところはわからないわ」

荷物はおそらくアレンだ。帝國はそれに気づいていない。

アレン、セレン、トツシユが再会し、帝國が再び動き出す。

放置されていた土鬼は胡座をかいていた。火鬼も痺れを切れして足を少しずつ崩そうとしている。

隠形鬼が口を開く。

「我々ノ話モ進メテ欲シイノダガ？」

ルオがライザに向かって顎をしゃくった。話を進めてやれという合図だ。

「依頼内容はさっき言ったとおりよ。報酬はトツシユの懸賞金も込みで三〇〇万イエンでどうかしら？」

火鬼が少女のような笑顔を見せた。

「さすがシユラ帝國、太っ腹でありんす。お頭様、お勤めはもちろんここにいる三人で、報酬も当然三人で山分けでありんすか？」

「ソレデ良カロウ」

鬼兵団が話していると、ライザは緊急の通信を再び受けていた。

ライザは楽しそうに笑っていた。

「うふふふつ、素晴らしい展開だわ。ルオ様、なんとシスター

・セレンとトツシユがいつしよに町を出たそうよ。まさかシスターの行き先がトツシユの元だったとは……少しは期待していたのよ、だってシスターが関わる人物は限られているもの」

その報告を耳にして隠形鬼は仲間尋ねる。

「サテ、とつしゅトヤラヲ誰ガ捕ラエニ行クカ。行キタイ者ハ居ルカ？」

「おらに殺らせてくれ」

土鬼が身を乗り出した。

すぐに火鬼が口を挟む。

「あんたわかつてんのかい？ 殺すんじゃないよ、生きたまま捕らえるんだ」

「あらをばかにするでねえ。兄じゃよりおらのほうがばかだねがった。兄じゃの敵だ、おらに殺らせてくれ」

「まことにわかっているのかねえ、この木偶の坊は？」

火鬼は心配そうだが、隠形鬼はそれを認めたようだ。

「良カロウ、とつしゅ八土鬼二任セル。シテ、じーどノ本拠地八何処ダ？」

ライザが答える。

「それもアナタたちに探してもらおうと思っただけねど、もうすぐわかるかもしれないわ。すべてシスター様のお導きよ」

シスター・セレンが線となり、点を繋いで行ったのだ。

その事実を知ったとき、セレンはどう思うのだろうか？

静まり返った砂漠。

生物たちは身を潜めているのか、それともここは死の砂漠なのか。

そんな砂漠でただ一つ動いてるジープの影があった。

砂を巻き上げ走るジープの車内では、茶色に布を頭から被り、ゴーグルをつけて運転をするトツシユの姿があった。

「そう言えばさつき奴の姿を見て驚いたんだが、なんで女の格好なんてしてるんだ？」

「アレンさんのことですか？」

「そうだよ、あの尼僧服ってシスターのものか？」

「そうです、わたしの物を着せました」

「そーいやフローラも尼僧服だったよな？」

「それが……きゃっ!？」

急にハンドルが切られ、セレンの身体が大きく振られた。

ジープは止まってしまっている。

「すまねえ、いきなりサンドマンタが飛び出して来やがったんだ」

「本当だ、まだ小さい子供ですかね？」

砂の上を跳ぶように泳ぐサンドマンタが、ジープからどんどん遠ざかっていくのが見えた。

再びトツシユがアクセルを踏んだ。

「それで尼僧服を着ている理由はどうしてだ？」

「えっと、それがですね、教会の裏庭から水が噴き出してきて、それがちよつとじゃないんですよ。わたし滝つて見たことなんですけど、きつとあんな感じだと思えます」

「俺も滝なんて見たことないからよくわからんな」

「そのせいで泥だらけになってしまつて。あつ、それだけじゃないんですよ、アレンさんがその水といっしょに出てきたんです？」

「ハア？」

庭から水が噴き出したとか、アレンが出てきたとか、話だけではにわかには信じがたいのは当然だろう。

「『ハア』じゃなくて、フローラさんだつていっしょにいたんですから」

「とにかくその野郎は溺れて瀕死つてわけだな。溺れ死になんて滅多にできる経験じゃないな……」

「まだアレンさんは死んでませんから！ それにトツシユさんだつて大量の水の中に投げ込まれたら泳げるんですか？」

「泳げるわけないだろ。シスターも泳げないだろう？」

「泳げませんよ。泳ぐつてそもそもどういふときに必要なんですか？」

「庭から水が噴き出してきたときだろう？」

二人の会話からもわかるように、水の中を泳ぐという行為は非日常なのだ。水の乏しい地域では、それが当たり前だった。急にトツシユがハンドルを切った。

「糞ッ！」

「きゃっ!?」

砂の中から飛び出してきたサンドマンタ。影は一つではなく五以上。小規模な群れだ。

「おいおい、なんでこつち来るんだ?」

トツシユは慌ててアクセルを踏んだ。

岩のように硬い皮膚を持ったサンドマンタの群れが向かってくる。いや、襲ってくる。

荒々しい運転で車体が弾み、セレンの身体も上下左右に大きく振られた。

「ちよつと、アレんさんが後ろで寝てるんですから!」

「知るか、シスターはこの状況がわかってるのか?」

「わかりませんよ!」

「わからないのになんで強気なんだよ。とにかく武器だ、巨大害虫用のバズーカが後ろに積んであるから取ってくれ」

助手席に乗っていたセレンは揺れる車内で後ろを向き、座席に膝を突いて後部座席に身を乗り出した。

「アレんさんしか乗ってませんけど?」

「あるはずだ、もつとちゃんと探せ!」

「ん……ううん……もあ!」

セレンが膝を浮かせた瞬間、サンドマンタがジープの側面に激突した。

激突の振動よりも、躲そうとしたハンドル操作のために、車内が大きく揺られてセレンが振り落とされそうになってしまった!  
た!

「きゃっ！」

このときセレンはバズーカを掴んだときだった。

バズーカがセレンの手を離れた。投げられたように車外へ放り出され、砂漠の海に沈む。

この事態にトツシユは気づいていない。

「おい、バズーカはまだか？」

セレンは返事ができなかった。静かに席に座って黙り込む。

「シスター聞いているのか？ バズーカはどうしたんだ？」

「それが……落としちゃいました」

「落とした？」

「車の外に……」

「……………」

サンドマンタはまだまだ追撃をやめない。

こうなったら逃げ切るしかない。

「シスター掴まれ、放り出されたら自分を怨むんだな！」

それから必死で逃げた。

広い砂漠をどこまでも逃げた。

ようやく土砂漠まで来ると、サンドマンタはいつの間にか見えなくなっていた。さすがに固い地面では追ってこれないのだ。

一息ついたトツシユは煙草に火を点けた。

「なんでサンドマンタが……普通ジープなんて襲って来ないぞ？」

「もしかしてですけど、あの前に子供のサンドマンタを見たじ



やないですか？ あれと関係があったりして」

「どうだろうな、とにかく助かったんだ。このツケは別にツケとくからな」

「わたしにですか？」

「俺様は命の恩人だろう？」

「わかりました、そのうち返します」

たしかに車の運転をしてサンドマンタを振り切ったのはトツシュだ。けれど、セレンはなんだか納得いかなかった。

それからしばらく道なき道を走り続け、なにもない場所ですレーキがゆっくりと踏まれた。

「おかしいな。この辺りのはずなんだが？」

「もしかして道に迷ったなんてことありませんよね？」

「場所はこの辺りで合ってるはずなんだが……」

「そういうの迷ったって言うんじゃないんですか？」

「そうじゃないんだよ。場所はこの辺りのはずなんだ」

「トツシュさんがそう思っていて、実際にないんですから、道に迷ったって認めたらどうですか？」

セレンに責められトツシュは空を仰いだ。

車は再び走り出さない。

セレンも気晴らしにアレンの様子を見ようと、その身を後ろに向けたときだった。

「道におるのかのお？」

後部座席にいた妖婆リリス！

その声を聞いて驚いたトツシュも後ろに顔を向けた。

「婆さん……いや、リリス殿。砂漠の真ん中でどうして……？」

「ここはわしの家の前じゃて」

そんなはずはない。ここには何も……リリスの家があった。忽然とリリスの家が目の前にあったのだ。前と変わらぬ姿で、昔からそこにあったと言わんばかりに建っている。

あまりの出来事にセレンは言葉を失っているが、トツシユはすぐにその現実を受け入れた。

「俺様が正しかったことが証明されたわけだ」

トツシユが間違っていないかつたのだとしたら、リリスの家はここにあったのだろう。見えなくなっていたのか、それとも別の場所から現れたのかはわからないが。

やっとセレンは気を取り直した。

「アレンさんが目を覚まさないんです、助けてください！」

言われてリリスは被されていた布を捲り、アレンの顔を見た。

「とりあえずわしの家へ運ぶのじゃ」

トツシユがアレンを担いで家の中へ。

続いてセレンが入り、最後にリリスは砂漠の向こうを 視てから入り、ドアを閉めた。

家がおぼろげに消える。

その場に残されたのは一台のジープのみ。

鏡に映った“少女”の姿。

冷たい輝きを放つ金属が半身を覆っていた。

刹那に絶叫が響き渡った。

「どうしてこんな躰にしたッ！」

叫び声を上げながら飛び起きたアレンは、目の前の影に掴みかかった。

何重にも皺が波打っている老婆の顔。

「わしはおぬしを直しただけじゃ」

「これの……どこが……すまねえ、あんたか」

夢と現実の狭間にいたアレンが意識を取り戻した。目の前にいるのが妖婆リリスだと知ったのだ。

全裸のアレンは寝かされていた台の上から飛び降りた。

「着るもんあるか？」

「おぬし好みの襦袢いローブなら用意しておる」

「気が利くな姐ちゃん」

アレンはいつものも格好に着替えると、髪の毛を掻き毟るようにしてボサボサにした。少女らしさが消え、みすばらしい物乞いの少年ようになった。だが、その眼のは猛獣の輝きを放っている。見た目よりも、この眼の奥にあるモノが、アレンをより「少年」らしく見せているのかも知れない。

着替えを済ませて部屋を出ると、すぐにセレンと目が合った。

「アレンさん！」

心配そうな顔をして飛びついてこようとしたセレンをアレンは躲した。

「気持ち悪いから抱きつくなよ」

「だって……心配したんですから……抱きついたらいいじゃないですか」

「そのことなんだけどさ、なんで俺がここにいる、あんたらもここに居るわけ？」

まだ目を覚ましたばかりで状況が理解できない。

セレンが今までのことをアレンに聞かせた。

数分が経ち、話を聞き終えたアレンはセレンに一言。

「あんがとな」

無愛想に言った。

「わたしはなにも……見つけただけで、助けたのはみなさんで」

アレンとセレンの間にトツシュが割って入ってきた。

「おいおい、俺様にもちゃんと礼を言え。フローラにもだ。これは大きな貸しだからな」

「はいはい」

アレンは軽くあしらった。

あからさまな態度で、聞こえるようにトツシュは舌打ちをした。

「……っ糞餓鬼。やっぱり助けるんじゃないかった」

「あんたは慈善で俺を助けたわけじゃねえんだろ。貸し借りでイーブンだろ」

「おまえが貸しを返してはじめてイーブンだ」

「わかってるっの。で、どこに“道案内”して欲しいんだよ？」

「道案内なんておまえに頼むか！ そうだ、俺様たちの手伝いをしろ。きつとフローラも賛成する筈だ、フローラに返す借りも合わせてそれがいい」

「はあ？　なんであんたが他人のことまで決めるんだよ」

「フローラもそう望むに決まってる！」

「だ〜か〜ら〜！」

火花を散らす二人の間に決死の覚悟でセレンが入った。

「まあまあ二人とも落ち着いてください。まずはフローラさんに直接会って、アレンさんがお礼を言えればいいんじゃないですか？」

トツシユも頷いた。

「そうだな、もう用も済んだ。アジトに戻るついでにおまえも来い」

「俺がなんで行かなきゃなんねえんだよ」

また言い合いが加速する前に、セレンがアレンをなだめようとした。

「トツシユさんに言われたから行くんじゃないやなくて、アレンさんがフローラさんに会いに行くために行くんです。わかりましたよね、アレンさん？　フローラさんは命の恩人なんですよ？」

「わかったよ、行けばいいんだろ。姉ちゃん、あんたにもそのうち借りを返すから、用があつたら呼んでくれよな」

顔を向けられたリリスは破顔した。

「わしのはただの気まぐれじゃ、恩を感じる必要はないよ。どうして借りを返したいというのなら、そのシスターに感謝する

んだね」

言われたアレンはセレンを一瞥してすぐに顔を背けた。

トツシユはさっそく帰る準備をはじめた。

それを見たアレンは嫌そうな顔をした。

「もう帰るのかよ？ 俺腹減ってんだけど」

リリスが笑った。

「臍を直してもらって飯の催促かい？」

「俺の楽しみは寝ることと喰うことなんだよ。臍を直したついでに飯の借りもツケといてくれよ。なあセレン、あんたも疲れた顔してんだから休みたいだろ？」

そんな顔をしているのは、すべてアレンのせいだ。アレンもそれくらいわかっている。

「でも……」

口ごもるセレンにリリスは声をかける。

「たまの客人じゃ、もてなしてやるよ」

リリスもわかつていた。

髪をかき上げたトツシユがつぶやく。

「不器用な奴だな」

すぐにアレンが睨んできた。凶星だったのだ。

そして、セレンは鈍感だった。

「でもリリスさんにこれ以上ご迷惑をかけるのは……」

ここから先はアレンが強引に押し切る。

「もてなしてくれるって言ってるんだからいいだろ。俺は飯を喰いたい、あんたは休みたい」

「休みたいなんて言つてませんけど」

「顔に書いてあんだよ。トツシユからもなんか言つてやれよ」

「俺様は帰りたい。アジトでフローラが待つてるからな」

「こ、の、や、ろおゝっ！」

どこかで 齒車 の鳴る音がした。

アレンが床を蹴り上げようとした瞬間、その前にリリスが立ちはだかった。

「やめんかど阿呆！」

それはただのデコピンに見えた。だが、リリスのそれを喰らったアレンは、ニメートルは吹っ飛んだのだ。

「いつてーな、糞婆！」

「ほう、知っていてわしを“婆”と罵るか？」

いつにリリスまで敵に回してしまった。

「わしの家から出て行け！」

窓が独りでに開き、アレンの躰が浮いたと思うと外に放り出された。

慌ててセレンはドアから外に出た。

トツシユは普通に家をお邪魔した。

そして、家は消えたのだ。

蛙のように倒れていたアレンが顔を上げた。

その先にあつた巨大な人影。

「おめえら、どこ消えてた？」

外でアレンたちを待つていたのはジープだけではなかったのだ。

「おら待ちわびた。おめえらが消えちまったもんだから、こゝでずっと待ってたんだ」

土気色の肌の巨漢　土鬼だった。

立っているその全長は兄であつた金鬼を凌ぎ、五メートル近くはあるだろう。目の前に立つアレンが小人のようだ。

「とりあえず俺の知り合いじゃないけど？」

そう言つてアレンはセレンを通り越してトツシユに顔を向けた。

「俺様の知り合いでもない」

トツシユは残つたセレンを見た。

「わ、わたしも知りませんよ！」

三人とも初対面なので当たり前だろう。

土鬼の目的は　。

「トツシユはどうだ？」

すかさずアレンはトツシユを指差した。厄介事には巻き込まれたくないということだ。

トツシユが前に出た。

「俺様がトツシユだが……穏やかな用事じゃなさそうだな」

「おめえを殺しに来た」

すっかり任務を忘れていた。火鬼が心配したとおりだ。

「俺様を殺しに？」

「そうだ、兄者の敵だ」



「覚えがない」

と言いながらも、トツシユの脳裏に浮かんできた顔。まさしく鬼兵団の金鬼だった。よく似た兄弟だ。

トツシユは愛銃の レッドドラゴン を抜いた。

「弟のほうの実力は高そうだ！」

戦いの中で養ってきた眼はたしかだ。

ゆえに奇襲ともいうべき先制に打って出た。

ドラゴンの咆吼！

銃弾は心臓に向けて二発。その二発ともが土鬼の胸を貫いた。

土鬼が笑った。

血が噴き出ない!?

「おらは兄じやのようにばかでねえから、業を磨いて磨いて最強にしただ」

土鬼の躰が砂のように崩れ落ちる。

一体化。

もう土鬼がどこにいるのかわからない。

声はどこからともなく響いてくる。

「死ねーッ！」

姿を消したメリットを考えれば、攻撃は死角から来るはず。

そう予想していたトツシユは度肝を抜かれた。

「正面か！」

砂が一本の大きなドリルとなって飛んできた。

トツシユは横に飛んでどうにか躲した。もし、死角からの攻撃だったら、躲すのが遅れていただろう。

また土鬼は砂と同化してどこにいるのかわからない。  
大量の砂が動き出す。

手だ、人間を一掴みにできるほどの砂の手が現れた！  
巨大な影がトツシユに覆い被さる。

「俺様は虫じゃないぞ！」

砂にまみれながらトツシユが跳んだ。

まるでハエ叩きのように巨大な手が砂に打ち付けられた。

何度も跳んでトツシユが逃げる。巨大な手が地面を叩きながら追ってくる。

「糞ツ、人間がどうやって土塊つちくれに変わるんだ！俺様の知っている魔導の範疇を越えてやがる！」

レッドドラゴン が吼える。

しかし、銃弾は砂に虚しく埋もれるだけだ。

この怪物には物理的な攻撃が効かないのか？

肉体は臓器は脳はどこに消えた？

砂の一粒一粒が意志を持った生物だとも言うのか！？

トツシユは逃げることしかできなかった。

ただ見守っているだけのアレンとトツシユの目が合った。

「助けてやってもいいけど貸しな」

「なにが助けてやるだ、おまえにならどうかできるのか  
ツ！」

「そんなのやってみなきゃわかんねえよ」

アレンも策があるわけではないらしい。

何も出来ずにいるセレンが必死になってアレンに訴える。

「助けてあげてください、アレンさん！」

「あんたが助けてやれよ」

「それができないから頼んでるんです！」

セレンに太刀打ちができるわけがない。敵は人智を越えている。トツシユすら一方的な苦戦を強いられているのだ。

人智を越える。

現在の人智を越えた存在は“失われし科学技術”。

魔導と科学は突き詰めれば、同じモノに行き着く。どちらも自然の摂理に則った法則でありたっているもの。

砂の怪人土鬼にも仕掛けがあるはずだった。人の想像を超えた技術はまるで魔法のように見える。

しかし、トツシユは逃げるのに精一杯で、反撃すること、相手の弱点を考えることもできなかった。

巨大な手から土弾どたんが発射された！

トツシユは背中に一発目を受けた。今まで受けたどんなパンチよりも重く響く。

二発目は紙一重で躲した。

三発、四発と躲したが、五発目は思わぬところから飛んできた。

四発目が落ちた地面だ！

「くッ！」

脇腹を抉った土弾。

前や後ろならば、喰らったあとにバランスを立て直せたかもしれない。だが、逃げる途中、片足をあげていたときに喰らっ

た横の攻撃は、いとも簡単にトツシユの軀を倒したのだ。

立ち上がる動作は完全な隙だ。

トツシユは倒れると同時に、自らの意志で多く地面を回転した。立ち上がらず別の動作をしたのだ。

回転の最中、追撃の一弾を躲し、次が来る前に レッドドラゴン の引き金を引いた。

虚しく弾は土塊を貫通しただけだった。

それでもいい、零コンマ何秒でも相手に隙を作り、そこに岐路を見いだす。傷を与えるだけが攻撃ではない。

トツシユは笑った。

笑いかけられたのはアレンだった。

二人の距離はほんの目と鼻の先。土弾の餌食になるのは二人だった。

「この糞野郎、俺も巻き込む気か！」  
アレンが叫んだ。

「たまたま逃げた先がここだったただけだ」

トツシユは動揺ひとつ出さずにそう言った。だが、その笑みがアレンの言葉を裏付けていた。

魔導銃 グングニール をやむなく抜いたアレン。

「あんたを殺すか」

銃口がトツシユに向けられた。

さらにアレンは続ける。

「向こうを殺すか」

トツシユを殺せば敵の目的は達成される。敵を殺せば敵自体

がいなくなり襲ってこない。

グングニール の銃口はトツシユから外れない。

土弾が連発された。

流れ弾はアレンにも当たるだろう。

グングニール の引き金が引かれ、雷鳴が鳴り響いた。

幾重にも枝分かれしていく稲妻が土弾を貫通して翔け巡る。

伝導率が低い土塊に効果があるのか？

そもそも、電流という攻撃は無機物にどれほどまでの効果が

あるのか？

「グギョオオオオオツッ！」

土鬼の絶叫が響いた。

地に落ちた土弾。

トツシユがすぐに気がついた。

「火花か？」

稲妻を喰らった土弾から火花が出ている。

ただの土塊ではなかったのか？

「ナノマシンじゃよ」

老婆の声。

アレンの真後ろに妖婆リリスが立っていた。

そして、消えていた家が蜃気楼のように揺れながら見えてい

た。

「わしの家に電流を当ておつて、ど阿呆！」

リリスが平手打ちを放った。

軽い音を鳴らして頭を叩かれたアレン。

「いってーな。あんたの家のことなんて知るかよ」

おぼろげに見えるリリスの家。おそらくアレンの撃ったグングニール の電流によつて、なんらかの支障をきたしたのだらう。

支障をきたしたのはリリスの家だけではなかった。

「ガガガ……グガガ……ヨクモ……コロシテヤル」

土鬼もシヨートしていた。

大量の砂煙が舞い上がった。

土弾の雨。

無差別攻撃だ！

トツシュだけではない、アレンも、セレンまでも、そしてリリスにも襲い来る土弾。

この場の全員を敵に回した土鬼は愚かだらう。とくにリリスに手を出すべきではなかった。

「核はそこかい？」

妖しく輝いたリリスの瞳。

砂にまみれて一つだけ、拳ほどの石があった。見た目ではただの石だ。

リリスの手のひらでバチバチつと音がした。

稲妻がリリスの手から放たれる寸前！

巨大な炎の壁が視界を遮った。

「こなたの勝負、お待ちくんまし！」

炎を手にも宿しながら現れた花魁姿の火鬼だった。

視界を遮っていた炎が消され、火鬼は懐から壺を取り出した。

「土鬼、返事しな！」

「ナンダ！ オラハコイツラヲミナゴロシニ……オオオオ、シマッタ！」

大量の砂が渦を巻きながら壺の中へ吸いこまれていく。おろろく土鬼だ。土鬼が壺の中に吸いこまれているのだ。

おそろくすべてを吸い込み終わったのだから。火鬼は壺にふたをした。それにしても、吸いこんだ量は壺よりも多く、いったいどこに消えたのか？

「失礼しんした。莫迦が勝手な真似をしてしまつて、わちきはその尻ぬぐいに来たであります」

土鬼を封じ込めたが、その言動からアレンたちはこの者を敵の仲間だと察した。

トツシユはすでに銃口を火鬼に向けていた。

艶やかに笑う火鬼。

「おつかない武器は下げてくんなまし。わちきは無駄な仕事はしない質、死合いは次でも宜しいでありますしょう？」

「そうだな。俺様も、降りかかつてきていない火の粉まで、振り払うほど暇じゃあない」

「では、近いうちに……」

火鬼は燃えさかる車輪のついた人力車にひよいと飛び乗った。車を引くのは此の世のもの思えない、牛の頭に人間の躰をした者と、馬の頭に人間の躰をした牛頭馬頭ゴザメザメだった。

火の粉を散らしながら人力車が空を駆けて遠くへ消える。

セレンは恐ろしくてたまらなかつた。

「今の人たち……頭が動物……でしたよね？」

おぞましい化け物だった。牛や馬が二足歩行をしていたわけではない。腰布だけを巻いたあの躰は筋骨隆々な男のものだった。

リリスが静かに言う。

「キメラじゃよ」

「キメラ？」

セレンが聞き返した。

「そう、キメラじゃ。人工的に作られた怪物じゃよ。太古の昔から人間は恐ろしい怪物を想像するとき、人間とほかの動物を掛け合わせたり、動物同士を掛け合わせた。ゼロから生物を生み出す想像力がなかったのか、身近なものだからこそ恐ろしさや神秘性があるのか、もしかしたらつくることができていることを知っておったのか……」

「じゃあ……今の怪物はだれかがつくったものものなんですか？」

「既存の生物が掛け合った存在が自然に発生すると思うか？」

「そんな……ひどい、神への冒瀆です」

「神が人間をつくったことは自然への冒瀆ではないのかえ？」

リリスは不気味に笑った。

そして言葉を続けた。

「わしは神など信じておらん。もしこの星の生態系に干渉した存在がおったとしても、それは自然を超越した存在でもなければ、唯一神などではない。人間よりも高い文明を持っていたと



いうことじゃろう。「失われし科学技術」もおぬしから見れば、神の所業じゃろう?」

「失われし科学技術」はその仕組みもわからないし、不思議なものだと思います。でも神はそういうものじゃないんです、わたしは神を信じてますから」

「腐った世界でもシスターはシスターか。いや、こんな世界だからこそ神が蔓延るのか」

リリスは家に帰っていく。

すでに帰ろうとしていたトツシュだったが、ジープを見た途端、宙を仰いで頭を掻いた。

打撃によって潰されたジープ。エンジンは破壊され、タイヤはすべてパンクしており、運転席にはドアが食い込んでいる。

「まったく、どこの莫迦だよ?」

アレンが横に来て言う。

「さっきの砂男だろ?」

「んなことわかってる。どうやって帰ればいいんだ?」

「あんたのほうが無迦だろ?」

「んだと?」

「砂男はどうやって来たんだよ?」

普通に考えれば土鬼も帰る手立てがあった筈だ。

トツシュは辺りを見回した。

「なにもないが、どうやって来たんだろつな?」

「えっ、マジ!? なにもねーの?」

慌ててアレンも辺りを見回した。

乗り物なんてなかった。

乗ってきた乗り物はいったん引き上げたという可能性。砂漠の真ん中で、時間や燃料のことを考えれば、非効率的だと言える。

アレンは閃いた。

「どこかに隠されてんだよ、砂の中に埋もれてるとか！」

「目印もなにもない場所で俺様は無駄骨なんて折りたくないぞ」

「なら俺が見つけても乗せてつてやんねえからな！」

アレンは独りで砂を掘りはじめた。

それを尻目に一服するトツシュ。

セレンはどうするか迷っていた。

「あの、アレンさん？」

「なんだよ？」

「手伝ったほうがいいでしょうか？」

「あつたり前だろ」

手伝わないで見つかった場合、セレンも置いて行かれそうだ。

砂を延々と掘り返す作業。

掘っても掘っても砂ばかり。さらに掘ると同時に砂が崩れて穴が埋まる。

五分でセレンは力尽きた。

その前にアレンは三分で飽きていた。

結局、乗り物は見つからなかった。

休憩をしていたトツシュが立ち上がった。

「お前から本当に莫迦だな。リリス殿、リリス殿、どうか助けてくれないか？」

深々とした。

返事はない。そこには家すらない。なにもない砂漠。

トツシユが大きな口を開けた。

「婆さん近くにいろんだろう！ アレンを救ったのに、今度はその救った相手まで見殺しにするつもりか！」

トツシユの声以外は静かなものだった。

あきらめたトツシユは胡座をかいた。

アレンはまた何かを閃いたようだ。

グングニール の銃口が何も無い空間に向けられた。

本当にそこには何も無いのか？

「故意で撃つたら容赦せんぞ、アレン？」

アレンは背後に殺気を感じて振り返った。

老婆の顔が目と鼻の先にあつた。

「わっ！」

驚いてアレンは腰を抜かして尻餅を付いた。

もちろんそこにいたのは妖婆リリスだ。

すぐにセレンが駆け寄ってきた。

「リリスさん、わたしたち帰れなくて困ってるんです！」

「わたしには関係ないね」

救った相手を見殺しにする。気まぐれな老婆だ。

トツシユも割り込んできた。

「近くの町でも村でも着けるならどんな乗り物でもいい、礼は

「するから貸してくれ」

「わしの眼鏡めがねにかなう礼ができるというのかい、このわしじゃぞ？」

「こんな辺境に住んでいても、リリスならば不自由な生活をしているとは思えない。金や物資では取引はできないだろう。リリスほどの実力があれば、手段は違えどトツシュに叶えられることなら、自らで叶えることができそうだ。」

トツシュが言葉に詰まった。取引相手が悪すぎる。

しかし、次の瞬間にはリリスの態度が変わった。

「車を貸してやろう。ただし、わしもいく。運転の仕方を教えるのも壊されるのも面倒じゃ」

「気まぐれな女だ。」

第二章 残された伝言

《1》

「そんな……」

悲惨な顔をしてセレンが呟き、そのまま立ち眩みがしてアレンに支えられた。

ただただ無残な光景だった。

黒こげになって倒れている屍体。

トツシユは直感した。

「あの炎使いの仕業かッ！」

火鬼との関係を結びつけるのは当然。

ここは地下にあるジードのアジト入り口だった。おそらく死んでいるのは門番の男だろう。

すぐにトツシユはアジトの中に入った。

「フローラ、フローラ無事か！」

トツシユの頭の中にあるのはフローラのことだけだ。周りの屍体には目もくれずフローラを探した。

残る三人、アレン、セレン、リリスは慎重に先へと進む。

セレンは震えながらアレンの腕を掴んでいた。

「こんなの酷すぎます。人間の仕業とは思えません」

トツシユが目もくれなかつた屍体。

門番と同じように丸こげにされた屍体。生きたまま焼かれたため苦しかったのだろう。関節という関節が力強く曲げられている。藻掻いた証拠だ。

ほかの手口で殺された屍体もあった。

消失した顔。消失というより、抉られたような顔面だ。抉ると言っても乱暴なものではなく、まるで巨大なスプーンでゼリ―を掬ったように滑らかな傷痕。

顔を抉られているせいで、辺り一面血の海だ。

丸こげの屍体と、顔を抉られた屍体がこの場に散乱していた。これまで生きている者などひとりもしなかった。まさかアジトにいた者全員、皆殺しにされたのか。

トツシユはアジト中を駆け回った。

残っている部屋は二つ。

作戦室には顔を失い壁にもたれている屍体があった。

そこから奥の部屋へと進む。

トツシユがドアを開けた瞬間。

「ギャアアアアアッ！」

男の絶叫。部屋の中からだ。

椅子に縛られ両足の太股と両腕を切断された仲間の男。脚と腕はすぐそこに転がっていた。

トツシユはすぐさま男に駆け寄った。

「大丈夫か！」

「……………か……………めんの……………男……………と……………見た……………ことも……………ない衣装……………の……………派手な女に……………」

がくりと男の首から力が抜けた。男は話の途中で事切れたのだ。

遅れてやって来たリリスはその部屋の仕掛けに気づいた。

「細い糸がドアから伸びておる。それに血の付いた切れ味の良さそうなピンと張られた糸もあるのう」

それ以上言われなくても、トツシユにはわかっていた。

「これまで数え切れないほど殺しはやってきた。だがな、こんな胸糞の悪い殺しははじめてだ」

自分の意志ではない。何者かの思惑通り、操られるままに人を殺したのだ。

トツシユの心にあるのは怒りだ。鋭い野獣の眼が怒りに燃えている。

そんなトツシユにアレンはさらに火に油を注ぐような真似をした。

「あの炎を使う尻が軽そうな女が絡んでるのは間違いないな。

だとすると、狙いはあんただろ、あんたのせいでのこの奴らが殺されたんじゃないかねえのか？」

悲痛な顔をしたセレン。

「アレンさんなんてこと……あっ！」

その瞳が拳を振り上げたトツシユを映した。

「糞餓鬼ツ！」

アレンはトツシユに殴られた。床に手を突いたが、反撃はしなかった。なぜなら、自分の瞳に映っている者を弱者だと思っただからだ。

「殴る相手が違うだろ。カツカツしてんじゃねえよ、まだフロ  
ーラって女見つかつてねえんだろ？」

「おまえに言われなくても探すに決まってるだろう！」

トツシユは部屋を飛び出した。

リリスも隣の部屋に移動しようとしていた。

「わしは適当に休んでおるよ」

まったくこの事態に動じていない。他人事だ。

恐ろしさで独りではいられなかったが、かと言ってリリスの  
ように、待っていることもできなかったセレンは、アレンと共  
にフローラを探すと共に生存者も探した。

アジトの中をくまなく探した。部屋を見渡すだけではなく、  
ロッカーなど人が隠れられそうな場所も探した。

しかし、生存者は見つからなかった。

ベッドの下に隠れていた男すらベッドごと焼かれて死んでい  
た。

生存者はない。

再び四人が集合して、トツシユがまず口を開いた。

「フローラはいなかった。誰の屍体はわからない奴ばかりだが、  
おそらくアジトの外にいて助かった者も多いと思う」

屍体の中には女の屍体もあり、丸こげにされているせいで誰  
か判別できない者もいた。もしかしたらその中にフローラが混  
ざっていたかもしれない。

「俺様はフローラを必ず探す。おそらく外にいて助かっている  
筈だ」



確証はなくても信じることはできる。

「じゃ、ここでお別れってことで」

アレンは冷たく言った。

悲しい瞳でセレンはアレンを見つめている。

「アレンさん、ここまで首を突っ込んでも手伝ってあげないんですか？」

「そんな義理ねえよ」

だが、トツシユはきつぱりと言う。

「ある。俺様はおまえの命の恩人だぞ、フローラもそうだ。借りくらいちゃんと返せ」

「その女が死んでたらチャラだろ？」

「糞餓鬼、ぶっ殺すぞ！」

「頭に血の昇った莫迦なオツサンには負けねえよ」

挑発に乗ってトツシユは レッドドラゴン に手を掛けた。

しかし、銃が抜かれる前にセレンの制止が入った。

「二人ともやめてください。アレンさん、フローラさんを探すのを手伝ってください。わたしの借りでいいですから、アレンさんに借りを作りますから手伝ってください」

そして、トツシユはなんとアレンに頭を下げた。

「すまなかった。今はひとりでも力を借りたい。フローラを探してくれ、頼む」

そう来るとは思わなかったアレンは少し戸惑った。

「お、おう……頭なんて下げんなよ、俺の命の恩人だろ。借りくらい返してやるよ」

アレンはリリスに顔を向けて話を続ける。

「姐ちゃんはどうする？」

「わしは街の様子を少し見て帰らせてもらおうよ」

リリスは風のように消えた。

これから三人はどうするべきか？

アジトの中はもう探し終えた。そうになると、今度は外となるわけだが、探す当てはあるのだろうか？

「ここ以外に隠れ家あんの？」

アレンがトツシユに尋ねた。

「よく知らん。まだ仕事を手伝うようになって日が浅いんだ、新参に組織の秘密をベラベラしゃべるわけないだろう。だがおそらくある筈だ、こないだの作戦の時、知らない顔も多かったからな」

セレンが話に加わる。

「ならほかのお仲間さんに連絡を取るのが先決じゃないでしょうか？」

「だから俺様は新参だったから、連絡系統とかほかの仲間とか詳しくないんだ」

ほかの仲間と連絡を取ることが、フローラを探す手がかりにもなるだろう。これが当面の目的になりそうだ。

三人いるのだから、三手に分かれたいところだが、セレンを一人にするのは危険だ。それにフローラがここに戻ってくる可能性も考えなくてはならない。

トツシユはアレンとセレンに顔を向けた。

「おまえら二人でほかの仲間とフローラが探しに行ってくれないか？」

「は？　なんで俺ら二人なんだよ、あんたは？」

「俺様はここに残る。フローラが帰ってくるかもかもしれない」

「なら俺がここに残るよ。一番楽そうだし」

「フローラとおまえ面識ないんだぞ？　屍体だらけの場所に見知らぬ奴がいたら、俺様の名前を出したとしても警戒されるに決まってるだろう？」

「そりゃそうだけど、ほかの仲間を捜すならあんたがいたほうがいいだろ？」

「俺様が持つてる情報なんておまえらといっしょだよ。仲間捜しは俺様でもおまえらでもどっちでもできる仕事だ。仲間を見つけたら、そこから俺様に仕事を変わればいい。だが、ここでフローラを待つて話をスムーズに進められるのは俺様なんだ。はつきり言つて、こんなところでただ待ってるなんてごめんだが、これが良い策なんだ」

「はいはい、わかったよ。行くぞセレン」

この場をあとにしようとしたアレンたちに、トツシユはトランシーバーを投げて渡した。

「ニキ口弱くらいが圈内だ。無駄な通信と、重要な内容は話すなよ、傍受なんて簡単にできるからな。あと俺様や自分たちの名前も言うんじゃないぞ」

「はいはい」

軽い返事をしてアレンはセレンと立ち去った。

残ったトツシユは屍体の片付けをはじめた。

短い間でも、仲間仲間だ。この仕事をアレンとセレンに任せないという理由もあって、じつはトツシユはここに残ると決めたのだった。

大部屋である作戦室に屍体を一体ずつ運ぶことにした。

顔を失った血みどろの屍体の足を持って引きずると、廊下に血の痕が伸びる。余計に無残な光景になるが、手短な運ぶ道具もないので仕方がない。

黒こげの屍体は今にも崩れそうで、かなり慎重に運んだ。

一体一体重ならないように部屋に並べていく。

すべての屍体を並べ終わり、トツシユは仕事終わりの一服をすることにした。

屍体たちに背を向けて煙草を吸っていると、どこから足音が聞こえた。

静かな足音。

気配は感じられない。なぜなら気配の“気”がそれにはなかったからだ。

動いていたのは屍体だった。

顔のない屍体がゆっくりと起き上がりトツシユに迫ってきたのだ。

躊躇なくトツシユは レッドドラゴン を撃った。

死肉を貫通した銃弾。

血は出ない。

苦痛すら発しない。

身動きすら止めなかった。

相手は屍体なのだ。

「屍体が起き上がるなんて悪い夢でも見てるのか？」

トツシユは逃げることにした。

撃つても死なない いや、はじめから死んでいる相手は二

度も殺せない。

弱点はどこだ!?

部屋を飛び出したトツシユは辺りにある物に目をやった。使えそうな物を探す。

銃弾の殺傷方法は、出血、臓器破壊、脳に損傷を与えるなど、一部の機能を奪うことによつて、生命活動のすべてを停止させる。相手に与える傷事態は小さな物だ。つまり、生きている人間には絶大でも、死んでいる人間には微少な攻撃になつてしまふ。

死んでいる人間に有効な攻撃は、大きな物理的破壊だ。

床にサーベルが落ちていた。血が一滴も付いておらず抜かれている剣は、敵とに一太刀も浴びせらなかつた証拠。

サーベルを拾い上げたトツシユは、その刃を顔のない屍体ゾンビの太股に振るつた。

刃は硬い物に当たつて止まつた。骨までは断てない。太股にある大腿骨は人間の躰でもっとも太い骨だ、この程度の武器では歯が立たない。

サーベルは太股に刺さつたままだが、トツシユはそれを残して再び走つて逃げた。

敵の脚さえ潰せば、滅することはできなくても、機動力は奪える筈だった。

一体ですらこんなに手こずっているのに、後ろからは続々とゾンビが追いかけてくる。

追いかけてくるゾンビはすべて顔がなく焦げていない者。こちらの屍体だけになんらかの処置がしてあるに違いない。

魔導師でもないトツシュにその見当がつくわけもなく、物理的な大打撃を与えるか、逃げることしかできなかった。

幸いだったのはゾンビたちが人間ほどの敏捷性を持ってないことだった。おそらくその要因は死後硬直によるものだろう。

逃げて逃げ切れない相手ではないが、問題はどこまで追いかけてくるのか。たとえ姿が見えないところまで逃げ切っても、いつかはやって来てしまつたらどう立ち回る？

「トツシュ、こちらです」  
女の声がした。

取っ手もないなにもない壁が開いていた。隠し扉だ。  
闇の奥に立っている女の姿。

「フローラ！」  
驚きながらトツシュは声をあげた。

「早く入って」  
フローラに促され、トツシュは隠し扉の中に入った。  
すぐさまフローラは扉を閉めた。

扉の向こう側から突撃するような音と振動が伝わってくる。  
「大丈夫です、彼らには開けられませんから」

そのフローラの物腰も声も動じていない。あんな動く屍体を目の当たりにしても動じていないのだ。

暗い廊下をほのかに灯すランプの光。細い廊下は人がやっと二人並んで立てるほどの幅だ。

「ここを通れば繁華街の裏に出ることができます」

廊下を進む。

ゾンビたちが追ってくる物音などは聞こえない。

「心配したんだぞ、大丈夫だったのかフローラ？」

「ええ、なんとか。襲撃されてすぐに仲間がわたくしのことを逃がしてくれたの。リーダーを失ったばかりで、わたくしまで失えないと……」

フローラもあの場にいたのだ。

「仲間をやった奴は見たか？」

「いいえ、わたくしはすぐに逃げたから。あの場所で何が起ったのかわからないわ。だから時間を置いて様子を見に行ったら、あなたがちょうど襲われているところに遭遇して」

「あの場には屍体しかなかった。その屍体がいきなり動き出したんだ」

「やはりあれは……顔を見なくてもそうだと思っただわ」

しばらく歩いて下水道に出ると、そこから地上に上がった。

繁華街の裏通りだ。

フローラはトツシユを見つめた。

「ここでお別れよ」

「なに!？」

「わたくしは大勢の敵に狙われているの。だから姿を隠さなくては」

「なら俺様がいつしよにいて守ってやる」

「それは駄目よ」

「巻き込みたくないとも言うのか？」

「違うわ、頼れるあなただからこそ、頼みたいことがあるのよ」

そう言つてフローラは銀色の小箱を取り出した。

箱を開けると中にはクッションに包まれた四角く薄い物が入っていた。

「これはマイクロSDカードと呼ばれるもの。大容量の記憶媒体よ」

「これが記憶媒体だと？ こんな小さな物になにかを記憶できるつていいのか!？」

「帝國の科学力は世界最高水準ですもの。一般に流通していません、こういう物が存在しても不思議ではないわ」

「ということは、帝國の情報がこの中に入っていると云うことか？」

「ええ、最高機密が」

フローラは箱を閉めて、その箱をトツシュに握らせた。

「あなたに託すわ」

「わかった」

一つ返事でトツシュは受け取った。

フローラは軀をトツシュに向けたまま、一步後ろ下がった。



「どうやって中身を見るのかわからないの。その方法をあなたに探して欲しいのよ。帝國はそれを狙って襲ってくる、今はまだわたくしの手にあると思つてわたくしを襲ってくるでしょう。けれど、わたくしの手にないとわかれば、あなたが襲われる。そうなる前に、なんとしても中身を見て、それを役立ててちょうだい。さようなら、トツシュ」

フローラは背を向けて走り出した。

「フローラ！」

追いかけることはできた。

しかし、トツシュは願いを託されたのだ。

フローラを追うことはできない。

《2》

トランシーバーで連絡を取り合い、飯屋に集合することになった。

トツシュが店に入り奥の個室に着くと、すでにほかのアレンとセレン、そしてリリスまで席について食事をしていた。

帰らずにリリスが残っていたことは、トツシュにとって好都合だった。

「リリス殿に見てもらいたいものがあるんだが？」

「なんじゃな？」

「これなんだが……なにかわかるか？」

フローラから託された小箱を開けた。

たるんだ皺で隠れていたリリスの目が見開かれた。

「小型の記憶媒体のようだね」

「やはりすぐにわかったか……さすが“失われし科学技術”に精通しているだけのことはある。この中身が見たいんだが、どうにかならんか？」

「道具さえ用意してくればどうにかしてやるよ」

「道具とは？」

「わしのうちに一通り揃っておる。もっと早く中身が見たいのなら、この近くにも道具が揃って折る場所があるが？」

聞かずともそれがどこだかトツシユにはわかった。

クーロンの地下にある遺跡だ。あの人型エネルギープラントが眠っていた場所に違いない。

一度はリリスによって解放されたあの場所だが、事件後に再び扉は閉じられた。おろらく閉じたのはリリスだと思われる。

シユラ帝國は扉を開けようと手を尽くしたが開かず、現在は少数の兵隊によって警護されている。

リスクを避けるか、それとも時間を取るか？

リリスに家に向かうこともリスクがないわけではない。あの場所は敵に知られているため、襲撃を受ける可能性は大いにある。加えて時間を短縮して、機密情報を握れば帝國を牽制し、隠れているフローラの助けになるかもしれない。

かと言って地下遺跡に乗り込めば帝國と騒ぎを起こすことになり、もしかしたら記憶媒体をトツシユが持っていることが露見するかもしれない。フローラが身を隠し時間を稼いでいる意

味がなくなってしまう。

しかし、トツシユは考えた。

自らに刃が向けばフローラの安全を確保できるのではないか？

たしかに記憶媒体はトツシユと共に危険に晒されるが、自らも記憶媒体も守り抜ければいい話だ。

トツシユは決めた。

「リリス殿が言っている場所は見当がつく。人型エネルギーバンクがいた場所は、現在帝國によって封鎖され守られている。リスクは考えたが、そこに向かおう」

リリスも頷いた。

「あの場所の方がわしの家よりも設備が整っており。それに入ってしまったら、あの場所ほど安全な場所はない」

二人の話には入っていけないが真剣に聞いているセレン。

二人の話に入っていく気もなく食べ続けているアレン。

この二人を置いて話は進んでいく。

トツシユが提案する。

「事はできる限り隠密に済ませたい。街のや奴らがあまり活動していない時間がいいだろう。深夜と言いたいところだが、あの場所は深夜になると警戒が厳重になる。前に調べたんだが、朝方に見張りが交替して警戒が少し緩くなる。そこを敵にばれずに狙えば、次のシフトまで時間が稼げるかもしれない。アレンちゃんと聞いているか、おまえが勝手に暴れそうなので心配なんだが？」

「なんか言った？」

やはり聞いていなかった。目の前の食い物に夢中だ。

繊細な作戦などアレンには向いていなさそうだ。トツシユは諦めた。

「おまえは何もするな。着いてくるだけいい」

「はいはい」

気のない返事だ。今のトツシユの言葉も理解している怪しい。セレンは迷っていた。

この作戦に参加しなければ、ひとり残されることになる。かと言って、参加すれば戦いに巻き込まれるかもしれない。

「わたしはどこかに隠れて皆さんを待っていますね。ついて行っても足手まといですから」

「そうだな、シスターはどこか安全な場所にいたほうがいい。

俺様の隠れ家を紹介してやろう」

次の目的は決まった。

作戦開始は朝方だ。

トツシユに隠れ家を紹介してもらい、セレンは三人と分かれた。三人はこれから別の場所で作戦の準備をするらしい。

セレンが今いる場所は地下だった。

トツシユのアジト、ジードのアジト、そしてこの隠れ家。地下には秘密の場所が多くあることをセレンは知った。ほかにも暗躍する者たちのアジトが地下にあるかもしれない。まさに地下は街の裏の顔だった。

この場所は緊急的な隠れ家なのだろう。

部屋は半分がベッドで埋まってしまっている。家具はそれ以外にはテレビと棚があるだけだ。棚には缶詰めと武器類が並べられている。

この地下にある狭い部屋に長くいたら息が詰まりそうだ。

教会にはテレビがなく、あまり見慣れないで、興味で胸を躍らせながら見はじめてたが、話についていけないものが多く、すぐに飽きてしまった。

「もしかしたら一日くらい、ここに居ることになるのかな……」

アレンたちのことも心配だが、ほかに気がかりなことがあった。

「このままでと三日も教会を開けることになりそう。戸締まりはしっかりしてきたけど、はぁ心配」

だからと言って、この場を抜け出すことは危険に身を晒すことになる。

「でも……やっぱり！」

教会は命に代えても大切なものだった。

セレンは教会のこととなると冷静さを欠く。

敵にセレンが見つかった場合、殺すよりも人質に使ったほうが利用価値がある。勝手な行動は自らの命を危険に晒すだけでなく、仲間まで危険に晒すことになる。そのことをセレンは判断できなかった。

なによりも教会のことで頭がいっぱいだったのだ。

セレンはアジトを出て、地下から地上へと出た。

長年住んでいる街にも関わらず、セレンはあまり道などに詳しくない。神父が生きていた頃は、街のいるいるな場所に連れて行ってもらったが、それは安全な区域だけである。神父が死んでからは、あまり外に出ることもなくなり、生活圏は狭くなる一方でさらに街にうとくなくなってしまった。

周りを見るとあまり柄の良い住人たちではないようだ。

「……舐められないようにしなきゃ」

セレンは気合いを入れて歩きはじめた。

歩いていると、前方にヤクザっぽい集団に出くわしてしまった。

セレンは真面目な顔を頭を下げた。

「ご苦勞様です」

と挨拶をして、まったく動じない振りをしながら足早に通り返した。

舐められないように、気を張って挨拶をしたのだろうが、おそらく挨拶をしたほうが危険だ。幸い今回はなにもなかったが、何度もやればいつかは絡まれる。

またしばらく歩いていると、商店が増えてきて少し気が抜けた。

ここなら道を聞いても大丈夫そうだ。

なるべく優しくそうな人を探してセレンは道を尋ねた。

はじめは『教会』と言って尋ねたのだが、あまりにも通じないために近くにある道を尋ねると、すんなり道順を教えてもら

えた。

やっと教会の近くまで来ることができた。

セレンは教会の少し手前の道で足を止めた。

前の失敗を思い出したのだ。

敵の待ち伏せだ。どうしても教会の様子が見たくて帰ったら、

あのときはライザたちに待ち伏せされてた。

警戒はしつつもセレンは大丈夫だろうと思った。

その判断はある間違つた事柄から導き出されたものだった。

帝國じゃない。

今回、命を狙われているのはトツシユであり、たまたま自分はその間に居合わせただけだとセレンは考えたのだ。鬼兵团が帝國の差し金でトツシユとジードを狙つたなど、結びつかなくつたのだ。だから教会にまでは手が伸びていないと。

玄関に手を掛けた。鍵は閉まっている。それだけでセレンは安心してしまった。危険や危機感にうといのだ。

鍵を開けて住み慣れた場所に入った。

住み慣れた場所だからこそセレンは小さな違和感を覚えた。

何が起きたのか、何が違うのか、そこまではつきりとわかる感覚ではなかった。

しかし、それはセレンを警戒させるに足るものだった。

バスルームから気配がした。

セレンは武器になりそうな物を探した。モップでもなんでもいいが、なにもなかった。取りに行っている間に、気配を見失つてしまふかもしれない。

昔はハンドガンを忍ばせていたが、自分には扱えないと痛感したときから、持ち歩くことをやめてしまった。

ドアの前に立ったセレンは、聞き耳を立てて中の様子を探ろうとして、耳をドアに押しつけようとした。

そのときドアが開いた！

ドアが向こう側から引かれ、寄りかかる物を失ったセレンはバランスを崩してしまった。

そして何かにぶつかつた。

セレンの頬がぶつかつたものは人肌だった。

「きゃーっ！」

叫んだセレンは慌てて飛び退いた。

そして、見たのだ。

「あ、あなた何者ですか！！」

全裸の男を。

「そちらこそ何者ですか？」

「そ、そそそ、そんなの、そんなことよりソレ隠してください！」

セレンは手で目元を多いながらソレを指した。

空色の髪が印象的な青年は、少しはにかんでタオルを腰に巻いた。

「入浴後はいつも裸で過ごすクセあるんだ。ごめんよレディーの前で、すまないことしちゃったね」

タオルが巻かれてもセレンは視線を合わせられずにいる。顔は真っ赤だ。



「そんなことより、あなた何者なんですか！」

「そんなことって言うなら、タオルもう一度外しましょうか？」

「あゝゝゝつもお、だからあなた何者か聞いてるんです！」

「それはこちらのセリフですよ。そちらこそ何者ですか？」

「ここに住んでいる者に決まってるじゃないですか！」

「あゝゝつ、どうりでそんな格好をしていると思いましたが、このシスターさんですか」

青年は手のひらの上でポンと手を叩いた。

すっかりこの青年のペースになつてしまつてゐる。

セレンはパニックになりかけていた。

緊張の糸を張り詰めて、もしかして危険があるのではないかと思つていたところに、こんな男が現れた。悪人には見えないが、明らかに不審人物だ。

「わたしのことなんていいですから、あなた誰なんですか！」

「申し遅れました、僕は愛の吟遊詩人です」

「はい？」

「正確には愛の吟遊詩人をしながら、各地でバイトして旅をしているトレジャーハンターです」

トレジャーハンターという言葉にセレンは聞き覚えがあつた。トツシユも同じ職業を自称していた。

「吟遊詩人とかトレジャーハンターとか、わかりません！」

「吟遊詩人というのはね」

「説明しないでいいですから早くここから出て行ってください」

「さい！」

「ここ教会ですよね？」

「そうですけど？」

「僕困ってるんです。旅暮らしをしていると、安全で清潔な寝場所を探すのが大変です。ここを見つけたときは、廃墟の教会を見つけてラッキーっと思っただけですけど、シスターがいるなら改めてお願いしたいと思います。何日かここに泊まりますから、よろしくお願いします」

「泊まらして欲しいのではなく、泊まるとすでに決めた発言だった。」

「こんな強引な青年だが、“困っている”と聞いてしまつては、セレンはそれに弱かった。」

「……わかりました、明日の朝までなら」

「見ず知らずに今出会ったばかりの、しかも勝手に上がり込んでシャワーを使うような男を、この場所に泊めることが危険だというのはセレンも承知だ。わかっていながらも、困っている人を見捨てられないのだ。」

「青年はセレンの両手を掴んで固い握手をした。」

「ありがとう女神様。あなたは僕の命の恩人です、ありがとうありがとうございます！」

「握手をしている最中、はらりと青年の腰のバイスタオルが落ちた。」

「……きゅーっ変態！」

「セレンの平手打ちが青年の頬をぶった。」

頬を紅くした青年は笑っていた。

「ごめんごめん、取れちゃったみたい」

「わかっていますから早く着替えてください！」

「それが……洗濯しちゃったんだよね」

「……………」

セレンは返す言葉もなかった。

タオルを直した青年は尋ねてきた。

「それでどの部屋使つていいの？」

マイペースだ。

「じゃあ……こつちの部屋で。あと神父様の服しかありませんけど、貸してあげますけど、ちゃんとここを出て行くときに返してくださいね！」

「神父様もいるのか。まあ教会なんだから当然だね。それでその神父様はどちらに？」

「……亡くなりました」

「あ、ごめん」

「べつに気を遣わなくても大丈夫です。今はわたししかいないんです」

言ってからセレンはハツとした。もしも青年が悪い奴だったら、独りと知れたら余計に危ないではないか。泊める時点で十分に危ないが。

泊めると決めてからもセレンはずっと後悔している。

「……はあ」

「どうしたの溜め息ついちゃって？ やっぱりさつきマズイこ

と聞いちゃった？」

「違うんです、あなたみたいは見ず知らずの人を泊めるなんて莫迦みたいだと思って」

「そんなことないって、シスターは女神様だよ。見ず知らずがダメなら、ちゃんと自己紹介しようよ。ほかにもお互いのこといっぱい話そう、そうすれば友達さ」

悪い人には見えない……だけかもしれない。

不安は尽きないが、セレンは青年の笑顔を見ていると少し心がほぐれた。

その笑顔に亡くなった神父の面影を見いだしてしまったのだ。神父とこの青年は歳が離れていて、顔もぜんぜん違う。けれど、神父も同じように笑うときは本当に無邪気そうな顔をするのだ。

ぼうつと自分の顔を眺めるセレンを、不思議そうな顔で青年は見つめた。

「どうしたの？」

「あつ、いえ……べつに……ええつと、なんの話をしてたんでしたっけ？」

「自己紹介しようよ。僕は自然を旅するのが大好きな愛の吟遊詩人　ワーズワース。君の名は？」

「わたしはセレンです」

「詩的な名前だね。歌がうまそうだ」

褒められたセレンは少し頬を紅くした。

「べ、べつにうまくはありません。でも歌うのは……好き、か

もしれません」

急にセレンは早足で歩きはじめた。照れ隠した。

セレンが案内した部屋は神父が使っていた部屋だった。

「ここを使ってください。あと風呂と台所とトイレは自由に使つていいですけど、ほかはあまり勝手に使わないでくださいね」

「それだけ貸してもらえれば十分だよ」

「あと……わたしはまたしばらく教会を開けますから、明日になつたら勝手に出てってくださいね、入ってきたときのよう  
に」

「僕ひとり残しちゃって平気かなあ。僕が盗人だったらどうする気？」

「取られるような高価な物はありませんし、あなたのこと信用しますから」

真面目な顔をしたセレンに青年は笑いかけた。

「ありがとうセレン」

さつそく名前を呼ばれてセレンはなんだか気恥ずかしかった。出会つたばかりなのに、どんどん距離を縮めてくるワーズワーズに戸惑う。

「わ、わたし行きますから。くれぐれもよろしく願ひしますからね！」

セレンは走り出した。

このまますぐ教会を飛び出す勢いだったが、ちゃんと金品の蓄えは持ち出した。無闇に人を助けても、しっかりするところ

はしっかりしているらしい。

《 3 》

まだ人々が眠っている早朝。

速やかに密やかに作戦が遂行されていた。

なによりも重宝したのがリリスの助援であった。

見張りの男を立つたまま硬直させ、声を出せない状態にしたリリスの術。遠めから見分には、見張りを続けているように見える。これによって少なからず、発覚までの時間が延ばせただろう。

トツシュが活躍する機会など与えられぬほど、リリスは積極的に動いた。これも気まぐれだろうか？

なにもしなくていいと言われていたアレンだったが、実際に何か起これば働かなくてはならなかつただろう。けれど、その機会もついにやって来なかつた。

前にもこの場所に来た。

何も無い扉。何も無いが故に、限られた者しか開けることができる。できない。

また再びリリスがこの扉を開いた。

部屋の中は前とやら変わらない何も無い部屋。

「おぬしらはここで待っておれ」

そう言つてリリスはほかの部屋に移動した。

トツシュは驚いた。

「ほかの部屋があつたのか!？」

「知らなかつたのかよ？ なんかいろんな部屋があつて、いろんなもんが収納されてるみたいだぜ」

アレンが譲り受けたエアバイクもここで手に入れた。

驚きと共にトツシユはショックを受けていた。

「だつたらここはトレジャーハンターにとつて夢の場所じゃねえか。こんな近くに宝の山があつたのに、今まで俺様はなにを  
していたんだ」

後悔も押し寄せてきた。

トツシユは床や壁を調べはじめた。

だが、リリスのように開くことができない。

「なあ、これどうやって開けるんだ？」

「俺に聞くなよ。リリスに聞けばいいだろ」

「このもん勝手に持ち出すのに、あの婆さんに許可取るなんて莫迦か」

「おいおい、持ち出すなら許可取らないあんたのほうが莫迦だろ」

アレンに構わずトツシユは開き方を調べ続けた。

床、壁、天井、凹凸一つない。

仕掛けらしき仕掛けがなく、どうやって開くべき扉すらどこにあるのかわからない。

探せど探せど手がかりもなく時間だけが過ぎていく。それでも宝を目の前にしたトツシユは諦めることを知らなかつた。

そのうちアレンも暇になってきて、辺りを調べはじめた。

リリスが扉を開けるのを前に何度も見たアレンは、それをよく思い出してみることにした。

ただ触れただけ。

そうとしか見えなかった。

その動作だけで、亀裂のなかった場所から箱が出てきたり、次の部屋の扉が現れたりした。

ためにしアレンもただ触れた。

当然の反応であると言わんばかりに何も起きない。

おそらくただ触れるだけは駄目なのだ。それでいいのならば、さきほどからトツシユがむやみやたらに触れており、下手な鉄砲も数を撃てばそのうち当たりそうなものだ。

“触れる”とい動作は必要な動作なのだろう。“触れる”からには、触れた瞬間に何かをしているはずだ。

アレンは考えた。

考えた結果……わからなかった。

「糞ツ、わかるかなんもん。ぶっ壊してやる！」

グングニール が抜かれた。

それを見てトツシユは慌てアレンに飛び掛かろうとした。

「馬鹿野郎！」

しかし、これ以上近付くのは危険だった。

アレンが引き金を引いたのだ。

稲妻が床に当たった瞬間、アレンの躰が海老反りになって飛び上がった。

瞬時にトツシユは自らの意志で高くジャンプしていた。



一瞬にして電流が部屋中を駆け巡った。

倒れたアレン。

着地したトツシユ。

すぐにトツシユはアレンの様子を見るのではなく、自分の靴の裏を調べた。

「なんだよ、ちょっと溶けてるじゃねえか」

ジャンプは間に合わなかったらしい。けれど、ゴム底は電気を通さなかったようだ。

靴を調べ終わると、トツシユはアレンの頬をぶった。

「おい、寝てないで起きろ。飯だぞ！」

「う……ううつ……ひでえ目に遭った……」

「自業自得だろ。おまえ本当に莫迦だな」

アレンのブーツは、その機動力を生かすために頑丈な金属でできていたのだ。

どこかで 歯車 の音がした。

「糞ツ……勝手に……」

アレンは歯を食いしばりながら胸を押さえた。

「おいっ、どうした？」

目を丸くしたトツシユはアレンの顔から汗が噴き出すのを見た。

汗は尋常な量ではない。

トツシユはアレンの頬に触れて見た。

燃えるように熱い。

「おいっ、大丈夫なのか!？」

どこかで 齒車 が激しく廻る音がした。  
部屋が動き出す。

何もなかった壁や床に、直線で構成された迷路のような光の線が走った。

大小様々な箱が次々と現れる。

扉という扉が次々と開いていく。

部屋にあったものがすべて解放されているのだ。

《認証完了しました》

合成音が響いた。

そして、最後の部屋の中心に現れた巨大な球体。

それはシャボン玉のように、流動しながら七色に輝いていた。球体からホログラム映像が投影され、宙に映像が映し出された。

映像は酷く乱れ、ノイズでかろうじて人が映っているのがわかる程度だった。

《……サイゴノ……キボウ……》

音声も途切れ途切れだ。

《アナタガ……ワタシノセイシン……コノヨニ……》

アレンは瞳を見開き驚いた顔をして硬直したまま。

なにが起きているのかトツシユは理解に苦しんでいた。

「なんなんだ……なんのメッセージだ？」

おろらくこれは今通信されているものではなく、残されていたメッセージだ。

メッセージには必ず受け取るものがある。

このメッセージはいつたいたいなんの目的で残されていたのか？

《……オソロシイケイカク……アナタダケ……ラクエン……スベテハソコニ……》

ノイズがさらに酷くなつていく。

《……ホントウニ……ごめんなさい》

最後の言葉だけ、はっきりと女性の声で聞こえた。

「うわああああああっ!!」

突然アレンが叫んだ。

「どうした!？」

慌ててトツシユはアレンを押さえる。

アレンは狂ったように床の上を転げ回りながら暴れた。

艶やかな風が吹く。

場を一転させるほどの存在感を持つ者がアレンの前に現れた。

妖女リリス。

世にも美しく過ぎて怖ろしいリリスの顔が、半狂乱のアレンと向き合った。

リリスの瞳が妖しく輝いた刹那　アレンは気を失った。

すぐにトツシユがアレンを抱きかかえた。

「こいつに何があつたんだ？」

と、アレンに視線を向けてリリスから目を離し、再びリリスに視線を戻すと　すでにそこにいたのは妖婆だった。

「まったくとんだ邪魔が入ったね。この子のせいでシステムがちょいとイカれちゃまったよ。メモリの情報を取り出すのに二、三時間は掛かるから大人しく待ってな」

「二、三時間も掛かるのか？ この糞餓鬼のせいですか！？」

「今は寝かせておやり。起きたらこっぴどく叱ってやるんだね」

リリスは妖しく笑いながらまた部屋の奥へと消えてしまった。気がつくとも箱も扉も投影機も、何もない部屋に戻っていた。

「……三時間もこの部屋で待っててか。おいっ、糞餓鬼起きやがれ！」

トツシユはアレンを揺さぶってみたが反応はゼロだ。

あきらめたトツシユは床に寝っ転がった。

「寝る！」

朝方の作戦だったため、ろくな睡眠も取っていなかった。

トツシユはすぐに眠りに就いた。

「おゝきゝろゝよ、オッサン！」

アレンがつま先でトツシユの脇腹を蹴ろうとした。

殺気！

瞬時に目を覚ましたトツシユはすでに銃口をアレンに突き付けていた。

「変な起こし方すると撃つぞ？」

「起きてたのかよ？」

「いや、寝てた。眠りが浅いんだ、いつ敵の襲撃があるかわからんからな」

“一匹狼”だったトツシユは、常に自分の身は自分で守る必要があったのだ。

この場にはリリスもいた。

「いつでも情報は見られるようにしといたよ。こいつの使い方がわかれば、の話だがね」

ある物をリリスはトツシユに手渡した。

「パソコン……らしいが、今出回ってるもんじゃないだろこれ。こんな小型の見たことないぞ」

A4サイズのノートパソコンだった。

リリスは首を横に振った。

「いや、これは今の時代の物だよ。帝國がつくった最新型さ」  
「さすが帝國だな。一〇〇年先行ってやがる」

一〇〇年というのは言い過ぎだろうが、シユラ帝國が世界最高水準の科学技術を持っているのはたしかだ。

しかし、着目するべき点はそこではないだろう。

アレンは首を傾げていた。

「どこで手に入れたんだ？」

この場所に来た理由は、帝國の力を借りずに記憶媒体から情報を取り出すため。帝國のノートパソコンがあるのなら、ここに来た理由がわからない。

「つくったんじゃないよ、わしが。帝國の最新型と言ったが、正確にはそれを真似てつくったもんさ」

そんなことが可能なのか？

可能だとしても、帝國のノートパソコンの情報、設計図などは、いつどこで手に入れたのか？

妖しく笑うリリス。

トツシユたちが眠っている間に、リリスは外に出て帝國のノートパソコンを研究して来たのか？

わざわざ外に出て、そんなことをするくらいなら、ノートパソコンごと盗んでくればいい。それらを考えたトツシユは頭が混乱した。

「つくるったって、どうやって？」

「シユラ帝國の技術はすべて“失われし科学技術”が元になっているのさ。それに依存しすぎていることが仇となったね。まあこの技術を使える者じゃなきゃ、帝國の脅威にはならんじやろうが」

「よくわからんのだが？」

「おぬしは知らんでもいいことじゃよ」

そう言われると余計に気になる。

トツシユは宝の山を目の前にして手をこまねくことしかできないのか。

「リリス殿、折り入って話があるのだが？」

「おぬしにはなにもやらん」

「言う前から！そこをなんとならんか、エネルギープラントは手に余る物で諦めたが、なにかもって手軽で便利な物を一つでいい！」

「さあ、用は済んだ。ゆくぞ」

リリスはトツシユを置いて歩き出した。

それでもまだトツシユは食い付こうとした。

「リリス殿！リリス殿！」

リリスは完全に無視をした。

その二人の姿を見ながらアレンは溜め息を漏らした。

「オツサンのクセして子供みてえだな」

こうして三人はこの場をあとにすることになった。トツシユは後ろ髪を引かれながら

開かれる扉。

坑道へと続く道。

トツシユは銃を抜こうとしたが、向こうのほうがかつた。

「……だろうな」

予想していたかのようなトツシユの呟きだった。

遺跡を出てすぐに待ち構えていた兵の群れ。今から蜂の巣でもつくるかのように、向けられている数え切れない銃口。

中で時間を食ってしまった結果だ。待ち伏せは当たり前と言えは当たり前だろう。

そこまでの予想はできた。

問題はさらにあつた。

「ごめんなさあゝい、また捕まっちゃいましたあゝつ」

捕まっているセレン。

その横で艶やかに笑っているライザ。

「朝食でも一緒にいかがが？」

その誘いにアレンが答える。

「なに喰わせてくれんだよ？」

「お腹いっぱい銃弾なんていかが？」

「腹に穴開けられたら膨らむもんも膨らまねえよ」

たつたひとりの人質を取られただけで、窮地に追いやられた人質さえいなければ、トツシユはいくらでも策を考えていた。追いつめられたときには、最後の手段としてリリスという駒もある。

トツシユは頭を抱えた。

「なんで捕まっちゃったんだよシスター」

「ちよつと教会の様子が気になって、その帰りに見つかってしまつて……」

「大人しくしてくれよ。なんのために俺様が隠れ家を提供したと思つてるんだ」

「ごめんなさあ〜い」

謝つて解決する問題ではない。

急に兵士たちが騒ぎ出した。

「そいつはおらの獲物だ。だれにも渡さねえ」

兵士たちの足下から土鬼の上半身がせり出てきたのだ。天井の低いこの場所では、足の先まで顕現することはできない。

ライザが命ずる。

「全員殺さず捕らえなさい。抵抗するようなら手足くらいなら奪つても構わないわ」

そんな声など土鬼は聞いていなかった。

土塊である巨大な拳が狭い坑道で振り回された。

壁が砕かれ、天井からも硬い土の破片が落ちてくる。

巻き添えを食う兵士たち。

ライザも後ろに引くしかできなかった。



「やめるのよ土鬼！ この莫迦鬼！」

罵る声も破壊音に掻き消されてしまった。

土鬼はライザの命令を無視してトツシユに襲い掛かった。

その混乱に乗じてアレンはセレンを救出しようとする。

セレンを捕らえている兵士は怯んでいる。暴れる土鬼に気を

取られて、アレンたちどころではないようだ。

どこかで 齒車 の音がしたような気がした。

兵士が気づいたときには、拳が目と鼻にあつた。

アレンの強烈な一撃。顔面の骨を砕き、一発で兵士を倒すと、

すぐにセレンの躰を抱えた。

「逃げるぞ！」

「どこにですか！」

逃げ場などない。

たださえ兵士で道が塞がれているというのに、土鬼の登場

でさらに道は狭くなった。その土鬼はトツシユと交戦中で、こ

んな狭い場所で近付けば巻き添えを喰うのは避けられない。

脱出できないのなら、戻るしかあるまい。

アレンはセレンを抱きかかえたまま遺跡に飛び込んだ。

すでにリリスは扉を閉める準備をしている。

慌てるトツシユ。

「おいっ、俺様を見殺しにするつもりか！」

土鬼を置いてトツシユが入り口に飛び込んだ瞬間、扉は閉ま

った。

また遺跡の中に戻って来た三人とセレン。

アレンはリリスに尋ねる。

「で、出口は？」

「さあ、そこ以外にあつたかのあ」

外では敵が待ち構えているだろう。

トツシユは愛銃の レッドドラゴン を握り締めた。

「今度は人質なしだ。どうにかなるだろう」

「ご、ごめんなさい」

セレンはしゅんと肩を落とした。

《 4 》

部下に命令はしたが、無駄だとわかっているライザは、ノートパソコンに向かって自分の研究を進めていた。

ノートパソコンのディスプレイに映し出されているのは、体重や身長などの身体測定の数値。背の高さや体重から考えて、おそらく子供のものと思われる。

作業をしていると、すぐ近くで対大型昆虫用のバズーカが扉に向かって放たれた。

坑道に響く轟音。

少し天井が崩れてきた。

ライザはピタッと手を止めた。

「うるさいわよ、もっと静かにやりなさい！」

ライザの怒号に兵士たちは背筋を伸ばした。

フルフェイスで隠れている兵士たちの顔だが、その下ではさ

ぞかし嫌な顔をしているだろう。どんな手段を使ってでも扉を壊せと命令したのはライザだ。

どんな手も使えなくなつた兵士たちは、打つ手がなくなり静かになつた。

アレンたちはいつになつたら出てくるのか？

持久戦が開始された。

それも数分と持たなかつた。すぐにライザが痺れを切らせたのだ。

「帰るわ。彼らが出てきたらすぐに捕らえて連絡なさい」

帰ると歩き出したライザとは逆の方向から人影がやって来る。

不気味な仮面の主　隠形鬼。

ライザは眉をひそめた。

「なぜアナタがここにいるのかしら？」

「私ノカガ借りタイト呼バレテ参上イタシマシタ」

「アタクシは呼んでないけれど？」

兵士の中から火鬼が割つて出てきた。

「わちきが呼んだでありんす」

さきほどは土鬼が暴れ回つて出番がなかつたが、じつはこの場に火鬼もすでにいたのだ。

ライザは首を傾げる。

「なぜ？」

「隠形鬼のお頭様は、この手の物に精通しているのでありんす」

それを聞いてライザは喜びもせず、あからさまに嫌な顔をし

た。

自分に開けられなかった扉をこいつが開けるのか？

鼻で笑ったライザ。

「どうぞ、できるものなら開けていただけませんかしら？」

「御意」

そう短く返事をして隠形鬼は扉に向かつて歩き出した。

扉の前に立った隠形鬼は首を縦に動かし観察しているようだった。

「フム、ゴク最近造ラレタ扉ノヨウデ……失ワレテイル筈ナノ二、珍妙ナ」

仮面の奥から低い笑い声が響いた。

ここは“失われし科学技術”の遺跡だ。新しい物がある筈がない　というのが当然だ。この扉を造り直したのはリリースだった。

しかし、なぜ“最近”とわかったのか？

隠形鬼は扉に触れた。ただそれだけだった。

《認証完了しました》

扉が開く。

ライザは驚きのあまり目を丸くしてしままま声も出なかった。

「……ッ!？」

衝撃と共に悔しさが込み上げてくる。

自分が開けられなかった扉を開けた。それも何か大がかりなことをしたわけでもない。時間を掛けたわけでもないのだ。

どうやって開けたのか聞くことすら、ライザのプライドが許

さなかつた。

ライザはヒールを鳴らして遺跡の中に入った。

「行くわよ」

その声には怒りがこもっていた。

なにもない部屋。その部屋にはなにもなかつた。アレンたちの姿すら。

さらにライザの怒りは増した。

「どういうこと？」

空の箱と化している部屋。

一見してなにもない部屋だが、ライザは仕掛けがあることを知っている。前にリリスが目の前で、エネルギープラントを目覚めさせたのを見ている。

ライザは床や壁を調べはじめた。出口に繋がる仕掛けもあると考えたのだ。

しかし、見つからない。

「触れるだけでは駄目なのね。呪文を唱えているようには見えなかつたから、生体認証バイオメトリクスかしら」

ライザはちらりと隠形鬼を見た。

「このギミックを動作させることはできて？」  
挑戦を突き付けた。

「ハテ、私二八不可能ナヨウデ」

「……そう」

ライザは嫌な顔をした。

隠形鬼の言葉が嘘か真かわからない。なにも調べもせず、不

可能だといきなり言ったのだ。扉をいとも簡単に開けた者の言葉なのか？

兵士が慌てて部屋に飛び込んできた。

「連絡します！ 不審な乗り物を目撃したとの情報があり、調べさせたところ、すでにトツシュー一味は町を出た模様です」

報告を受けたライザは床を調べるのをやめて立ち上がった。

「やはり抜け道が……まあその件はあとでじっくりと調べましょう。まずは彼らの搜索を第一に、全員生け捕りにするのよ。鬼兵团にもちゃんと仕事をして欲しいものだわ、前回は彼らを前にしてなぜか引き上げたらしいけれど？」

火鬼が持つている壺を指差して訴える。

「それはこの莫迦が命令を聞かずに！」

「私ノ命令デ御座イマス。土鬼ガ無礼ヲ働イタ為、日ヲ改メル事ニ致シマシタ」

隠形鬼の話聞いて、ライザは睨みを利かせた。

「騎士道か何かのつもりかしら、そんなの求めてないわ。こちらが望んでいる仕事をしてくださらない？」

「わちきはちゃ〜んと自分のお勤めはしたであります」

「それはアナタ方内部の役割分担の話で、こちらは鬼兵团という組織に依頼をしているのよ。果たせなければ連帯責任よ」

「私達ハ自由意志デ集マツタ寄せ集メ、連帯責任ナド誰モ取りタガリマセン」

「ならトップであるアナタが責任を取りなさい」

ライザはそう言って微笑んだ。完全に隠形鬼を目の敵にして

いた。

「ソレ八分カットオリマス」

依頼内容をライザは再度確認する。はじめの依頼から、ここまでの間に追加された内容もある。

「まずトツシュー一味を生け捕りにすること。そして、ジードの残党を見つけ出して始末、リーダーも早く見つけ出してルオ様の前に突き出してくれないかしら？」

「ソノ件デ御座イマスガ、じーどノリーダーハ既ニ死亡シテイル模様」

「なら新しいリーダーかその候補、サブリーダーとかいるでしょう。気が利かないのね、まったく。とにかくリーダーの代わりになる奴を捕らえなさい」

「御意」

隠形鬼は頭を下げて出口へ歩き出した。

「行イクゾ火鬼」

「あいよ」

鬼兵団がこの場から去ったあと、ライザはつぶやく。

「隠形鬼……信用できない奴ね。いつかあの仮面を剥がしてやりたいわ」

ライザは艶やかに笑った。

砂漠を走るタイヤのない自動車。

楕円形のその車は、少し地面から浮きながら走行している。運転席のリリスが横の助手席にいるトツシューに尋ねる。

「どこか行く当てはあるのかい？」

「ない。近くの町も村も帝國の追っ手が現れるだろうな」

鬼兵团だけではなく帝國まで絡んできた事実を彼らは知った。坑道で土鬼とライザがいつしよにいたのが証拠だ。

後部座席からアレンが前の席に身を乗り出してきた。

「なあなあ、そんなことより取り出した情報見ようぜ」

「お前らには見せん」

きつぱりとトツシユが言った。

さらにアレンが身を乗り出してきた。

「えゝつ、なんでだよゝ！」

フローラがトツシユに託した帝國の機密情報。シユラ帝國の機密となれば、世界を揺るがすだけの価値はある。そんなものを易々と広めるわけにはいかない。

「わしはもう見たが？」

リリスが妖しく微笑みながら言った。

それに関しては、トツシユも許容しているようだ。

「あなたに頼んだ時点でそれは承知だ。リリス殿は世俗にあまり関心がないようなので、むやみやたらと他言することもないだろうし、なんでも自分の力でできるあなたに帝國の情報なんて価値もないだろう」

「さて、それは時と場合によるがね」

含みのあるリリスの言い方だ。リリスはいったいどんな情報を見たのか？

情報の入ったノートパソコンはトツシユの膝の上に置かれて



いる。

「お前らもむやみやたらと他言するような奴らじゃないことは、短い付き合いだがわかっている。この中身が知りたいなら、その情報を使って俺様がやることに協力しろ。それが条件だ」

アレンは身を乗り出していた躰を引いて、座席に深く腰掛けた。

「俺パス。めんどくさいことに巻き込まれたくないし」

セレンも首を横に振った。

「わたしもこれ以上は……」

これ以上は付き合いたくないが、トツシュたちと分かれれば、独りで帝國に追われるハメになる。

トツシュと共に行動して、より深みにはまっていくのか。

アレンと放浪の旅をして、帝國の影に怯えて逃げ続けるのか。

リリスと共にという選択肢はないのだろうか？

申し訳なさそうにセレンはリリスに声をかける。

「あのお、リリスさん？」

「なんじゃな？」

「リリスさんのところでわたしを匿ってもらうわけには……家事とかならなんでもできますから！」

「わしは自分の世話くらい自分でできるよ」

やんわりと断られたのだろうか。

リリスは話を続けた。けれど、それは今の続きではなかった。

「おぬしら本当に情報を聞かなくていいのかい？ たとおぬしら、いや、すべての人々に関わるような重要なことでもか

い？」

中身を知っているリリスの揺さぶりだ。

しかし、その程度の揺さぶりではアレンは落ちない。

「勝手にすべての人々に入れられてたまるかよ。俺は自由だから、そーゆー枠組みに囚われないで生きてるしカンケーないね」

一方セレンは悩んでいた。

「すべての人々……ここで聞かなくても、巻き込まれるってことですか？」

リリスが答える。

「巻き込まれるって言い方は正しくないね。もしそれが実現したら、人々も恩恵に預かれるってことさ」

小出しにされるヒント。

ここでトツシュが止めに入った。

「あまり中身について言わないでもらいたいんだが。言ってもいいのは、こいつらが協力すると誓ってからだ。俺様の中身を見てないから、どういう協力になるかはわからんが」

アレンは窓の外を眺めている。セレンはまだ迷っているようだ。

少し無言の時間が流れた。

「あつ！」

急にアレンが声をあげた。

横にいたセレンが驚く。

「どうしたんですか!？」

アレンは窓の外を指差した。

「あれってこっちに向かって手振ってんのか？」

窓の外に見たモノは人影だった。

セレンが前の席へ身を乗り出した。

「トツシユさん止めてください！」

「放っておけ」

「そんなことでできません、早く止めてください！」

「つたく、シスターはお人好しだなあ」

トツシユはハンドルを切ってその人影に向かって走り出した。

どんとその人影がはつきりと見えてくると、セレンは驚いた顔をした。

「あの人!？」

横のアレンが尋ねる。

「知り合いかよ？」

「はい……まあ、そのようなものです」

そして、車は人影の前で止まった。

手を振っていたのは青年だった。

空色の髪をした無邪気な笑みを浮かべる青年だ。

「よかったあ。やっぱり車だったんだ、変な形だから心配だったんですよ」

セレンが見覚えのある人物　ワーズワースだった。

ワーズワースはドアを叩いた。

「ちょっと乗せてもらえませんか？　クエックに乗って旅をしていたら、なんと盗賊に襲われてしまって、命はこのとおり助か

「つたんですけど、クエックはどっか行っちゃうし、食料もお金も全部落としてしまつて。あの、聞こえてますこっちの声？」

「それが砂漠の真ん中でぼつんといった理由らしい。」

「トツシュがつぶやく。」

「これ四人乗りだぞ？」

「詰めれば後ろにもうひとり座れます！」

「人助けになると強気なセレンだ。」

「アレンは無言で詰めて座つた。」

「それに気づいたセレンはちよっぴり笑顔になつた。」

「トツシュは頭を掻いて溜め息を漏らした。」

「つたく、シスターの知り合いじゃ仕方ない……か。ツイてる旅人だな」

「後部座席のドアが開かれた。」

「乗り込んできたワーズワースは驚いた顔をした。」

「あつ、セレンちゃん。奇遇だね、運命だね、神のお導きだねえ」

「嬉しそうな顔をしてワーズワースはセレンの横に座つた。狭いせいなのか、かなり密着してくる。」

「リリースがつぶやく。」

「旅は道連れ世は情け……古き良き時代の懐かしい昔の言葉だね」

「こうして思わぬ人物を加え、旅人は五人となつた。」

「車は何もない砂漠を再び走り出した。」

### 第三章 砂の海に沈みし都

#### 《1》

夕刻まで走り続け、リリスの記憶を頼りに集落までやって来た。

だが、そこは無人の集落だった。

もはや集落とは呼べない廃墟だ。

リリスは沈んだ地面を眺めていた。

「昔はここに小さなオアシスがあったんじやが、枯れてしまったようじゃ。水がなかなければ生きて行けんからな、集落を捨てて移住したんじやろっ」

水はないが建物はそのまま残っている。石造りの頑丈そうな民家などだ。

今晚はここで夜を明かすことになる。

水と食料は車に積んである。固形燃料もあるが、燃やす物がなく、暖を取るのが難しそうだ。あまり寒いようであれば、車の中で寝るのがいいだろう。

トツシュは独りで空き家に入り、そこでノートパソコンを操作していた。

「このフォルダだな」

微かな物音。

「アレンドানা？」

「なんでわかったんだよ？」

「跡をつけられていたことぐらい承知だ」

「チツ」

「いつしよに見るなら手伝えよ？」

第三の声。

「見て損はないと思うよ」

リスだった。

「勧められると見たくなくなる」

そう言つて帰ろうとするアレンの首根っこをリスが掴んだ。

「見ておゆき。情報は“失われし科学技術”のことだよ。それ

もこの世界に大きな変化をもたらす物のね」

「わかつたよ、見りゃいいんだろ」

ノートパソコンの前に三人が集まった。

読み込まれる情報。

それは機密文書だった。

シユラ帝國による水資源の独占。

枯れた大地に水が豊富にあつては困る帝國が、隠し続けている“失われし科学技術”について。

「これはすごい！」

誰かが声をあげた。パソコンの前にいる三人の後ろにもう一人。

トツシユの銃口が向けられた先にいたのはワーズワースだった。

「殺るしかないな」

本気のトツシユは引き金を引こうとした。

ワーズワースは慌てた。

「やっぱり見ちゃ不味かったですか？ 大丈夫です、僕は人畜無害なただの吟遊新人ですから。吟遊詩人っていうのは、伝承や伝説、噂話なんかを詩にして多くの人に広めるだけの存在ですから」

まったくフオローになっていなかった。むしろ口を開いたのは逆効果だ。

そこにセレンが飛び込んできた。

「みなさん探しましたよ。独りにしないでくださいよ、まあ」  
これによってトツシユは銃をしまった。そして、小さく小さく囁いた。

「命が延びたな。あとできつちりと話をつけるからな」

「……………」

ワーズワースは小さく頷いた。

ノートパソコンを閉じたトツシユはアレンの腕を掴んだ。

「リス殿はその二人と、とくにこの若造のお守りを。お前は俺様といっしょに來い、場所を変えるぞ」

トツシユはアレンを引きずって別の民家へ移動した。

二人つきりになったところで、再びノートパソコンを開いた。灼熱の砂漠の真ん中に聳え立つ鉄の要塞こそが、皇帝ルオのいるシユラ帝國のアスラ城だ。

水が枯渇しているシユラ帝國は、各地から水を調達して成り

立っている。

記載されていた「失われし科学技術」は、水を生み出す装置についてだった。

それを使えばシユラ帝國は自国で水をまかなえる筈だ。

しかし帝國はそれをしない。

その謎についての記載はなかった。

機密情報が記載されているが、これは資料ではなく、メモのようであった。抜粋された内容しか書かれていないのだ。

トツシユはほくそ笑んでいた。

「水が豊富にあれば、価値観が大きく変動するな。現在、水を取り仕切っているのは金持ちどもだ。その資産価値が失われたら、奴らの泣きつ面が見える」

装置を起動するために必要な、二つのオーパーツの記載があった。

遺跡を動かすために必要な、鍵の役割を果たす ヴォータン と呼ばれる槍。

装置自体の起動に必要な、スイシュ と呼ばれる宝玉。

二つのオーパーツは別々の場所に保存されている。

アレンは嫌そうな顔をした。

「マジかよ、こっちのやつアスラ城にあんの？」

ヴォータンはアスラ城のどこかにあるとだけ書かれていた。

「難攻不落のアスラ城に忍び込むなど、気が狂れたと思われる行為だ。まさに死に行くようなもの。」



しかし、この場に生きて帰った者がいた。

“暗黒街の一匹狼”の懸賞金を跳ね上げた大事件。

アスラ城に忍び込み、皇太后の寝込みを襲ったという事件だ。

「昔、俺様はあそこに忍び込んだことがある」

「マジかよ？」

「お前世間知らずだな、有名な話だと思っていたんだがな。だが二度目は無理だ」

「なんでだよ？」

「あれは酒に酔った勢いだ。酒場で飲んでである男と賭をしたんだ」

「だったら酒飲んで、俺と賭したら行けるんじゃない？」

それを聞いたトツシユはあきれ顔をした。

「お前がやれ」

「やだよ、俺酒飲まねえもん」

「……口が達者な奴だ。まあ、こっちのオーパーツはあとに回そう」

もう一つはシユラ帝國とは別の場所に保管されているらしい。

古代遺跡に スイシュ はある。

詳しい場所や遺跡の詳細は書かれていなかった。

その遺跡の名は。

「俺……この場所……知ってるような気がする」

ノア。

アレンの記憶の奥底で何かが蘇ろうとしている。

「……やっぱ知らない。知ってるかもしれないけど、思い出せ

ないんだ」

「思い出せ、重要なことだぞ。どこで聞いた、旅先か、書物か、どこで仕入れた情報だ？」

「だから思い出せないって言ってんだろ、せかさなよ」

「シユラ帝國に忍び込むのも骨だが、そっちは場所がわかってるんだ。いいから思い出せ」

トツシユはアレンの頭を掴んで振った。

「おくもくいだくせ」

「やめろよ、糞野郎、それ以上やったら！」

二人に忍び寄る影。

「ノアの方舟」

そう男はつぶやいた。

二つの銃口を向けられたワーズワースは苦笑いを浮かべた。

「すみません、気になって気になって……あはは」

トツシユはワーズワースに迫り、銃口を眉間に押しつけた。

「命を捨てる覚悟で来たんだらうな？」

「命は惜しいですけど、吟遊詩人としてロマンを追いつめる義務もありまして……。伝説とか、伝承とか、うわさ話とか……」

「失われし科学技術」と聞くと躰がウズウズしてしまうんですよね」

「その気持ちは俺様にもわかる。トレジャーハンターとして、財宝や“失われし科学技術”にはロマンを感じるが、命までは捨てないぞ」

目と鼻の先で引き金が引かれようとしている。

ワーズワースは後退るが、銃口もいっしょについてくる。

「ちよつと待つてください！ 吟遊詩人としてお役に立てる情報があるかもしれませんよ、ここで僕のこと殺しちゃっていいんですか、たぶん後悔しますよ？」

「ここでお前をやらないで後悔するよりはマシだ」

「そんな酷いですよトツシユ様。ノアですよね、ノアと言えばノアの方舟 が有名です。遙か神話の時代の伝承なので、ここで僕を殺しちゃったら、調べるの大変だと思うなあ」

「詳しいのか？」

「まあ吟遊詩人ですから」

「うさんくさい職業だ」

「トレジャーハンターほどじゃありませんが」

やはり引き金を引こうとトツシユがしたとき、アレンがめんどくさそうに割って入ってきた。

「殺すなら情報を聞いてからでもいいだろ？」

「やっぱり殺すのか。」

トツシユは銃を下ろした。多少は寿命が延びたらしい。

冷や汗を拭ったワーズワースは一つ咳払いをした。

「えゝつ、昔あるところにノアというオッサンがおりまして、ノアの方舟 をつくって助かりました。おしまい」

「……………」

無言でトツシユは銃口をワーズワースの口に突っ込んだ。

「あわわ…………ご、ごえんなさえ…………」

必死で謝るワーズワース。

トツシユは銃を抜いた。

「次はないぞ？」

「わかつてます、今のは冗談です、次はしつかり話します」

そして、ワーズワースは語り出した。

「遙かいにしえの時代、世界を洗い流す大洪水が起きました。その生き残りのひとりがノアという男です。ノアの方舟とは、保管計画のためにつくられた船艦の名で、洗い流された新たな世界で再び繁栄するために、生物のサンプルが乗せられたりしたらしいです。

というのが神話の時代の嘘かホントかわからない伝承です。

おそらく重要なのは、実在するアララトという名の古代魔導都市遺跡でしょう。そこはノアのゆかりの地らしく、方舟も近くにあるのではないかと言われています。あると言っても、伝承が嘘ではなかった場合の話ですが。そもそもアララトは伝承の時代よりも遙かに新しい都市ですから、あやかつて名を付けただけというのが、研修者たちの大方の見方です」

トツシユは頷いた。

「アララトなら聞いたことがある。過去に帝國が大規模な発掘作業をしたが、結局なにも見つからなかったらしいな」

シユラ帝國がなにも見つけれなかった場所になにかあるというのか？

それとも本当はなにかを発見していたが、それを隠しているとも考えられる。

「あとはリリス殿に聞けばわかるかもしれないな」

そう言つてトツシユは銃口をワーズワースに向けた。

「ちよつとそれはないですよ。ちゃんと話じゃないですか、報酬として命くらい助けてくれても……」

苦笑いで乗り切ろうとワーズワースはしたが、急に真面目な顔をして辺りを見回した。

「きゃーっ！」

悲鳴が外から聞こえた。セレンだ。

いち早くトツシユが民家を飛び出した。ハツとしたアレンも遅れて飛び出した。

五メートルを超える巨大な人影。

「トツシユ、トツシユ出てこい、早くしねえとこの尼殺すぞ！」

土鬼の姿。

そして、足を硬い土で固められて動けないセレンの姿。

「また……捕まっちゃいました。いつもいつもごめんなさあゝい」

セレンは大粒の涙を流していた。

土鬼には銃弾などが聞かない。砂と化して物理攻撃を無効化してしまふ。

銃を抜けないトツシユ。小さな声でアレンに呼びかける。

「おい、お前の銃なら前みたいはどうにかなるんじゃないのか？」

「セレンが近すぎる。電撃があつちまで飛ぶ可能性があるから無理」

「なら俺様がどうにかしてシスターを助ける。とりあえず奴の気を引いとけ」

「気を引くならあんただろ。あの野郎はあんたにご執心なんだからな」

「わかった、俺様が気を引いてシスターから遠ざけるから、すぐに撃て」

「オツケー」

作戦は決まった。

トツシユが全速力で走る。

「どこへ逃げるだ？」

やはり土鬼はトツシユを追ってきた。

それを見計らってからアレンがセレンの元へ走る。

セレンの目の前まで来たアレンは言われたとおり、すぐに撃った。

「トツシユ逃げろ！」

「早すぎだ、俺様まで殺す気がっ！」

構わずアレンは　ゲングニール　を放った。

稲妻が叫び声をあげながら宙を翔ける。

咄嗟にトツシユは地面に伏せた。

しかし、その行為は逆に身を危険に晒す結果になった。

巨大な土塊の手が振り下ろされる。

「おらを昔のおらだと思うな！」

電撃が効いていないのか!?

トツシユは逃げる間もなく巨大な手に潰されようとしていた。

突然、アレンが耳を塞いだ。

トツシユやセレンはその音を聴くことができなかった。巨大な手が分解されトツシユに降り注ぐ大量の砂。

「うががが……合体が……おらに躰に……なにが起きた!？」

土鬼自身も自分の身に起きたことを理解できていない。

セレンを捕らえていた足の土塊も砂と化していた。

この状況の手がかりはアレンだけが知っていた。

「音だ……頭の中がキーンとしやがった」

アレンだけが感知できた音。

砂に埋もれていたトツシユが這い出してきた。

「どうやら助かったようだな。やはり電撃が効いたのか」

それにアレンはなにも言わなかった。

しばらくしてワーズワースが物陰から出てきた。

「いやあ、怖かったですね。なんですかあれ、見たこともない

怖ろしい化け物でしたね」

アレンはワーズワースに顔を向けた。

「まだ死んだわけじゃないぜ」

「え？」

目を丸くするワーズワース。

そう、まだ土鬼は死んだわけではない。

「おれの躰が……躰が……動かねえ……っおおおん！」

あたりの地面に同化してしまって、どこにいるかわからないが、声だけが聞こえてくる。

トツシユは服についた砂を払いながら辺りを見回した。

「うるさいが、止めの差し方がわからん以上は放置だな」

「覚えてろトツシユ……おれが必ずぶつ殺してやる……」

トツシユは背中での声を聞いていた。

敵の襲撃を受けた以上、この場所はもつ危ない。

まだ敵が潜んでいる可能性もあり、そうでないとしても、土鬼から連絡がなければいつかは不審に思われるだろう。

「徹夜で走るぞ、みんな車に乗れ」

トツシユは車に向かった。

辺りを見回しながらセレンが気がついた。

「あれっ、リリスさんは？」

探し回ったがリリスは見つからず、仕方がなく車で待つことにしたのだが。

「呑気な婆さんだな、寝てやがる」

トツシユは呆れた。

運転席で寝ていたリリス。

ドアはロックされ、リリスが起きなくては車に乗れない。運転もリリスでなければできない。

アレンがドアを叩いた。

「起きろよ、勝手に寝てんじゃねえ！」

返事はなかった。

ワーズワースがボソツと。

「お年寄りには早寝早起きですから」

「年寄りで悪かったね」

そう言っでリリスがドアを開けた。



「ぼ、僕は自然の摂理を言っただけです」

ワーズワースはセレンの後ろに隠れた。

トツシユはさっそく助手席に乗り込もうとした。

「リリス殿、悪いができるだけ遠くまで車を走らせて欲しい。

今さつき敵に襲撃されたばかりで、ここも危ない」

「行き先がなきゃ自動運転はできないよ。まさか夜通し年寄りのわしに運転させる気じゃないだろうね？」

「なら安全そうな町まで行つてシスターを下ろす。それから次の目的地は言おう」

降りるのは自分だけ　とセレンは驚いた。

「わたしひとりですか？　ひとりにされたら、そんな無理です

よ。あのワーズワースさんは？」

答えるのはワーズワースではなくトツシユ。

「こいつは俺様たちといつしよに行く。いいよな、若造？」

プレツシャーを放ちながらに笑つたトツシユ。脅しだった。

「ぼ、僕はご一緒したく……」

言いかけたが、腹になにか硬い物を突き付けられて、言葉を開けた。

「ご一緒させていただきます。吟遊詩人はロマンを求めてどこまでも」

みんなと別かれることになってしまうと知つたセレンは慌てた。

「わたしも行きます！」

ひとりであるほうが危険だ。

何度も何度も人質に取られ痛感した。人質に取られ周りに迷惑をかけているが、ひとりでいたらもつと人質に取られてしまう。セレンは戦う術を知らないのだから。

トツシュは真剣な眼差しでセレンを見つめた。

「本当にいいんだな？」

「はい、なるべくご迷惑かけないようにがんばります」

「なら出発だ。リリス殿、アララトをご存じか？ そこに行こうと思っっている」

そう聞いてリリスはタッチパネルを操作し出した。

「その場所なら自動運転で行けるよ」

こうして全員車に乗り込み、新たな目的地を目指し車は走り出した。

《 2 》

その都市は半分以上が砂に埋もれていた。

古代魔導都市アララト。

クレーターののように地面が大きくくぼんだ場所、つまり掘り起こされた場所にアララトはある。長い年月の間に砂に埋もれてしまった都市を、帝國が掘り起こしたのだ。それからまた月日が経ち、もう半分以上が砂に埋まってしまったようだ。

セレンはそのアララトを眺めながら感嘆していた。

そう、まるでその都市は。

「巻き貝みたいですね」

いくつもの巻き貝のような建物があり、都市の中心にある巨大な巻き貝は塔のように聳え立ち、その高さは六〇メートルはありそうだ。

セレンの横ではワースワースも瞳を輝かせていた。

「この光景を見ると、あの伝説は本当なのかもしれないね。この都市はかつて海の上にあったそうです」

辺りは砂漠しかないこの大地に海があつたなど、だれが信じるだろうか。

しかし、リリスは知っていた。

「そう、かつてこの都市は海の上に存在した。海上都市アララトと言えば、別名“煌めきの

都”と呼ばれるほど美しい場所じゃった。今は見る影も無い廃墟じゃがな」

建物の下部分は砂に埋もれており、入り口が塞がれてしまっている。入れそうな場所は窓だが、建物の中まで砂に侵食されていないことを祈るばかりだ。

この場に来て、アレンはまるで魂が抜けたように呆然としていた。心配になったセレンが声をかける。

「大丈夫ですかアレンさん？」

「……………」

「聞こえてますかあ？」

「俺……あの天辺の部分、見たことあるような気がする」

アレンが指差したのは都市の中心にある巻き貝の塔。

ここまでやって来たが、なにか手がかりがあるわけではない。

とにかく何かを探すしかない状況で、手始めに五人はその塔に向かうことにした。

クレーターのようにくぼんでいる砂の丘は、一度滑り降りたら登るのが大変そうだ。まるで砂地獄のようである。しかし、この斜面を降りなければ、都市に行くことはできない。

トツシユが皆の顔を見回した。

「降りるのはいいが、登ることはできないな。ロープもなにもない。こんな長いロープを調達するのも一苦労だ」

ワーズワースが手を挙げた。

「はい、ええつと、あの浮いてる車なら大丈夫じゃないでしょうか。浮いているから斜面なんて関係ないような気がしますけど？」

「駄目じゃな」

と否定してリリスは言葉を続ける。

「斜面が急すぎる。宙を浮いて走行していても、完全に引力を無視しておる訳ではないからの」

なにかよい手はないのか？

トツシユはお手上げだった。

「仕方ない、砂に埋まつてるなんて予想してなかったからな。

出直して準備を整えよう」

その矢先だった。

ふらふらとした足取りでアレンに足を踏み出し、そのまま転げ落ちていったのだ。

「あの馬鹿野郎！」

トツシユはそう叫んでから、三人の顔を見た。

「おまえらはここで待機だ。トランシーバーで連絡する。二人はリリス殿に守ってもらえ、じゃあな！」

トツシユも斜面を滑り降りアレンを追った。

すぐにアレンに追いつくことができた。

「おい、勝手な行動するな！」

「……………」

アレンは遠めをして歩き続けた。まるでトツシユの声が届いていないようだ。

「おいっ！」

「……………待ってる……………」

「は？」

「……………樂園……………俺はあの場所……………」

「頭大丈夫か？」

アレンの足は確実に巻き貝の塔に向かっていく。

いったいアレンになにが起きているのと言っただけ？

心配がした。

地中からの心配にトツシユは気づいてアレンの腕を掴んだ。

砂を舞い上げ、地中から飛び出してきた完全防備の兵士たち。

防具の紋章はシユラ帝國の物だった。

いくつもの銃口に狙われている。トツシユは銃を抜くことすらできなかつた。ここで少しでもおかしな真似をすれば、蜂の巣になるだろう。

さらにこの場に現れようとしている巨人。

砂の中から這い出して来た土鬼。

「トツシユ、トツシユ、トツシユ、トツシユ！」

「はいはいはいはい、俺様ならここにいるよ砂怪人。本当にしつこいぞおまえ」

「殺してやるーッ！」

土鬼は両手をドリルに変形させトツシユに殴りかかってきた。戦う術がないトツシユは逃げることにしかできなかった。

右往左往逃げ回るトツシユに向かって、ドリルアームがロケット弾のように飛んできた。

急いで伏せたトツシユの真上をドリルアームが掠め、兵士の軀を串刺しにした。

混乱する兵士たち。

危機が一転してチャンスになった。

「莫迦鬼が暴れてくれたおかげで助かったな」

トツシユは レッドドラゴン を撃った。

兵士の防弾ヘルメットを砕き飛ばした銃弾は、勢いを失わずに頭蓋骨を貫いた。

兵士たちの軀はプロテクターによって守られている。ヘルメットの目元部分だけが、防弾プラスチックであり、ほかに比べれば弱い。

しかし、そこを狙ったのはただのクセだ。

再び レッドドラゴン が咆吼をあげ、今度は胸のプロテクターを撃ち抜いた。

兵士たちは驚き慌てふためく。

たかが銃弾が帝國の最新鋭のプロテクターを貫ける筈がなかった。

レッドドラゴン が普通の銃弾を放つ銃ではなかっただけの話だ。

この銃は“失われし科学技術”によるもので、トツシュが古代遺跡で見つけた物だ。銃弾は拳銃弾ではなく、先の尖ったライフル弾を使用。このライフル弾も特別製で、八〇口径という気の狂れた仕様であり、一度の装填できる球数は四発。現在の技術であれば、もっと銃を大きくしなければ銃が衝撃に耐えられないだろうし、撃った本人も腕の骨が砕けるだろう。

ただ“失われし科学技術”を使っているらしいとは言え、魔導的な処理が施されているわけではないらしく、金属の精錬に“失われし科学技術”が使われ、ある程度の反動を抑え、銃の破損を防いでいる。そのためにはつきり言ってこれは不良品である。

抑えきれない反動が大きすぎて、常人が撃てば骨を折るか肩が外れるか、それとも指を持って行かれるか。片手で撃つなどとんでもない。

もしかしたら元々は、反動を抑える魔導処理が施されていたのかも知れない。それが長い年月によって消えてしまったとも考えられる。もしくは、人間用ではないのかもしれない。

そんな化け物をトツシュは片手で使いこなしていた。

トツシュの腕は鋼のように鍛えられているが、それだけでは化け物を手なずけることはできない。

秘密は服の下にある。

レッドドラゴン を握る手には、この銃と同じく遺跡で見つけたグラブがはめられ、グラブ、アーム、上半身のプロテクターとが繋がっており、衝撃を吸収すると共に筋力を増強して怪力を生み出す。

四発の銃弾で四人の兵士を仕留めた。

この場で待ち伏せしていた兵士の数が五人。一人は土鬼が仕留めてくれた。これで残るは土鬼のみだ。

しかし、化け物である レッドドラゴン を持つてしても、粒子である砂にはダメージを与えられない。

戦闘がはじまったというのにアレンは惚けている。

頼みの綱はアレンの グングニール だと トツシユは思っている。

「馬鹿野郎！ 銃を撃てアレン！！」

駄目だトツシユの声に反応しない。

こうなったら仕方がない！

アレンの懐から、トツシユは グングニール を奪おうと思いついたとき、巨大な土塊の足が落ちてきた。

トツシユはアレンに激突するように抱きかかえて、大きく前へ跳んだ。

足は狙いを外れ地面を大きく揺らした。

舞い上がる砂煙。

アレンを庇ったままでは戦えない と判断したトツシユは、アレンをその場に残して走り出した。



「殺せるもんなから殺してみろ！」

挑発しながらアレンから離れるトツシュ。案の定、土鬼はトツシュを追いかけてきた。猪突猛進の相手で助かった。

しかし、危機は遅れてやって来た。

アレンの足下が崩れだした。おそらく先ほどの振動で、何らかの変動が起きたのだ。

砂と共に地面に呑み込まれるアレン。

トツシュはアレンを救うどころではなかった。

「糞ツ、こいつをどうにかしないことには……」

アレンを助けられない。

砂はクツシヨンの役割を果たし、アレンを優しく受け止めた。地上から落ちた衝撃で、アレンは正気に戻っていた。

「どこだよここ……？」

天井から差し込む光、砂が崩れながら滝のようにまだ落ちてきている。

穴から見える感じだと、どうやら部屋二つの天井を破って落ちてきたらしい。ただ、ここが一階なのか、二階なのか、それとも三階なのか、建物の元の高さがわからないので見当もつかない。

登る術がないので、あの天井の穴からは地上に出られそうもない。

「おーい！」

大声は地下に響いただけ。助けは来ない。

「まったく、みんなどこ行っちまったんだよ」

周りを見回すと、そこは民家の一室のようだった。

テーブルやソファや何かの機械が置かれている。

アレンは部屋の灯りを探した。

それらしき壁のボタンを押してみたが、なにも起こらない。

間違ったボタンを押した可能性もあるが、動力自体が失われて  
いるのだろう。

先に進むとしても灯りは必要だ。穴まで登るとしても道具が  
必要だ。

アレンは部屋を物色しはじめた。

戸棚などを開けていく。

この時代では見たこともない物も多いが、形は少し違えど今  
も残っている物も多い。

「懐中電灯みつけ」

それは今の時代の物より小型で、少し見た目も違っていたが、  
電球の代わりであるうパーツと、その周りの銀色のフィルムな  
どの形状で判断できた。

角の取れた長方形の本体と、腕に巻くであろうベルトで構成  
されている。ベルト腕に巻いて、本体のスイッチを押すと、光  
が腕の向いた方向を照らした。

「もしかしたらレーザーとか出るんじゃないかって、ちょっと  
期待してたんだけどな」

そういう形に見えなくもない。

光を手に入れ、さっそくアレンは先に進むことにした。

廊下に出て、先に進み、ドアの前に立った。

ドアにはノブはなく、大きなボタンがついていた。

ボタンを押すが反応がない。ここも動力がなければどうにもならないらしい。

「自動化ってこういうとき困るんだよな」

いざというときの手動開閉装置がないか探した。

壁に亀裂を見つけ、そこに小さなふたを見つけた。開けると中には、片手で回すハンドルが入っていた。

アレンはオイルを漕ぐようにハンドルを回す。

すると徐々にドアがスライドして開いて、その隙間から砂が流れ込んできた。

「ヤバっ！」

慌てて閉めようとするが砂に押されて閉まらない。

砂はどんどん流れ込んでくる。幸い少しの隙間だったので、川の激流のように流れてくることはなかったが、それでもいつかは部屋の中まで埋まってしまいそうだ。まるで砂時計の中に閉じ込められたようだ。

本当にこの場所がすべて埋まったとしたら、落ちてきた穴を登ることも可能だろう。だが、多くの砂が部屋に流れ込んでくると共に、それが今度は防壁の役割も果たして徐々に流れは遅くなる。そう考えてペースを予想すると、アレンの腹が持ちそうにない。

「腹減った」

すでに空腹状態だ。

ただの空腹だといいが、人間は水をまったく摂取しない状態で一週間前後、水さえあれば一ヶ月以上は生きられると云われている。そのころにはさすがに、砂は天井まで達していそうだ。「腹減ったなあ。携帯食料じゃ腹の足しにならねえっつーの」車での走行中、アレンは何度も人の住んでいる場所に立ち寄ろうと言ったが、全員に反対されてちよつとばかりの携帯食料で我慢していたのだ。

アレンは元の部屋に戻って穴を見上げた。

本来なら、この程度の高さなどアレンはジャンプで届く。だが、この部屋と同じく今のアレンには動力がなかった。

「腹が減って力が出ねえ」

よろよろよしながらアレンはテーブルやイスを運んだ。それを積み重ねて上の階に登るつもりだった。

瓦礫の塔を完成させて、どうにか上の部屋まではよじ登ることができた。

問題はここから先だった。

次の穴を抜ければ天井なのだが、穴の真下に足場はないため塔を組めないのだ。床の穴ギリギリに塔を設置した場合、それでは天井まで行けたとしても、そこから砂の高さと滑りやすさがあり、手で掴む場所もなく登れない。

下のフロアから塔を増設しても、バランスが悪くてこれ以上は崩れそうだ。

アレンが為す術もなく穴を眺めていると、逆光を浴びた人の顔が覗いてきた。

「お助けして、あげんしょうか？」  
紅を差した唇が艶やかに笑っていた。

《 3 》

銃声がここまで響いてきた。

この場で待つように言われていたセレンは居ても立っても居られない。

「今の銃声ですよね？」

顔を見られたワーズワースとリリスは冷静だった。

「銃声なら敵と遭遇したってことだね。だとするとここも危ないんじゃないかな」

「そうじゃな、他人の心配より自分の心配をしたほうがいいよお嬢ちゃん」

二人とも雑談のような落ち着いた口ぶりだった。

慌てているのはセレンだけ。

「ええっと、そうだ、トランシーバーで連絡します！」

セレンはトランシーバーをしようとしたが。

「これどうやって使うんですか？」

使い方がわからなかった。一昨日トツシユに教えてもらったばかりなのに。

ワーズワースがトランシーバーを優しく奪った。

「僕がやるよ」

周波数などはすでに設定してあるので、ボタンを押しながら

しゃべるだけだった。

「こちらシスターとゆかいな仲間たちです、どうぞ」

ザ、ザザザザ……。

《こっちは取り込み中だ！ あとにしろ！》

トツシユの怒鳴り声はトランシーバーの外に大きく漏れてきた。

構わずワーズワースはしゃべる。

「敵と交戦中っぽいけど、どのだれとやり合ってるの？」

《帝國だ、帝國に待ち伏せされてた！》

「帝國に追われてるって話は僕聞いてないんですけど。まさか昨日の怪物も帝國の差し金だったりして？」

《そうだ、その昨日の奴と殺り合ってる最中だ！》

「げっ。やっぱりこっちも危ない感じだねえ。こうなったら登ることはあとで考えるところとして、そっちと合流しっちゃったほうがいいんじゃないかな？」

《もう黙ってる！》

「まだ話の途中なんですけどー？」

返事がない。

最悪、やられた可能性もあるが、きっとシカトしているだけだろう。

ワーズワースは二人と顔を見合わせた。

「どうしますお嬢さん方？」

尋ねられても困るといふ表情をしたセレン。

一方、リリスは遠くを眺めていた。

「へりがこちらに向かつておるな」

まだ豆粒くらいだったそれが、だんだんとヘリコプターの全容を模っていく。

シユラ帝國の軍事ヘリだ。どうやら戦闘用ではなく、輸送用らしい。とは言っても最低限の装備はついている。

すでにリリスは車に乗り込もうとしていた。

「一先ず逃げるぞ。早う乗れ」

エンジンが掛かった。

立ち尽くしているセレンの腕をワーズワースが引いた。

「行くよセレンちゃん」

「あ、はい！」

二人も車に乗り込み、アクセルが底の抜けるほど踏まれた。

逃げる先は斜面の下　アララトへ！

「お婆ちゃんそっちじゃないよね!？」

ワーズワースが叫んだ。

それを無視して車は斜面を滑り落ちた。

降りてきたのはいいが、アレンやトツシユの居場所がわからなかった。

セレンはトランシーバーを手に取った。使い方はさっき見た。

「トツシユさん聞こえますか！　帝國の支援部隊が来たので、車ごと下に降りて来ちゃいました」

応答はない。

セレンの心配が募る。

「トツシユさん……大丈夫でしょうか？」

《大丈夫に決まってるだろう！》

ボタンを押したままで通信が繋がっていたらしい。

向こう側からトツシユの荒い息づかいが聞こえる。まだ交戦中らしい。

《砂野郎、逃げても逃げても追って来やがる。物理攻撃は効かんし、どうしようもならん。おっ、今車が隣の道通りすぎるの見えたぞ！》

「本当ですか!? 今の道戻ってくださいリリスさん」

セレンが運転席のリリスに指示を出した。

すぐに車は急激なU字カーブをして、車内がGによつて引つ張られる。

「きゃっ」

後部座席のセレンは短く悲鳴を上げて、ワーズワースに抱きついてしまった。

「きゃっ」

また悲鳴をあげてすぐにセレンはワーズワースから離れた。

少し頬を紅くするセレン。

ワーズワースはにっこり笑っていた。そんな顔をされると余計に恥ずかしい。

車の前方に人影が見えてきた。

リリスは助手席まで身を伸ばしてなにかをしようとしている。驚くワーズワース。

「お婆ちゃんなにしていますか、ちゃんと運転してください！」



「なあに、ちゃんと走っておるよ」

リリスは呑気に言いながら、助手席のドアを開けていた。車はトツシユの真横を駆け抜けようとしていた。

まさか!?

外に伸ばされたリリスの手。

「さあ、掴みな」

その手を掴んだトツシユが車に飛び込んだ。

老婆とは思えない怪力でトツシユが車内に引き上げられる。

「うおっ！」

トツシユは思わず声をあげた。

砂がトツシユの足首に巻き付いた。

土鬼の執念がトツシユの足首を捕らえたのだ。

綱引きの縄のようにトツシユは両方から引つ張られた。

「ぐあっ、躰が千切れる！」

足首に巻き付いている土縄は地面にしっかりと根を下ろしている。一方リリスの支えは片手で握っているハンドルのみ。リ

リスごと外に放り出されるのも時間の問題に見えた。

車内が魔気に満ちた。

トツシユの手を握る枯れた手が潤いに満ちていく。

その姿を見たワーズワースは己の目を疑った。

「美しい」

枯れ木のような老婆が美しい華に変化したのだ。

そして、セレンもまたその姿をはじめて見て言葉を失った。

妖女リリス。

次の瞬間、土縄が限界までピンの張られ、急停止させられた車が激しく揺れた。

「くっ」

齒を食いしばるトツシュ。肩が抜けたのだ。

その衝撃を受けてもリリスは艶やかに微笑み、ハンドルも破損せずに耐えた。

だが、驚くべきことが起きた。

急停止したのは一瞬で、車ごと振り子のように振られたのだ。宙を飛ぶ車がさらに宙を飛んだ。

まるでそれはハンマー投げだ。

しかし、車は投げられることなく渦巻き貝の建物に叩きつけられたのだ！

爆発した民家が破片を飛び散らせる！

車は！ 四人は無事なのか！

崩れた民家に沈むように刺さっている車。

そこにトツシュとリリスの姿はない。彼らは未だ土縄に繋がれ宙を振り回されていた。

顔を傷だらけにしたトツシュ。

「今ので何本か骨が逝った……にも関わらず、リリス殿は……」

顔にひとつも傷がない。傷などある筈がないのだ。こんな美しい顔に傷などある筈がない。すべての衝撃が物理法則を無視して、妖女リリスを避けたのだ。

目の前でリリスを見つめてしまったトツシュは、今にも気を

失いそうだった。

人間ハンマーはまたも建物に叩きつけられようとしていた。

リリスはトツシユの躰をよじ登った。

密着する男と女の躰。

魔気に当てられたトツシユはここが限界だった。意識が途切れた。

リリスは構わず大柄な体躯を昇り、足首に巻き付いた土縄を掴んだ。

土縄が溶ける。

「くくあああああっ！」

至る所から土鬼の叫びが木霊した。

土縄が途切れると同時に、解放されたトツシユの躰が天空に放り出された。

魔鳥の翼のようにリリスの長い黒髪が靡いた。

トツシユを胸の前で抱きかかえたリリスは舞い降りてくる。

そして、羽毛のように地に降り立った。砂一つ舞い上がらない。

リリスはトツシユを地面に寝かせ、広大な砂地に向かって微笑んだ。

「さあ、どこからでも掛かってお出で……坊や」

マシンガンのように土弾が連射させた。

リリスは避けようとしめない。その必要がないのだ。

土弾はリリスに触れることも敵わず、見えない壁に当たって溶けて消える。

「うおおおっ、おらの攻撃が、なぜ効かねえ！」

「所詮、汝はアーティファクトに過ぎぬと言うことじゃ。一見して砂粒に見えるが、実際はその一つ一つが高性能のナノマシン。厄介と言えば厄介じゃが……」

四方から現れた砂のカーテンがリリスを包み込んだ。

土で固めて窒素させる気だ！

それも触れることができたらの話。

土のカーテンが溶けて流れる。

何事もなかったようにリリスは微笑んでいた。

「ナノマシンが失われるたびに、汝の力は減退していく」

リリスの視線の先で土鬼が人型を模った。以前は五メートルはあった身長も、今では一メートルほどしかない。広がる砂の大地は無限に思えても、土鬼の本体は限られているのだ。

「ぶっ殺してやる！ おらは強い、負けねえ！」

「そう……己の能力をもつと匠に使いこなせたら、強くなれたじやろうな。それでも妾には勝てんが」

土鬼は致命的なミスを犯していた。

妖しく輝くりリスの瞳は“すべての土鬼”を捉えている。

今、土鬼は一箇所に集まっていた 人型として。

「お眠り……そして、決して覚めない悪夢の中で生き続けるがよい」

リリスの躰から墨汁のような色をした何が噴出した。それがなにかはわからない。まるで生き物のように、例えるなら蛸のように、すべての触手を使って土鬼を丸呑みした。

「グギャアアアアアアアアッ！」

躰が溶かされる絶叫。

創造主は土鬼に感覚の一つとして痛みを与えた。それがなければ、こんなにも苦しまずに済んだものを。

茶色い塊が地面に広がった。

土鬼は滅びたのか？

いや、リリスは悪夢を与えたと云ったのだ。

一粒のナノマシンが風に吹かれて砂と共に舞い上がった。

火鬼は着物の帯を解き、それを穴の下に垂らした。

「ほうれ、これに捕まるでありんす」

「断る！」

アレンは力強く言い放った。

相手は敵だ。どんな企みがあるかわからない。

拒否された火鬼は嫌な顔一つせず、逆に躰を火照らせて艶笑を浮かべた。

「嗚呼っん、つれないおひと」

刹那、帯が生き物ようにしてアレンの胸に巻き付いた。

「やめろっ！」

「もう……放さないよ糞餓鬼！」

口調が急に変わった火鬼は夜叉の表情をして帯を手繰った。

アレンの躰が宙に浮く。

そのまま穴を抜けて空高く引き上げられ、急に帯がほどけた。天高く放り出されたアレン！

どこかで 齒車 の音がしたような気がした。

空中でバランスを整えたアレンが地面に足から激突した。舞い上がる砂煙。

「てめえなにしゃがる！」

地面に片手をついているアレンは火鬼を睨みつけた。

「おほほほほほつ、愉快愉快。まるで小猿の曲芸のようでありんす。さあさあ、もつと遊んでくんまし」

敵を目の前にして火鬼は軽やかに舞い踊った。隙を見せているように見えるが、その舞いに隙はない。この舞いは武芸の一つであり、攻防の型なのだ。

アレンは片手を地に付けたまま動けない。

「腹減ったあ」

このままではろくに戦えない。

火鬼は鉄扇を構えた。

「そちらから来ないのなら、こちらから行くでありんす」

鉄扇が風を切つたと同時に炎が起きた。

炎舞だ。

舞うと同時に炎の帯がアレンに襲い来る。

アレンには避ける体力も残されていなかった。

だが、炎はアレンを掠め飛んでいく。

次々と放たれる炎はすべてアレンを掠めて後方に飛んでいくのだ。

「ほうれ、ほうれ、炎が怖くて一步も動けないでありんすか？」

「いや……腹が減って動けない」

「おほほほほっ、おつな冗談を。けれど逃げ惑ってくりんせんと、つまらないでありんす」

「無理……腹が減ってて逃げるとか無理。もういいよ、早く殺せよ」

「依頼主から生け捕りにせよと言われてるでありんす」

それは良いことを聞いたとアレンは笑った。

「わかつた。なら抵抗しないから早く捕まえるよ。で、捕虜に飯喰わせる」

「はい？」

「だから早く捕まえてくれって言ってるの」

「なら……死なない程度に痛めつけて捕まえてやるよ！」

狂気を浮かべた火鬼が鉄扇を振るおうとしたとき、その場に帝國のジーブが乗り付けた。

「はい、そこまでよ！」

ジーブから降りてきたライザはアレンと火鬼の間に割って入った。

ライザは愛しい恋人にするように、織手でアレンの頬を撫でた。

「どうしたの坊や、今日は元気がないわね」

「腹減ってたんだよ。なんか喰わしてくれんなら大人しく捕虜になるけど？」

「ならまず銃を渡してくれるかしら？」

アレンは懐から グングニール を素早く抜き、銃口をライ

ザの眉間に突き付けた。

驚きもせず、怯えることもなく、ライザは微笑んでいた。

「どちらが早いかしら？」

ライザもまた、ピナカをアレンの腹に押し当てていた。

もしアレンのほうが多く早く引き金を引いたとしても、周りにいる火鬼や兵士たちが黙ってはいないだろう。

一矢を報いるつもりなどアレンにはなかった。

「じゃあ、これ飯代つてことで」

アレンは銃を指先で回して、グリップをライザに向けた。

グングニールを受け取ったライザはアレンに背を向けて

歩き出した。

「食事はヘリの中でしましょう。アタクシといっしょに」

アレンが兵士に拘束され連行させる。

その姿を見ながら書きは不満そうな顔をしていた。

「せっかくここまで出向いたつてのに、嗚呼つまらないつまらない」

その声を聴いたのか、ライザが振り返った。

「アナタの仕事はまだあるわよ。トツシュたちがまだどこかにいるわ」

「それなら土鬼がどうにかしてるでありんす」

このとき、すでに土鬼はリリースにやられたあとだった。まだその事実を火鬼たちは知らなかった。



呆れた顔でライザは目の前のアレンを見つめていた。

「本当によく食べるわね。胃の許容量を完全に超えていると思うのだけれど？」

もともと日数をかける作戦ではなかったため、食料はあまり積んでこなかったが、そのすべてがこの小柄な“少年”に食い尽くされそうだ。

兵士がそつとライザに耳打ちする。

「もう非常食量までなくなりそうなのですが……？」

「いいわ、全部出しちゃいなさいよ。今日中には城へ帰れるように、さつさと仕事を片付けましょう」

そして、ついにアレンはすべての食料を腹に収めた。

「喰った喰った……次は昼寝でもするか」

「させないわよ」

間髪入れずライザは言った。

二人が向かい合って座るテーブルの上が片付けられる。

アレンには常に銃口が向けられている。まるで尋問室だ。

頬杖を突いたライザが身を乗り出してきた。

「では話を聞かせてもらいまししょうか？」

「べつに話すことなんてないけど？」

「そちらから話さなくても、質問に答えてくれればいいわ」

「嫌だと言ったら？」

アレンの頭に左右からライフルの銃口が突き付けられた。そ

れがライザからの答えだ。

動じないアレンを見るライザは楽しそうだった。

「銃を離しなさい。この子に脅しは無意味よ」

頭から銃が離されたが、銃口は狙いを放さず指は引き金に掛かったまま。

ライザは椅子に深く腰掛けた。

「まずアナタたちの目的から伺おうかしら」

「なんか俺もよくわかんないんだよね。トツシユに聞けば？」

「彼は捜索中、そのうち見つかるんじゃないかしら。それまでの間は、アタクシとアナタでお話ししましょう」

「ならそつちが話しなよ」

「そう、なら話そうかしらね」

一息ついてライザは仕切り直し、話をはじめることにした。

「古代都市アララトの発掘調査を帝國が行ったのは、先代の皇帝の時代、アタクシがやってくる前の話よ。調査では数々の“失われし科学技術”が見つかったけれど、多くはすでにその場から持ち去られていたらしく、これと言った発見はなかったらしいわ。それでもずいぶんと帝國の役にはたつたみたいだけれど。だからここには何も残っていない筈……なのはどうしてアナタはやつて来たのかしらねえ？」

「なにかあるから来たんじゃないの？」

「人事みたいに言うのね。アタクシはアタクシなりに過去の資料を調べてみたのよ、それで見つけたわ スイシユ というオパーツを」

「知ってるなら聞くなよ」

ライザは微笑んだ。相手に目的を認めさせたのだ。

さらにライザは話を続ける。

「帝國は結局　スイシュ　を見つけれなかったわ。もしかしたらここにもないのかもしれないわね。アタクシはこの手で　スイシュ　を研究してみたいわ。手がかりがあるなら教えて頂戴。教えてくれなくても良いわ、アナタたちが見つけて来てくれれば」

「俺らが先に見つけてあんたに渡すと思ってるの？」

「それは力尽くで奪えばいいわ」

「言うねえ」

たとえライザは科学者としての興味であっても、帝國の手に渡ることには変わりない。帝國は水を生み出す装置をなかに使おうだろうか？

ライザは席を立った。

「食後の散歩なんてどうかしら？」

「めんどくさい」

「そう言わないで、少し付き合ってくださいかしら？」

「はいはい、わかりました」

アレンは銃で小突かれ、仕方なく席を立った。

数人の兵士を引き連れてヘリの外に出る。そこからジープに乗り変えて都市の中心　巻き貝の塔へ。

色褪せた塔の内部。

外観と同様、装飾の数々は海を思わせ、かつての美しさの片

鱗が感じられる。

そこからさらに奥へと入っていくと、一変して金属的な作りになっていく。

「エレベーターは動かないから非常階段から下りましょう」

先頭を切って歩くエルザが非常階段を降りはじめた。

長い長い螺旋階段だ。

途中にフロアへ出る扉などはなく、渦巻きがずっと底まで続いている。

五分ほどかけて階段を下り、やって来た部屋はコンピュータールームだった。

巨大なスクリーンや機器類は部品が外され、分解されて持ち去られてしまったのだろう。動力があつたとしても、もうここは使い物にはならない。

部屋の中心でライザが立ち止まった。

「ここから先がわからないのよね。調査によると、この下まで建物が続いているのだけれど、入り口がないのよ。構造上、あるとしたらこの部屋なのだけれど、それらしい物はない。どう、アナタなら探し出せるかしら？」

顔を向けられたアレン。

「なんで俺なんだよ？」

「アナタならもしかしてっと思ってただけよ」

「俺にできるわけねえじゃん。こんなところ来たこともねえし」

「それならそれでもいいわ。なにか手がかりがないか、アナタも探してくれないかしら？」

アレンはその場を一步も動かない。なにかを探す動作もしない。決して銃を突き付けられているからではない。動けない理由があるのだ。

それをライザは言い当てた。

「嘘が下手なようね。アナタは入り口を探すことができない。だって探すフリになってしまっただものね」

「はあ？ なに言ってるんのアンタ？」

「惚けるのも下手ね。さあ、入り口を開けて頂戴。アナタは知っているはずよ」

「あなたの言ってること意味わかんねえよ」

アレンはライザから目を背けた。

この遺跡に来たときからアレンの様子は変だった。

俺……あの天辺の部分、見たことあるような気がする。

それはいつ、どのような状況で見た光景だったのか？

本、写真、映像、幻、夢の中……それとも実際にその目で見た光景だったのか。

ライザはなにを知っている？

「ノアの方舟」

と、ライザは囁いた。

アレンは顔色一つ変えなかった。

さらにライザは付け加えた。

「ノアの方舟」と呼ばれる施設がこの地下には存在している。なにか思い出したかしら？」

「いや、ぜんぜん」

「あらん、最後までアタクシに言わせる気かしら。人払いをして置こうかしらね、さっ、アナタたちこの部屋から出てってくれるかしら」

ライザを兵士たちを下がらせた。

二人つきりなり、アレンが逃げるのも今がチャンスかもしれない。

ピナカ の銃口はアレンを狙っている。

一発目さえ防げれば、あとはアレンの駆動力で乗り切れるかもしれない。

しかし、アレンは何も事を起こさなかった。

「最後までって言ってたけどさ、なに言うつもりなんだよ？」

「それはアナタ次第ね」

「俺次第って言われても、なんもしんねえし」

「ノアの方舟 は言わば隔離施設だった。すべては秘密裏に、アラトの研究者たちもほとんど知らなかったわ。アタクシもその存在に気づけなかった、今もその真の目的がわからないわ。ただ一つはつきりしていることは……そう、ノアの方舟 はアナタが過ごした施設ってこと」

「ふうん」

鼻を鳴らしただけのアレン。人を喰った態度だ。

ライザは黙ったままアレンを見つめた。相手が口を開くまで待つつもりだ。

沈黙の中、時間が過ぎ去っていく。

こういう間にアレンは弱かった。

「話すよ、話せばいいんだろ。実はさ、記憶が曖昧なんだよ。ホント断片的にしかこのこと思い出せなくてさ、それもさっきやつと思いついたって感じで。入り口なら知ってるよ、たぶんだけだな」

「記憶が……そう……とにかく早く開けてもらおうじゃない。アナタの樂園への入り口を」

「はいはい」

アレンは迷うことなく壁にある隠しパネルを見つけ、そこに両手を押し当てた。

《認証が完了しました》

床からエレベーターがせり上がってきた。動力が生きていたのだ。

エレベーターに乗り込んだ二人。

問題なく稼働したエレベーターは、扉が閉まると同時に自動的に下へと向かった。

ほどなくして止まり、扉が開かれた。

なぜライザは樂園と称したのか、その答えは広がる光景にあった。

地下施設にも関わらず、ここは人工太陽に照らされ、大地が広がり草木が育っている。ここにあるのは植物だけではなかった。動物の群れが遠くに見える。あれは羊だろうか、砂漠には珍しい長い毛に覆われた動物だ。

ほかにも多くの動物たちと、鳥たち、昆虫や、流れる川には魚たちもいた。

地下とは思えない広大な施設。

どれだけ長い年月、幾星霜の年月をこの動植物たちはここで過ごしてきたのだろうか。

ライザはこの世界を見回しながら言った。

「どう、ふるさとに帰ってきた気分は？」

「さあね、あんま覚えてねえし」

「そう、じゃあ感慨にふける必要はないわね。さっそくスイシユを探しましょうか？」

「それはいいんだけどさ……一段落ついたから聞くけど」  
アレンの瞳がライザを射貫いた。

そして、こう言ったのだ。

「あんただれ？」

数時間前のこと。

玉座に座るルオの前に、ある女が姿を現した。

「どうしたライザ？」

“ライオンヘア”は毛羽立って乱れ、後頭部を押さえて苦しそうな顔をしているライザ。

「何者かに襲われて、今までバスルームに監禁されていたのよ。この城の内部に敵が侵入していることは間違いないわ」

「ほう、客人とは珍しい。ほかに情報はあるかい？」

「鬼兵团との連絡がつかないわ。それと“アタクシ”がある場所に、兵を引き連れて向かったらしいわ」

「君が？」



「ええ、ここににいるのに」

「なかなか面白い話だ。どこに向かったかわかるかい？」

「それはすでに調べがついているのだけれど、問題は派遣された部隊とも連絡がつかないことだわ」

「ますます面白い」

この状況を楽しむルオ。

笑いながらルオは頼杖をついた。

「このまたとない面白い状況を愉しむには、ここに残るべきか、その場所とやらに行ってみるか」

「敵がまだ城の内部にいる可能性は十分あるわ。貴方には城を守る義務があるのではなくて？」

「それがつまらない、じつにつまらない。朕は城の中で退屈なのだ」

「わかりましたわ。ルオ様不在の指揮はアタクシが執りましよう」

「しかし、君の方が偽物だったらどうする？」

それこそが敵の作戦かもしれないと考えるのは当然。ルオを厄介払いできれば、城を落とすのも容易くなるだろう。ルオはシユラ帝國の絶対者なのだから。

ライザは頷いた。

「その可能性は十分に考慮するべきだわ。少なくともアタクシが二人は存在している以上、偽者が必ずいるということなのだから」

「君が本物だと証明できるかい？」

「それは難しいわ。偽者がどの程度アタクシを再現しているかわからないもの。DNA検査をするにしても、時間が掛かるわ」

「つまり君も信用できないわけだ」

「そういうことになりますわね」

あっさりと認めた。

ここにいるライザは本物が偽物か？

一人の偽者がいるとしてら、二人目がいる可能性もある。

ライザの偽者がいるのなら、ほかの者の偽者もいる可能性がある。  
ある。

疑えば切りがなくなる。

ルオが玉座から立ち上がった。

「ならば二人でその場所に行くとするか」

「それでは侵入している敵に、どうぞ自由にしてください、と言っているようなものですわ」

「簡単に墜ちる城など敵にくれてやるよ」

「うふふふっ、貴方らしいお言葉ですわ」

こうして二人を乗せた帝國の誇る空飛ぶ要塞　巨大飛空挺  
キュクロプス　がアスラ城を飛び立った。

大事故から生還した二人は、呆然としながら壁にもたれて座っていた。

天地がひっくり返り、大地震が起きたような気がした。そのあとの記憶はあまり覚えていない。セレンはまだ少し痛むので

こを押さえた。

「死ぬかと思いました。もしかしたら死んでいるのかもしれない  
せん」

「だったら僕も死んでることになっちゃうけど」

横に座るワーズワースは側頭部を押さえていた。

燦々と照り輝く日差しを避け、日陰で休んでどれくらいが経  
つただろうか？

気を失っているトツシユはまだ目を覚まさない。

リリスは死んだように目を閉じて、壁にもたれて座っている。  
唾を飲み込んだワーズワースが恐る恐るリリスの顔を覗き込  
む。

「お婆ちゃん死んでませんよねー？」

「おぬしらが死んでもわしは死なんよ」

「わっ、生きてたのか!？」

驚いたワーズワースは再びぐったりして壁にもたれた。

少し時間が流れ、セレンが口を開く。

「あのお、やっぱりアレンさんを探しに行ったほうが？」

すぐにリリスが反論する。

「こやつをどうする？」

トツシユのことだ。

じつはさっきも似たような話をしたばかりだ。

場所を移動するなら、この大柄で重そうなトツシユを誰が運  
ぶか？

小柄な少女のセレンには無理だろう。

ワーズワースも細身で筋力も体力もあるとは思えない。

二人の前で怪力を見せつけたリリスだが、このお婆さんに運んでくれと、セレンもワーズワースもなんとなく言い出しづらかった。

何かが起こらない限り、この場でこうして過ごさそうだ。

「わたしのどが渴いてしまったんですが……」

申し訳なさそうにセレンが言った。

「あ、僕はトイレに行きたくなっちゃいました」

立ち上がったワーズワースは小走りで姿を消した。

リリスはセレンに顔を向けた。

「車から取ってくればあるよ」

「……さつき出すべきでしたね。あの、いつしよに……」

「こやつはどうする？」

「……そうですね、我慢します」

乾燥した暑さは口から水分を奪う。

セレンの唇はもうガサガサだ。

そんな唇にそつと指で触れたセレンは、急に沸騰しそうなほど顔を赤くした。

指で触れると、あのときの事故が思い出される。

車が大回転しながら建物に突っ込んだとき、セレンは思わずワーズワースに抱きついてしまい、その拍子に……。

顔を赤くしたセレンを妖しく微笑みながらリリスが見つめた。

「暑さにやられたのかい？」

「いえっ、べつに！」

なぜリリスは笑っているのだろうか？

たぶん見られていないはずなのに……。

セレンはさらに顔を赤くした。

あの出来事は自分の胸にしまつて置こうとセレンは誓つた。

けれど、ワーズワースもそうしてくれるだろうか。

心配のせいかわからないが、セレンは胸が苦しくなった。

悶々としているセレンに構わず、リリスはあの時の遠い空を眺めていた。

「またお客さんじゃな。今度のはおっきいよ」

ハツとしてセレンも我に返り、上空に目をやった。

瞳を丸くしたセレン。

「あれは……」

雲一つない広大な空を我が物顔で飛行する キュクロプスがいた。

この状況で、リリスはじつに愉しそうに笑っていた。

「あれが現れたということは、皇帝自らお出ましと言つことじやろうな」

「そんな、なんで……」

そして、このタイミングでトツシユは目覚めようとしていた。

「……あゝっ……糞熱い……」

目覚めたトツシユの瞳に真っ先に映つた物体。

「キュクロプス かッ!」

眼気を引き起こさなくトツシユは飛び起きた。

さらにトツシユは辺りを見回して、ほかの自体にも気づいた。

「アレンはどうした!? あの若造もいないぞ?」

まずセレンが答える。

「アレンさんはわかりません」

次にリリスが答える。

「若造なら便所に行ったよ。帰ってこない様子を見ると、迷ったか大便でもしとるんじゃないやろう」

キユクロプスの登場にトツシユは頭を抱えた。

「とにかく便所に行った大便野郎を待つて、そのあとアレンを探しに行く。もしかしたらあの場所にまだいるかもしれない」

と、そのとき、この場に人が近寄ってきた気配がした。

セレンが振り返った。

「お帰りなさ……ッ!」

現れたのは紅く艶やかな花魁衣装の女だった。

第四章 渦中

《1》

アレンの目の前でライザの形が変わっていく。

漆黒の不気味な仮面。

「だれだよあんた？」

「隠形鬼……ト名乗ッテ置コウ」

姿を現したのは隠形鬼だった。

ライザとは似ても似つかない姿。変装というレベルではなかった。声、姿、思考までもライザをコピーしていた。

「オンギヨウ、キ」ってことは鬼兵団かよ？」

「ソウイウ事ニナル」

「俺をどうするつもり？」

「未ダ解ラナイ。くらいあんとの依頼デハ、生ケ捕リニシロト命ジラレテイル」

命令があるにも関わらず、まだ解らないとはどういうことだ？

「少シ御喋リガ過ギタカラ、偽者ダト氣ツイテイタノカ？」

「いんや、はじめから気づいてたけど？」

「流石ダナあれん」

“流石だな”という言葉は、比較対象があつての言葉だ。ア

レンの情報は収集済みということだろうか。

「ところでさ、あんたこのことどうやって知ったわけ？」

「フフフツ」

不気味な笑いだった。仮面で何を考えているのか、表情からはわからない。

「なんだよ、なにがおかしいんだよ」

「其レヲ答エル義務ハ無イ。今ハ すいしゅ ヲ探ストシヨ

ウ」

「俺といつしよに探す気かよ？」

「此処デハ御前ガ頼リダ」

「頼られてもなあ。記憶が曖昧だし、たぶんそういうの知らずに暮らしてたし」

少しずつ蘇ってくる断片的な記憶。

ここでの生活は穏やかなものだった。

気候は常に安定しており、食べる物にも困らなかった。

アレンがまず向かったのは小屋だった。この家でアレンは暮らしていたのだが、今に思えば不思議な家だ。

《お帰りなさいアレン》

中に入ると声がした。

外観も内装も木や石など自然の素材で造られているが、置かれている物の中には“失われし科学技術”の品々も多い。台所などはなく、冷蔵庫などもない。食べ物は時間になると箱の中に置いてあった。

「なんで俺こんなとこにいたんだろうな？」



その問いに答える者はいなかった。

謎の包まれた生活。

なんらかの研究目的だったのだろうか？

それとも保護されていたのだろうか？

アレンは必死になつて思い出そうとした。

「疑問も抱かず、ただ生きていただけだった。同じような日々  
の繰り返し……それが終わったのは……思ひだせねえ」

アレンは頭を抱えて蹲つてしまった。

「第五次世界大戦が起キタノガ、丁度一〇〇年前ノ話ダ。其  
ノ戦イニヨツテ此ノ都市モ滅ビノ道ヲ歩ンダ。アノ戦イデ滅ビ  
タノハ此ノ都市ダケデハナイ。世界モ文明モ一度ハ滅ビタ。砂  
漠化ガ急激ニ始マツタノハ、アノ戦争ノセイダト云ウノガ通説  
ダナ、フフフツツ」

「詳しいな、あんた」

「砂漠化ト言エバ、其ノ要因ヲ魔導炉ノセイダト騒ギ立テテイ  
ル奴ヲモ居ルナ。特ニジードト名乗ル過激組織ハ、帝國ノ魔導  
炉ヲ破壊シタソウダ。ソノ報イヲ受ケテ、我ラガ帝國ニ代ワツ  
テ制裁ヲ下シタ訳ダガ」

「俺を挑発してんの？」

「否、世間話ダ」

「惨い殺され方だったけど、俺が敵討ちをする話じゃない。挑  
発しても意味ないぜ」

お互いの間にまだ殺気はない。隙さえあれば仕掛けるとい  
う雰囲気もなかった。

家の中を探してみたが、スイシュらしい物はなく、そのヒントも見つからなかった。

「あんた　スイシュ　がありそんな場所知らないの？」

「知ラナイナ」

「ここのこと知ってたのに？」

「存在ヲ知ツ　テイタト言ウ程度ノ記憶シカナイ。　すいしゅ

ニ関シテ言エバ、其レガ装置ノ核デアルトシカ知シラナイ」

水を生み出す装置。その核となる　スイシュ。　宝玉と云うのだから、その形をしているはずだ。

この地下世界には川が流れていた。

もしかしたらと思ひ、アレンは川の上流に向かった。

川の上流には湖があった。ここが水源らしい。

「この底にあるとかないよな？」

「水底カラ高度ノ魔力ヲ感ジル」

「マジかよ、俺泳げたっけか……昔は泳げた気がするなあ」

と、言いながらアレンは熱い眼差しを隠形鬼に贈った。

「私ハ全ク泳ゲナイ」

「ちっ、俺が行くしかないのかよ」

頭を掻いたアレンは観念して服を脱ぎはじめた。

隠形鬼がすぐそこにいることなど気にせず、全裸になるアレンだったが、じっと見られているような視線には気になった。

「俺の躰ジロジロ見て、ロリコンかよ？」

「私ハろりこんデハ無イ」

隠形鬼の口から“ロリコン”という言葉が出ると不思議な感

じた。

「じゃ、こつちが気になるわけ？」

アレンは金属でできた右胸を叩いた。

「両方気二ナル」

「やっぱロリコンなのかよ！」

「否、人間ノ躰ト、機械ノ躰ノ両方ガ融合シテイル姿ガ、興味深イト言ウ事ダ。一度詳シク調べテ診タイ」

「やだよ、ロリコンなんか指一本でも触れられたくない」

「私ハろりこんデハ無イ」

ロリコン論争はおいといて、アレンは準備体操をはじめた。

枯れた大地で暮らしていると、泳ぐ機会なんてあまり訪れない。水泳は金持ちの道楽だ。

準備体操を終えたアレンは、頭から湖に飛び込んだ。

透明度の高い水中。水深もあまりなく、地の底まで見ることができた。

アレンの泳ぎはというと、はじめは少しぎこちなかったが、だんだんと調子を掴んできたようだ。

水底に輝きが見えた。

一度アレンは水面に向かって泳ぎだした。

水飛沫を上げて水面から顔を出したアレン。

「ぶはーっ！」

潜っていた時間は三分ほど。まだ余裕があった。

大きく息を吸いこんで再び湖に潜る。

湖の中心に向かって泳ぐ。

台座の上でそれは淡く輝いていた。

透き通ったブルーの輝き。

宝玉と云うが、その輝きは宝石の物ではない。

もう手を伸ばせば取れてしまいそうだ。

しかし、アレンは躊躇った。

これを取ってしまつていいものなのだろうか？

水を生み出す装置の核となる物。

湖に蓄えられた水。

アレンはその宝玉を手を取った。

そしてすぐに水面へ上がり、岸に向かって泳ぎだした。

陸に上がったアレンは宝玉を確かめた。水が出ているような

感じはしない。台座から放したからだという可能性もあるが

。

「本当にこれが スイシュ なのか？」

「確証八無イガ、其ノ可能性八高イト思ワレル」

「だったらこれで俺の役割も終わったし、これ奪う気？」

「スイシュ ヲ手ニ入レル依頼八受ケテイナイ」

「でも俺のことは生け捕りなんだろ？」

「今八其ノツモリモ無イ」

「は？」

隠形鬼が何を企んでいるのかわからなかった。

スイシュ も奪わず、アレンも捕まえないとなると、何も

せずにアレンを行かせるということなのか？

「依頼八受ケテイガ、何時何処デト八決メラレテイナイ」

「なんだよその屁理屈」

アレンは呆れた。

「其レヲ少シ貸シテクレナイカ？」

「やっぱ奪う気じゃんか」

「少シ調ベルダケダ」

相手は敵だ。しかも何か考えているのかわからない。

迷ったが、アレンは宝玉を手渡した。

受け取った隠形鬼は一秒とせずに返した。

「えっ、もういいの？」

「本物ダ」

「はっ？」

「其レガ すいしゅ デ間違イ無イ」

「今のでわかったわけ？ そんなの信じられるかよお」

「信ジル信ジナイハ御前ノ自由ダ」

違う物だという証拠もない。とりあえずはこれを持ち帰るしかないだろう。

アレンは スイシュ を地面に置いて着替えはじめた。

置かれている スイシュ を奪うような気配は見せなかった。

本当に隠形鬼はなにもしないつもりなのだろうか？

濡れたまま着替えたので、服は少し湿ってしまった。それも外に出ればすぐに乾くだろう。この地下世界を出れば、世界は砂漠で覆われているのだから。

「私八行コウ。又何時力会ウコトニナルダロウ」

隠形鬼がアレンの目の前で霞み消えた。まさにそれは消失だ

った。

そして、地面には グングニール が残されていた。

「……変な奴」

ボソツとアレンは呟いた。

セレンの前に現れたのは火鬼だった。

「探した探した、もうわちきはくたびれて、戦う気力も失せた  
でありんす」

トツシユは レッドドラゴン に手を掛けた。

「だったら帰ってくれないか、べつぴんさんよオ」

「わちきもそうしたいのは山々でありんすが、首の一つも持ち  
帰らないと、依頼主に面目が立たないでありんす」

「だったら自分の首でも持ち帰えんな！」

トツシユと共に レッドドラゴン が吼えた！

この至近距離で火鬼は鉄扇により弾を弾き返した。

「おやおや、血の気の多いお兄さんだこと」

余裕の笑みを浮かべた火鬼。

トツシユは驚きのあまり、すっかり次の行動を忘れた。

弾を受けたこともさることながら、鉄扇が弾を受けても破損  
しないことも驚きだった。

鉄扇と言っても、それは武器の総称であり、実際に鉄ででき  
ているとは限らない。

トツシユは振り返ってリリースを見た。

「リリース殿、少しばかり手を貸してはいただけませんか？」

「断るよ。わしは性根の腐った女だろうと、どんな女だろうと、女として生きてる以上は其奴に手を出さん主義でな」

これを聞いて火鬼は狂気に侵された笑みを浮かべた。

「わちきとは真逆の考えを御持ちのようで」

刹那、鉄扇から炎が放たれた。

狙われたのは セレン！

「きゃーっ！」

セレンの叫びは炎に包まれることはなかった。

炎はセレンの前に立った妖女リリスの前で消滅したのだ。

「妾は女に手は出さぬと言ったが、守らぬと言っておらぬ」

妖女と化したリリスを見てしまった火鬼は息を呑んだ。

先ほどまではたしかに老婆だったはずだ。混乱する火鬼は眼を剥いたまま口をわなわなと震わせた。

「許せない、許せない、許せない、こんな美しい女が存在しているなんて許せない、キイイッ！」

奇声をあげた火鬼は巨大な炎を撃ち放った。

「炎は美しい。じゃが、汝の心は醜いのお」

またも炎はリリスの目の前で消滅した。

火鬼は構わず炎を撃ちまくった。

嗚呼、虚しいだけだ。

決してリリスは傷つかない。

火鬼の中で何かが完全に切れた。

「ぶっ殺してやる糞ニアツ！」

野太い男の声が木霊した。

炎を宿した鉄扇がリリスの首を狙う。

ついにリリスが動いた。

敵と同じく炎を宿す。

刹那、リリスは炎を宿した手で火鬼の顔半分を鷲掴みにした。

「ギャアアアアッ！」

耳を塞ぎたくなる絶叫。

肉の焼ける臭い。

火鬼は顔面を手で覆いながら後ろによるめいた。

「顔が……わちきの顔が……アアアッ！」

地面に膝を突いた火鬼は戦意を喪失させた。周りすら見えていない。精神的な衝撃に耐えかね、喚くことしかできなかった。

リリスはすでに妖婆に戻っている。

「女のままであれば手は出さぬつもりじゃったが……」

呟いたリリスを中心に強風が吹き荒れ、瞬く間にまたも妖女の姿に変貌した。

トツシュもそれを肌が痺れるほどの感じていた。

「だいぶ下がってる」

トツシュはセレンを遠くに行かせた。

急いで逃げたセレンは物陰から二人を見守った。

そして、現れる黒い影。

そいつはトツシュの影から這い出してきたのだ。

驚きながらもトツシュは影に向かって銃弾を喰らわせた。

まさかの出来事にトツシュは眼を剥き、激しい激痛でその場に転倒した。



撃たれたのはトツシユだった。

刹那にして影と自分の場所が入れ替わり、自らで自らの腹を撃ち抜いてしまったのだ。

隱形鬼。

目にも留まらぬ早さで、リリスは隱形鬼の胸に掌底突きを喰らわせ吹っ飛ばした。

次の瞬間には、リリスはトツシユの傷口を見えない糸で縫合し、さらに氣による治療を施していた。

トツシユの傷は深い。肉をそのまま鷲掴みにされ、抉られたような穴が開いていたが、どうか縫合と氣によって出血は抑えている。それでもまだ瀕死の重傷だ。

まだトツシユから手を離せないが、敵はすぐ目の前にいる。

隱形鬼が静かに近付いてくる。

「久シブリダナ……りりす」

「久しぶり……じゃと？」

リリスは眉をひそめ記憶を辿った。

漆黒の不気味な仮面の主。

その下に存在している顔は？

「林檎ヲ与エタノハ誰ダ？」

「だ、だれ……じゃ……いつたい？」

妖女リリスともあるう者が言葉を詰まらせた。見開かれた瞳に浮かぶ驚愕。

「御前八モウ解ッテイル筈ダ。シカシ、其レハ答エノ半分デシカナイ」

「誰であろうと構わぬ、世界の脅威は滅するのみ！」

リリスはトツシユから手を放し攻撃を仕掛けた。

しかし、まさかリリスが後ろを取られるとは!?

後ろを取られただけではない。隠形鬼は刹那うちにリリスを後ろから抱きしめていたのだ。

「答エヲ知リタイカ？」

「おのれえッ！」

リリスは妖気を宿した手で隠形鬼の仮面を鷲掴みにしようとした。

その仮面は一瞬のうちに顔になっていた。

それを見てしまったリリスは攻撃を止めざるを得なかった。

「莫迦な……まやかしめ！」

「そう、たしかにこの顔はまやかしよ！」

隠形鬼に声は玲瓏たる女の声になっていた。

すべてを見守っていたセレンの位置からでは、隠形鬼の顔は見ることはできなかった。

セレンが見たものは、隠形鬼の胸の中でリリスが一瞬にして消えたという事実。

「あつ……き、消えた!？」

もうリリスはいない。

残されたセレンはどうすることもできない。トツシユは瀕死のまま。

すでに漆黒の仮面に戻っていた隠形鬼が、セレンのほうを向いた。

「生ケ捕リガ命令ダ。無駄ナ抵抗ハスルナ」

逃げるという抵抗すら今のセレンにはできなかった。足が震えて立っているのもやったのだ。

隠形鬼はトツシユの横に膝をついて、その傷口に手を添えて何をしはじめた。

穿たれていた傷が見る見るうちに塞がっていく。肉が増殖しながら蠢き、血の痕だけを残して傷を完全に塞いだのだ。もう血を拭き取ればどこに傷があつたのかわからない。

「シバシ待テ、客人ガ来ルヨウダ」

上空を飛んでやって来る一台のヘリコプター。

それはこの場にゆっくりと降りてきた。

地面に着陸したヘリから降りてきたのはライザだった。

そして、続いて威風堂々と姿を見せた皇帝ルオ。

隠形鬼は膝をついて頭こぶを垂れた。

高い位置からライザは隠形鬼を見下した。

「アタクシの偽者がいると聞いて来てみたら、鬼兵団の二人がいた。どういうことか説明してくださる？」

「サテ、何ノ事力？」

「惚けないで、なにを企んでいるの？」

「此ノ通り、我々ハ依頼ヲ果タシテイタマデテ御座イマス」

気を失っているトツシユと物陰でこちらを見ているセレン。

火鬼は蹲ったまま震えている。

ライザは一通り見回した。

「老婆と坊やがいなみたいだけれど？」

「サテ、りりす八何処ニイルヤラ。あれんナラバ、未ダ此ノ遺跡ノ何処カニ居ル筈デ御座イマス」

話を聞いていたルオは笑っていた。

「君の偽者疑惑は晴れないようだ。まあよい、あの小僧との決着はまだついていなかったね。まだ残っているのなら、朕が直々に剣を交えよう。鬼兵団はこのまま仕事を続けるといいよ」

「ルオ様！」

ライザは口を挟んだ。

さらにライザが続ける。

「この者たちを信用するなんて、どうか考えを改めてちょうだい！」

「君だつて本物か偽物かわからないんだ。ここは朕が指揮を執らせてもらうよ」

帝國を走る不和。

自分たちがかく乱されていることに怒りを覚え、ライザは唇を強く噛みしめた。

《2》

アレンは キュクロプス に侵入していた。

前回の侵入では、サーチライトに見つかってしまった、レーザの一斉放射に見舞われたが、今回は無事に甲板まで辿り着いた。

連絡手段を持っていなかったアレンは、トッシュたちと合流

することもできず、次を見越してここに侵入した。

スイッシュ を手に入れ、次の目的は帝國のどこかにあるヴォータン だ。この飛空艇に身を潜めていれば、帝國に辿り着くことができるだろう。もっと強硬な手段を取るなら、この飛空艇を奪う選択肢もある。

「腹減ったなあ」

その選択肢をアレンは選んだ。

これだけ巨大な飛空艇なら、大きな料理室がある筈だ。それに合わせて食料庫にも大量の食料が積まれているだろう。

アレンは辺りの匂いを嗅いだ。

「ここじゃわかんねえな。中に入ればわかるか」

艦内への入り口はすべて兵士によって守られている。甲板にも見張りが巡回に来る。アレンは急いで移動した。

そして、動いた途端に機会の眼によってサーチされたのだ。

鳴り響く警報。

「ヤバッ」

もう食料どころではない。

甲板に兵士たちが集まってくる。

どこかで 歯車 の音がしたような気がした。

天高くジャンプしたアレンは大砲の先に飛び乗った。

超巨大飛空艇の大砲はまるで橋のようだ。

アレンは大砲の上を駆けた。

さらにそこから大ジャンプを見せた。

船体から上に突き出た位置にある司令室まで飛び、そこにあ

った巨大な窓に強烈な拳を喰らわせた。

「イツ！」

齒を食いしばったアレン。

窓は対砲弾パネルだったため、アレンの一撃でもビクともしなかった。

アレンは拳を放った瞬間、中にいる人物たちと目が合っていた。

司令室にいたのはライザとルオだった。

ルオはアレンと目が合った瞬間、この上ない笑みを返してきたのだ。

窓への一撃が失敗したアレンは、何度も躰を打ち付けながら船体を転がり落ちた。

アレンの躰は船体から突き出た床に打ち付けられ止まった。それは巨大なエンジン部分だった。

キュクロプスには巨大な羽はない。エアバイクやリスの車のように、重力に逆らって浮かぶことができるからだ。そのため、エンジンは飛行機のような、回転しながら空気を吸い込み吐き出す物ではない。代わりに鯨類の胸びれのような物がついており、それがエンジンの役割を果たしている。

アレンは再び甲板に向かった。

群がる兵士たちに向けて グングニール を放つ。

稲妻は容赦なく兵士たちを一網打尽する。

甲板を疾走するアレン。こうなれば強行突破だ！

艦内への入り口は開いている。そこから兵士たちが次々と溢

れてくる。

再び放たれる　グングニール　の稲妻。

“雷獣”の通り名は伊達ではない。遣りたい放題だ。

しかし、敵は次から次へと湧いてくる。

数の前にアレンは追い詰められた。

アレンを取り囲んだ兵士たち。銃口は三六〇度からアレンを狙っている。

誰も動かずに時間が過ぎる。

アレンは視線だけを動かし活路を見いだそうとした。

まっすぐ強行突破をすれば良い的になってしまふ。上へジャンプすれば、方向転換ができず的になる。蛇行しながら駆ければ、それだけ移動速度が落ちて弾丸は躲しづらくなる。

浴びせられるであろう銃弾が多すぎて、回避確立が格段に落ちる。

アレンはゆっくり相手を刺激しないように動き、膝を曲げてグングニール　を床に置いた。

「俺の負け。抵抗しないから撃つなよ」

兵士たちが輪を縮めてくる。

その輪が急に左右に開け、艦内への出入り口まで道をつくつた。それはアレンの出口ではない。皇帝ルオの道だった。

「久しいなアレン。前は邪魔の入った決着を、ここでつけようじゃないか」

「俺もあんたとはきつちりケリをつけたかったんだ」

威勢ではアレンは負けていない。

しかし、前回の一騎打ちでは、敗北寸前までアレンは追い詰められている。

黒の剣 に グングニール は通用せず、右腕までも墮とされた。

アレンに勝ち目はあるのか？

黒の剣 が宙に浮かびながら、ルオの周りを薙いだ。人払いだ。

「手出しは無用。これはシュラ帝國の誇りを賭けた一対一の決闘である！」

「なら俺はこれでも賭けようかな」

アレンは懐から スイシュ を取り出して掲げた。

その宝玉がなんであるか誰もわからないようだった。

ライザがハツとした。

「まさか スイシュ ！？」

アレンが笑う。

「そーゆーこと」

そうと聞いてルオはすべてを理解したようだ。

「ほう、あれが スイシュ か。我が帝國を滅ぼすという魔導具」

想像していなかった言葉だった。それにアレンは首を傾げた。

「あなたの帝國を滅ぼす？」

「知らぬのか」

「これって水を生み出すためのオーバーツだろ？」

それを聞いたライザは腹を抱えて笑った。



「あはははっ、可愛い坊や。まあいいわ、とにかくそれはこちらに渡してもらいましょう」

「やだ」

アレンは短く断った。

スイシュとは水を生み出す装置の核ではなかったのか？  
そうであるという証拠はなかった。情報を鵜呑みにして、手に入れたに過ぎない。

急にライザの顔つきが代わった。そして、近くにいた兵士に耳打ちをして、その兵士は急いでどこかに向かった。

急を要する自体が起きた　とするならば、スイシュと関係のあることだろうか？

さらに声を潜めてライザはルオに耳打ちした。

「スイシュ　がここにあるということは、ヴォータンも狙われているはずよ。一刻も早く　スイシュ　を帝國の手に」  
「賭には勝つ。下がって見ているといいよ」

ルオと共に　黒の剣　が前へ出る。  
戦いはじまる。

アレンは　グングニール　を懐にしまい両手を開けた。

「そつちから掛かって来いよ」  
「言われずとも切り刻んでくれる！」

黒の剣　の初手は雑ぎだった。

巨大な大剣はリーチも長く破壊力もあるが、長さの分、軸である柄から切っ先までが動くために一瞬のロスが生じる。

アレンは　黒の剣　を切っ先で躲し、剣が振られたのとは逆

方向に逃げていた。

齒車 が鳴り響いた。

「糞つたれ!!」

一気に踏み込んだアレンの拳はルオの腹を抉り上げた。

兵士たちが凍り付く。

ライザはにわかに笑みを浮かべた。

またこの場所に閉じ込められた。

今回は前回よりも待遇が悪かった。

牢屋の中にセレン溜め息が響いた。

「神様、どうかわたしたちをお助けください」

キユクロプス 内にある監獄。

床に寝かされているトツシユはまだ意識を取り戻さない。

やることがないと、頭ばかりが使われ、余計なことを考えてしまう。セレンは不安で仕方なかった。

トツシユはいつになったら目覚めるのか。リリスはどこへ消えたのか。アレンはどこにいるのか。そして、ワーズワースもトイレに行つて帰つてこなかった。

まずはトツシユが目覚めなくて話にならない。それからここを逃げ出す方法を考えてくれば。

セレンは独りではなにもできなかった。

時間だけが過ぎていく。

しばらくして。どこからか声が聞こえてきた。

「捕虜に食事を持ってきました」

「こんな時間にか？」

「ええっと、それは彼らはここ数日飲まず食わずだったそう  
で」

「そんな風には見えなかったがなあ」

「それはきつとやせ我慢してるんですよ！」

「……おまえ、なんだか怪しくないか？」

「そんなことないですよ」

「今すぐIDを見せる」

「え、いや……ちよつと……ああっ、わっ、やめてくださ  
い！」

ドン！

という何か殴りつけるような鈍い音が聞こえた。

そして、カートを押すような音が聞こえて、牢屋の前までそ  
の人物はやって来た。

「よかつた、見張りが一人いなくて」

ほつと一息ついて見せたのはワーズワースだった。

「助けに来てくれたんですか！」

「お姫様を助けるのは王子に役目ですから」

と言われて、セレンは少し顔を赤くした。

ワーズワースは牢屋の鍵を開けた。

「あつ、これで良かったみたいですね。今気絶させた見張りが  
持ってたんですよ」

囚人に食事を運ぶ振りをして、見張りを倒し、牢屋の鍵まで  
手に入れたのだ。

セレンの瞳にワーズワースは天使のように映った。

「本当にありがとうございます」

「いえいえ、でもここからが問題ですよ。どうやら僕の顔は敵にはばれていなかったらしく、堂々と食事を運びながら、すれ違う人に挨拶してたら、楽々ここまで来れましたけど、セレンちゃんはこの意識のない人といっしょに逃げるのは……」

困って黙り込む二人。

ここは蟻の巣のようなものだ。そこから中に帝國の兵士がいて、とてもトツシユは運んで逃げることはできない。

ワーズワースが耳を澄ませ、囁いた。

「だれか来ます」

そんなことを言われても、ここに逃げ道はない。こんな状況を見られたら言い逃れもできない。

曲がり角の向こうから声が聞こえた。

「見張りの時間だ……どうということ？」

大変だ、気づかれた。

身構えるセレンとワーズワース。

フルフェイスマスクをした一人の兵士が姿を見せた。

もう駄目だと思ったとき、兵士がそのマスクを脱ぎ捨てて素顔を晒したのだ。

「警戒しないで、わたくしよセレン」

「あつ!？」

セレンは驚いた。まさかこんなところで会うとは思わなかった。失踪していたフローラだった。

「生きてたんですね！」

セレンは歓喜の声をあげた。トツシユは帝國の機密を手に入れた経由をだれにも話していなかったのだ。

フローラを見たワーズワースは目を丸くした。

「……な、なんて可憐で花のように美しい人なんだ。僕の名前はワーズワース、貴女の名前は？」

「えっ……わたくしはフローラと申します」

二人は間近で見つめ合いながら、ワーズワースのほうから固い握手をした。

フローラは苦笑いを浮かべてワーズワースの胸を押した。

「あまり近付きすぎないでくださる。今はこんなことをしている時間はありませんわ。まずは、トツシユを診なくては……」

意識のないトツシユの傍らに膝をついたフローラは、いつかアレンにしたように接吻をした。

トツシユの躰が跳ね上がった。

「うっ……うっ……フローラ！」

間近にあったフローラの顔を見てトツシユは驚いた。

他人の接吻を見てセレンは顔を赤くして、ちらりとワースワースを見た。そのワーズワースは、真剣な眼差しでフローラを見つめていた。少し胸がもやっとしたセレンだった。

トツシユはフローラに耳打ちをする。

「メモリの中身を見た。ここにいる二人とアレンとリリスという魔導師に、機密情報なのに話しちまったんだが、本当にすまない」

「トツシユが選んだ仲間なら、べつに構わないわ」

ここにいるワーズワースは完全に不可抗力だったため、トツシユは苦い顔をして心が痛んだ。そして、フローラの信用を失わないために、あまり多くは語らないことにした。

フローラは通常の大きさの声で話しはじめる。

「じつはあのあと、いろいろ調べて見たのよ。渡した情報の中身についても断片的に解り、必要なオーパーツの一つ ヴァータン の在り処を特定したわ」

トツシユは機密情報を思い出す。

「たしか帝國のどこかという曖昧な情報だったが……？」  
フローラは頷いた。

「ええ、たしかに帝國には違いないのだけれど、じつはこのキュクロプスの動力源が ヴォータン なのよ」

まさかこんな近くにあるとは、トツシユは驚きを隠せなかった。

「ここは キュクロプス の中か。まさかそつちから来てくれるとは、幸運……というべきだろうな。だが逃げるだけでも骨だというのに、動力源を盗み出すとなるとというのは」

さらにフローラは過酷な要求を突き付けた。

「できれば、この船ごと制圧して盗めると良いわ。ヴォータン と スイシユ を手に入れたあとの目的地は、アスラ城なのだから」

トツシユはさらに機密情報を思い出す。

「たしかそう書いてあったな。装置は帝國の地下にあると……」

でもなんで帝國の地下なんだ？」

「古代遺跡があった場所の上に、帝國は意図的に立てられたのよ。『失われし科学技術』の恩恵を預かるために」

そうフローラは答えた。

次の目的は決まった。

超巨大飛空艇 キュクロプス の動力源である ヴォータ  
ンを奪う！

だが、セレンには気がかりなことがあった。

「アレンさんとリリスさんはどうしますか？」

この場に二人がいけないことにはトツシユも気づいている。

「二人はどうした？」

「アレンさんはまったくわかりません。リリスさんはさんは怖ろしい仮面の人に……消されてしまいました」

その瞬間を思い出してセレンはゾツとした。

消された という意味をトツシユは理解できなかった。

「まさかりリス殿が殺されたのか？」

すぐにセレンが首を何度も横に振った。

「違います。目の前でパツと消えてしまっただんです」

二人の話にワーズワースも割り込んでくる。

「じつは僕も物陰から見ただんですけど、あつという間に姿が消えてしまって、生きているのか死んでいるのか、何が起きたのかもわかんないんえすよね。それからセレンちゃんとトツシユさんが連れ去られて、ついに僕の大冒険が幕を開けたのです！」

ここからが話の面白いところだと言わんばかりのワーズワース。

を無視して、トツシユは歩き出した。

「早く行くぞ、ここに敵が来たら袋の鼠だ」

フローラも先を急ぐ。

慌ててセレンもついていった。

独り残されたワーズワースは肩を落とした。

「おもしろい冒険活劇なのに……とくに料理長VS僕の死闘とか」

仕方がなくワーズワースも三人のあとを追った。

《3》

アレンは本気だった。

それは死闘だったからだ。

殺らなければ殺られる。

たしかに拳には手応えはあった。

そして、ルオは約一〇メートル後方まで吹っ飛ばされたのだ。

内臓は爆発し、骨は粉碎している筈だった。

即死でも可笑しくない。

ましては立ち上がることなど……。

ルオは一〇メートル先で嗤いながら立っていた。

それを確認したライザは呟いたのだ。

「素晴らしい研究成果だわ」



不気味な言葉だった。

黒の剣 がアレンを襲う！

それだけではない、ルオも自らの肉体を駆使して攻撃を仕掛けてきたのだ。

この怖ろしい 黒の剣 の切れ味を、アレンは嫌というほど知っている。

刃とルオの拳のどちらを躲すか？

片方しか躲せない状況に追い込まれたアレンは刃を躲した。

刹那、ルオの拳がアレンの胸を殴った。

宙を飛ばされながらアレンは驚愕していた。

金属の右胸が拳の形にへこんだのだ。

銃弾を弾き返す金属が、少年の拳でへこまされたのだ。

もはやそれは人間の力ではない。

アレンは甲板に叩きつけられ、二度跳ねた。

もう一発も喰らえない。

すぐに 黒の剣 が天空からアレンを串刺しにせんと降ってくる。

瞬時にアレンは膝のバネを使って、立ち上がると同時にジャンプした。

その一刹那前までアレンが寝ていた場所を 黒の剣 が突き出す、深く深く、甲板を貫いてもなお深く貫いた。

黒の剣 の弱点は、あまりにも切れ味が良すぎることであった。

この場から 黒の剣 が消えた。

アレンが グングニール を抜いた。

その稲妻、 黒の剣 に呑み込まれようと、 ルオにはどう  
だ！

轟く雷鳴！

乱れ飛ぶ稲妻はルオの躰を貫いた。

眼を剥いたルオは一瞬止まった。

ゆっくりと床に引きつけられるようにルオの躰が後ろへ倒れ  
る。

ドスン！

それは人が倒れると言うより、荷が落ちたような衝撃と音だ  
った。

兵士たちがアレンに銃口を向け、ルオに駆け寄ろうとした。

それを片手を伸ばしたライザが制す。

「ミンチにされて家畜の餌にされたくないのなら、黙って見て  
なさい」

そうだ、ライザは知っているのだ。これで終わりでないこと  
を。

ルオが上半身を起こした。

「躰の凝りが取れたようだ、感謝するよ。お返しをしよう」

平然としている。まさに化け物。

アレンは自分の真下から鬼気を感じた。

すぐさま飛び退いた。

黒の剣 が甲板を貫き天に昇った。

アレンの頬に落ちてきた紅い血。

何処かで 黒の剣 は血を嘔ってきたようだ。

そして今、 黒の剣 はアレンの血を欲している。  
血に飢えているためか、先ほどより格段に疾い！

走るアレン。 黒の剣 は軌道を変えながら降って来る。

歯車 が叫んだ。

躲しきれるか！

否、アレンが甲板を蹴り上げるよりも疾く、 黒の剣 はアレンの背中を串刺しに 。

「待て！」

ルオが叫んだ。

止まった。

黒の剣 の切っ先はアレンの柔肌を数ミリ刺して止まっていた。

「試してみたいことがある」

そう言ったルオの元に 黒の剣 が戻っていく。

アレンは滝のような汗を流して膝から崩れた。

死。

死というものをあれほど間近に感じたのははじめてだった。

このときアレンは、真物の敗北を味わったのだ。

ルオがアレンを助けたのは情けではない。新たな愉しみを思い付いたのだ。

黒の剣 がルオの手に握られた。

「我が一族に伝わる魔剣 歴代の中で真にこの剣を使いこなせた者は、初代皇帝のみであったと云う。剣は主が握ってこそ

真価が発揮される。握れぬ剣なら、柄などいらぬ」

試しにルオは軽く薙いだ。

それは風の刃であった。

黒の剣　が起こした風は遙か砂漠の砂を巻き上げ、風が通った真空の道に何人も兵士が吸いこまれた。

ライザは満足そうに笑っていた。

「本気を出せばこの艦も真つ二つにできそうね」

それほどまでの威力だった。

兵士たちは啞然として棒立ち状態だ。

アレンは呟く。

「……冗談じゃねえ」

一撃でも喰らえば死ぬだけでは済まされない。屍体すらないだろう。そう、跡形も残らない。

正攻法で勝てる相手ではない。

どこかで　歯車　の音がしたような気がした。

逃げ場なら一つしかない、とアレンはそこを目指して一気に駆けた。

艦内だ、艦内ならあんな大技使える訳がないのだ。

だが、ルオはやる気だった。

キュクロプス　ごとアレンを葬り去ろうと、黒の剣を薙ごうとしたのだ！

さすがにライザが止めようとした。

「ルオ様！」

しかし、ルオは聞く耳を持たず、切っ先を後方に向けた。

あとは勢いを付けて振るだけだった。

異変。

眼を口を開けたルオの手から 黒の剣 が落ちた。

「く……ぐくぐく……ぎぎぎ……あああああッ！」

叫んだルオが急に床に転げ回って苦しみ藻掻いたのだ。

ライザは顔色一つ変えない。慌てふためくのは兵士たちのみ  
「これが今の限界ね。これならまだ兵器のほうが実用的だわ」  
ゆっくりと歩き出したライザは、ルオの前で止まり片膝をついた。

「アレンには逃げられてしまったわ」

「糞……まだ……まだ扱えぬというのか……あれほどまでの苦しみに耐えて、まだ朕は 黒の剣 を従えることができぬのかッ!!」

「ええ、そうのようね。そうであるならば、アタクシはいくらでも貴方に力を授けましょう」

「くくくつ……面白い。修羅の道、極めようではないか」

ルオは立ち上がった。

だが、その躰はすぐにバランスを崩して片膝をついた。

バランスを崩したのはルオだけではない。甲板にいた全員が一斉に体勢を崩したのだ。

ライザは遠ざかる地表を見た。

「動いているわ、キュクロプス が動いている!!」

ルオの命令も、ライザの命令もないまま キュクロプス が飛び立った。

帝國の絶対者であるルオの知らぬところで、起こるはずのないことであった。

警報が鳴り響く廊下を全速力で駆ける。

その警報はアレンが鳴らしたものだ。その事を知らない四人は、自分たちの脱走がばれたのだと警戒した。

角を曲がればその都度、敵に出くわす。そして、セレンは涙ぐみながら十字を切るのだ。

セレンは頭ではわかっていた。

こうやってトツシユは、セレンの知らぬところで、数え切れない命を奪ってきたのだろう。

怖ろしく耐え難い。ましてやセレンは神に仕えるシスターだ。ワーズワースがセレンの手を握った。

「眼を開かなければ走ることはできないよ。君に涙は似合わない」

「えっ？」

自分でも気づかないうちにセレンは泣いていたのだ。

「セレンちゃん……これが世界の現実なんだよ。目を背けて生きたいのなら、人の全くいないところで暮らすしかない。それが嫌なら、この時代を変えるしかないんだ」

まるでワーズワースも何かと戦っているような口ぶりだった。シユラ帝國による恐怖政治。

砂漠化が進む大地。

人々の心も退廃していく。

フローラはジードの一員として帝國と戦っている。

トツシユも今はジードとして、それ以前からも帝國と多く対立してきた。

「わたしは……」

ずっと巻き込まれていただけ。限られた選択肢しか与えられず、巻き込まれてここまで来てしまった。

「でも、わたしは……武力で世界を変えたいとは思いません。

わたしはわたしのできるやり方で、皆さんが笑顔になれるような世界をつくりたい」

優しい微笑みをセレンは浮かべた。

それにワーズワースは笑顔で答えた。

「やっぱり君には笑顔だね。ちょっとドキツとしたよ、その笑顔」

ドキツとさせられたのはセレンのほうだった。今の発言で顔は真っ赤だ。

銃弾が流れるように飛んだ。

「あつ」

短く呟いて目を丸くしたワーズワース。些細な事でも起きたような呟きだった。

しかし。

「撃たれちゃいました」

ワーズワースが床に倒れた。

銃弾はワーズワースの太股に刺さっていた。

すぐさま射手をトツシユが撃ち殺した。

セレンは血相を変えてワーズワースを抱きかかえた。

「大丈夫ですか！」

「大丈夫じゃないですよ。だってすごく痛いですから。でもたぶん動脈は傷ついてないような気がしますから、死にはしませんよ。歩けませんけど」

「肩を貸しますから行きましよう！」

「足手まといなんで、置いてってください。トツシユさん、セレンちゃんを早く連れて行ってください」

その頼みを聞き入れてトツシユはセレンの腕を無理矢理引いた。

「行くぞ！」

「駄目です、彼を置いては行けません！」

「若造の望みなんだから叶えてやれ」

「嫌です!!」

抵抗するセレン。

ワーズワースは自分たちが来た道を指差した。

「ほら追っ手が来ちゃいましたよ。僕ならだいじょぶですよ、だって弱そうだし、すぐに降伏しちゃえば命までは取られませんかよ、ね？」

ワーズワースは笑った。

それでもセレンはこの場を離れない。

「早くいっしょに！」

セレンの伸ばした手がワーズワースからどんどん離れていく。やがてセレンはトツシユに引きずられてこの場から消えた。



残されたワーズワースは、指で弾をえぐり出した。そんな行為を涼しげな顔でやってのけた。

そして、静かに立ち上がる。

「セレンちゃんとの別れは寂しいけど、別れた女といっしょにはいたくないもんね。あつちも嫌そうな顔してたし」

敵はすぐそこまで来ていた。

ワーズワースは敵を見向きもせず、そつと手を払っただけだった。

廊下に巻き起こった突風。

突風というより、それは見えない刃だった。

カマイタチ。

細切れにされた兵士たち。

ワーズワースの目つきが鋭くなった。

肉塊に囲まれながら、ただ独り兵士がまだ立っていたのだ。

「あらつ、切り損ねた？」

再びカマイタチを放った。

ワーズワースが目を丸くして「しまった」という顔をした。

放たれたカマイタチは兵士を 否、入れ替わるようにして

そこに立っていた、別の存在を切ろうとしていた。

しかし、リリスを倒したその者には、ほんのお遊び。

隠形鬼は斬れていなかった。

風は見えぬため、当たったかどうかもわからない。当たる以前に消されていたのかもしれない。

ワーズワースは前髪をかき上げた。

「まいったなあ、そんなつもりじゃなかったんですけれど」

「気配ヲ感ジタノデ来テ見タ」

「もつと前から僕がいたこと知ってたクセにい。お久しぶりですね隠形鬼さん」

「風来坊ガ帰ツテ来タカ」

「いえいえ、ちよつとふらつと風のように立ち寄っただけ、すぐに消えますよ」

親しげに話すワーズワース。

まさかこの二人が顔見知りだったとは。

「で、どんな作戦なんですかこれ？」

「御前モ此ノ劇ノ演者ト成ルカ？」

「いえいえ、僕はただの吟遊詩人ですから、他人の物語を語るだけです」

「ナラバ邪魔スルナヨ」

「なにをしたら邪魔なのか、わからないんですけど？」

「風向キヲ変エナケレバ、其レデ良イ」

そう言い残して隠形鬼は消えた。

タイミング良くそれと入れ替わりで、アレンがこちらに駆け  
てきた。

ワーズワースはほくそ笑んだ。

「演者にはなるつもりはなんですけど、運命つて女神は気まぐ  
れだからなあ」

走ってきたアレンもワーズワースに気づいたようだ。

「あつ、詩人！」

「どうも吟遊詩人のワーズワースですが何か？」

「逃げろ、敵が来るぞ！」

「足怪我してるんで担いでもらえませんか？」

「はあ？」

「早くしないと敵来ますよ？」

「糞っ、あんたなんか見つけるんじゃないやなかった！」

アレンはワーズワースを背負って走り出した。

後ろからは兵士たちが追ってくる。艦内ということもあって銃の乱射はないが、ここぞというときには口径の小さな弾を撃つてくる。

「僕のこと弾除けにしないでくださいね」

「しねえよ！」

口径の小さな銃弾なら人間の躰を貫通せずに弾除けになってくれる。

じつはちよっぴりアレンは考えていたことだった。それを見透かされたような、さっきのワーズワースの一言だったのだ。

背負われながらワーズワースが話しかける。

「じつはさっきまで皆さんといっしょだったんでけど、はぐれてしまったんですよね。そうそう、フローラさんっていう人も合流しましたよ」

「フローラが!？」

「アレン君も知ってたんですか。あとそれから、皆さんはこの船の動力炉に向かってます」

「なんでだよ？」

「じつは ヴォータン がこの船の動力源らしくって、探す手間が省けてラッキーでしたね。まるで僕らに追い風が吹いてるみたいで」

だが追ってくるのは風ではなく兵士だった。  
逃げれば逃げるほど、兵士の数が増えていく。

グングニール を使えば一網打尽にできるかもしれないが、万が一周りの機器を壊して爆発を誘発なんてことになったら……。アレンは グングニール を抜くに抜けなかった。

「でさ、その動力炉ってどこにあんだよ？」

「さあ僕に聞かないでくださいよ。吟遊詩人にも知らないことはあるんですよ」

「使えねえ奴」

アレンは闇雲に逃げ回るしかなかった。

《 4 》

敵と遭遇しながら何度も危機があつたが、それらを掻い潜り、ついにトツシユたちは動力炉までやって来た。

連続的な振動音が鳴り響いている。

瞬時に溢れかえった気配。

物陰に隠れていた兵士たちが一斉に姿を見せた！

トツシユは舌打ちをした。

「チツ……楽に済むわけないよな」

ここの兵士が集められていたのはライザの差し金だ。

大勢の兵士に取り囲まれたが、なぜか兵士たちは銃を構えずナイフを構えていた。

色の違うプロテクターをつけた部隊長が前で出た。

「我らに勝てる気があるのなら存分に抵抗したまえ。ただし銃などは使わない、動力炉が爆発したらみんな死ぬぞ」

フローラが微笑んだ。

「自爆テロだったらどうする？」

命を犠牲にして動力炉を爆発させる。そういう作戦も世の中にはあるだろう。けれど、フローラの言葉が、ただのはったりだと部隊長は知っていた。

「お前等の目的はわかっている。自爆テロなどするはずがない！」

目的は ヴォータン を奪うこと。それも見透かされていた。あの場でアレンが スイシュ を見せなければ、きっと状況は変わっていただろう。

気配が変わった。

部隊長が刹那のうちに隠形鬼に替わっていたのだ。

「牢屋カラ逃げ出サレテハ、我々ノ仕事ガ増エルデハナイカ」  
状況はより最悪になった。

セレンが叫ぶ。

「リリスさんをどうしたんですか！」

「サテ、何処ニ飛バサレタノカ、私ニモ解ラヌ。辺境ノ地カ、海ノ底カ、遙カ宇宙ノ彼方カ、ソレトモ別ノ次元カ」

その言葉を信じるなら、殺したわけではないらしい。

トツシユは苦虫を噛みしめていた。

「おぼろげだが、おまえの面……覚えてるぜ」

あれはあまりにも一瞬の出来事だった。影から何かが見れ、瞬時撃つた刹那には瀕死の重傷を負って気絶した。

「借りは返させてもらう」

動力炉に構うことなくトツシユは レッドドラゴン を構えた。

「理解ニ苦シム行為ダ。此処ガ何処ダカ解ツテイルノカ？」

「ああ、知っているとも。でもな、おまえだけを狙えば済むことだ」

「狂ツテ居ルナ。実ニ興味深い男ダ。シカシ、私ニハ勝テン」

「そうだ、俺は狂っている」

トツシユは引き金を引こうとした。

しかし、引けなかった。

目と鼻の先に隠形鬼がいたのだ。

「私ハ御前ガ引キ金ガ引クト同時ニ、六五歩以上ハ移動デキル」

六五とは、一弾指という指で弾く僅かな時の間にある刹那の数。

今度こそトツシユは引き金を引いた。

隠形鬼は手のひらを開いて見せた。その手から落ちた弾頭。

「私ノ言葉ガ理解出来ナカタノカ？」

「ば、莫迦な……信じられるか……ありえん」

「理解セズトモ、現実ハ変ワラン。先ズ、御前ガ一人目ダ」

それはゆっくりとした動作だった。

しかし、トツシユは動くこともできなかった。

隠形鬼の指がトツシユの額を弾いた瞬間、消えたのだ。

そう、トツシユが跡形もなくその場から消えたのだ。

「二人目」

隠形鬼はすでにセレンの前にいた。

そして、同じく消された。

「御前デ最後ダ」

フローラも抵抗することなく消された。

漆黒の闇。

一点の光すらない世界。

ここでは己の肉体すら感じられなかった。

思考だけが存在する。

セレンは声を出そうとしたが、この世界には音すらなかった。  
無。

思考さえ存在していなければ、ここは完全な無、だった。

軀を動かす。

いや、動かしているような気にはなっているが、動いている  
かどうかはわからない。

セレンは自分の胸に触れた。

胸の感じはなかった。

手の感じすらない。

五感のうち触覚が失われている。

ここは漆黒なのか、それとも視覚が失われているのか。  
声が出せないのだけなのか、それとも聴覚が失われているのか。

嗅覚や味覚はどうだろうか？

息をしている感覚や、口の感覚もないので、残る二つの感覚もよくわからない。

そして、時間の感覚もなかった。

長いようで短い時間。

躰の感覚はなかったが、セレンは歩き続けた。

出口を信じて足を止めなかった。

やがて、この無の世界に変化が訪れた。

一筋の光。

たった一筋でも、暗闇の中を照らせばとても眩い。

セレンは気づいた。

自分の躰がある。

「あつ」

声も出た。

光の存在によつて、五感すべてが取り戻せた。

あの向こうの側にある光がどんどん強くなっている。

今にも闇は光に呑み込まれそうだった。

視界がぼやける。

「大丈夫セレン？」

「おい、しっかりしろシスター」



聞き覚えのある声。

セレンの視界が開けた。

目の前にあるフローラとトツシユの顔。

「わたし……助かったんですか？」

そこはあの動力炉だった。辺りに隠形鬼も兵士たちの姿もない。

セレンの頭はまだ少しぼーっとしていた。

「どう……なっただんですか？」

尋ねられた二人は顔を見合わせ、トツシユは首を傾げた。

「俺様にもわからん。なにもない空間に閉じ込められたと思ったら、あっさり出てこられたな」

どれだけあの空間にいたのだろうか？

兵士たちはトツシユたちを葬ったと思つて引き上げたのだろうか？

セレンは床を見てハツとした。兵士が二人倒れていた。

「あれは!？」

兵士を一瞥したフローラ。

「あれはここに戻れた途端に、鉢合わせてしてしまつて。一人はわたくしが」

「もう一人は俺様が気絶させた」

ということとは、フローラとトツシユはほぼ同時に、ここに戻つたということだろうか？

セレンも意識がはつきりしないだけで、同じときに戻つていたらかも知れない。

気絶していた一人の兵士がむっくりと立ち上がった。  
いや、違う。

それはすでに兵士ではなく 隠形鬼。

「オノレ、私ノ術ヲ破ツタト言ウノカ！」

レッドドラゴンの咆吼。

漆黒の仮面が砕かれ、隠形鬼が倒れた。

一瞬の出来事だった。

術を破られた衝撃を覚えていた隙を突くことができたのか、  
トツシユの撃った銃弾は見事隠形鬼を仕留めたのだ。

トツシユは仰向けに倒れている隠形鬼を見下ろした。

砕け散った漆黒の仮面。

半壊した顔面は中年の男のものだった。

「こんな顔だったのか……仮面がなきやただのオッサンだな」

そして、トツシユはお返しとばかりに、中年の男の腹に銃弾  
を喰らわせた。

フローラはすでにコンピューターの前に立っていた。ここで  
の目的を忘れてはならない。

「トツシユ、入り口を見張っていて！」

そう言っただけ動力炉のコンピューターを操作しはじめた。

操作の途中でフローラは手を止め、自分の懐中時計を見て不  
思議そうに顔をした。

「コンピューターに表示されている時間と、わたくしの時計の  
時間が違うわ。二時間以上、わたくしの時計が遅れているわ」  
言われてトツシユは自分の腕時計を見た。

「俺様の時計は一五時三六分だ」

「わたくしの時計もそれとほぼ同じよ」

二人の時計が合っていると言うことは、コンピューターの時計が狂っているのか？

いや、この飛空艇でもっとも重要な、動力炉を預かるコンピューターの時間が狂っているということがあるのだろうか？

時計をしまったフローラは再びコンピューターを操作した。

「今考えるのはやめましょう。まずは　ヴォータン　を……口ツクを解除したわ。見て、動き出したわ」

人が覆い隠せるほどの大きさの円柱の金属が、床へと収納されていき、金色に輝く槍　ヴォータン　が姿を見せた。

床のコンセントに刺さっている　ヴォータン　をフローラが引き抜いた。

すべての動力が止まる。

警報が鳴り響く。

次の瞬間、ここにいた全員が壁に叩きつけられた。

飛空艇が大きく傾いている。

トツシユは壁に足を付けて立ち上がった。

「まさか飛んでいたのかっ!？」

おそらくそのまさかだろう。

フローラも立ち上がり、壁に落ちていた　ヴォータン　を拾い上げた。

「迂闊だったわ。中にいたせいで飛んでいることに気づけなかった。いえ、ちゃんと調べるべきだったわ。目の前にある　ヴ

オータン を奪うことに気が逸ってしまつて」

飛んでゐる物体が動力を失えばどうなるか 考えるだけで身の毛がよだつ。残された時間はあまりないだろう。

セレンは身を強ばらせた。

「早くしないと落ちます……よね？」

墜落すればこの飛空艇にいる全員ただでは済まない。

トツシュがフローラを見て、ヴォータン が刺さつていたコンセントを指差した。

「それを元に戻せ、すぐに墜落するぞ！」

「駄目よ、登れないわ」

そう、すでに飛空艇は九〇度近く傾き、壁が床に、床が壁になつていた。

スピーカーからライザの声が響いてきた。

《各員に次ぐ、動力が失われ予備電源で飛行。最悪なことに何者かによつて、操縦コントロールシステムが破壊されたわ。船の傾きも直せず、このままだとあと数秒で墜落よ」

放送はそのまま切られず、声が漏れてきていた。

《あれは……まさか、アスラ城に……計られた!？》

激しい衝撃が襲つてきた。

動力炉にいた全員の躰が浮かび上がり、壁に激しく叩きつけられた。

鼓膜が破らそうほどの轟音が響いている。

何度も何度も大きく揺れる。

あまりの揺れに立つこともできず、その場にいることもでき

ず、受け身も取れずに何度も床や壁に躰を打ち付けられる。

「うっ！」

セレンが短く声を漏らした。

強打された後頭部。

セレンの意識が遠のいた。

アレンは天井高くを見つめた。

そこに突き刺さっている キュクロプス の船首。

「よく爆発しなかったな」

ドーム状の屋根に突き刺さった キュクロプス からは、小さな煙が上がっているものの、今のところは大爆発をせずにその場に留まっている。

「きつと燃料を使って飛行していないからですよ。機器が爆発を起こしても、引火する物がなければ大爆発は起きませんか」

アレンに背負われているワーズワースはそう説明した。

何が起きたのかアレンにもよくわからなかった。

激しい衝撃のあと、飛空艇から逃げ出してきたら、こんな場所に来てしまった。

目の前にあるのは銀色の輝くピラミッド型の遺跡だった。

いったいここはどこなのか？

ライザが墜落寸前に残した言葉は“アスラ城”、そして“計られた”という疑惑的な言葉。

少なくともここはアスラ城ではないらしい。

アレンは舌打ちをして溜め息を吐いた。

「つーかさ、こどこなんだよ。やっぱ下じゃなくて、上から出ればよかつたんじゃないかね？」

「九〇度近く傾いてるあれを登るなんて無理ですよ」

あれとは キュクロプス のことだ。

「でもさ、下に来てても地上じゃなくてこんなとこに来ちゃったじゃねえか」

「たしかに地上ではないみたいですよね……ん？」

「なに？」

「ちよつと思ひ出したことがあるんですけど。たしかフローラさんが、装置は帝國の地下にあるのかなんとか」

もう一度思ひ出されるライザの言葉 “アスラ城”。

アレンは眼を細めて疑惑の視線をした。

「うっそだー。ここがアスラ城の地下つて言いたいわけ？」

「べつに嘘をつこうと言ったわけじゃないんですけど。可能性ですよ、か・の・う・せ・い」

「もしそうだとしても俺 スイシュ しか持つてねえし。またあそこに戻るの嫌だぜ？」

アレンたちはトツシュたちが ヴォータン を手に入れたことを知らない。

「やっぱ戻ったほうがいいんじゃないですかねー。ほら、ここが地下なら、やっぱりあそこから登っていくしか出口ありそうもないですよね？」

「無理。あの高さは飛び降りることはできても、ジャンプじゃ

「届かねえし。あんたを背負ってなんて絶対無理」

「それって僕を置いていこうとしてます？」

「さあな。でもあんたを下ろしても無理だろうな。俺の最高記録四八メートルくらいだし」

「ええつ、そんなに高くジャンプできるんですか!? 僕を背負いながらあそこから飛び降りたときもすごいと思いましたけど、何者なんですかアレン君？」

「……いいだろそんなこと。つかさ、戻れないなら進むしかないだから行くぞ」

話を切り止めて、アレンはピラミッド遺跡に向かって歩き出した。

ピラミッドまでの道は舗装された石畳で一直線に続いている。「大きいですね」

とワーズワースは感嘆した。

ピラミッドの高さは約五〇メートル以上。およそ底辺の横幅も同じくらいありそうだ。

やがてピラミッドの入り口らしき扉が見えてきた。そして、そこにいた人影。大柄な男とそれに背負われている少女。トッシュとセレンだった。

アレンたちを確認したトッシュが口を開く。

「無事だったか」

無事と言うほど無事ではないが、生きてここまでやって来た。だが、トッシュたちのほうは？

ワーズワースは二つのことに気づいた。

「セレンちゃんどうかしたんですか？ あと、フローラさんっていうあの人がいないみたいですけど？」

「シスターは気を失っている。あれが落ちるときに頭を打ったらしい。フローラは……いつの間にかはぐれてた、これを残してな」

トツシユは片手に持っていた黄金に輝く ヴォータン を見せた。

それを一目で ヴォータン だと察したアレンは、自分が持っていた スイシユ を取り出した。

「こつちもちゃんと手に入れてるぜ」

淡いブルーに輝く スイシユ。

トツシユは扉に向かって顎をしゃくった。

「そこに鍵穴らしい物がある。おそらくこの ヴォータン を挿せば扉が開く筈だ」

「ならさっさとやるっぜ」

アレンに促されてトツシユは ヴォータン を鍵穴に突き刺した。

駆動音が地響き共に鳴り響いた。

ピラミッドの外壁を奔る電流。

銀色だったピラミッドが金色に輝きはじめた。

そして、ピラミッドの頂上付近にあった 眼 が見開かれた！

嗚呼、扉が開く。

永い永い眠りから覚めた古代遺跡。



そこで待ち受けているものは……？

《5》

扉の先に広がっていた部屋にはただ一つ、台座があるだけだった。

そこに スイシユ を乗せろと言わんばかりだ。

アレンはワーズワースを床に下ろし、迷わずその台座に向かって歩き出した。

そして、台座の前で足を止めた。

「置くぞ？」

アレンに顔を見られたトツシユは無言でうなずき、ワーズワースは真剣な眼差しをしていた。

「待て！」

部屋に響き渡った少年の声。

この場に現れたルオの声だった。

しかし、スイシユ はすでにアレンの手の中にない。

「もう置いてちゃったもんねー」

悪ガキのような顔をしてアレンは笑った。

スイシユ が設置された台座は床の底へと自動的に収納されていく。

「遅かった……か」

ルオは憎悪を浮かべながら歯を噛みしめた。

「ソウ、此デ何モカモ終ワリデ御座イマス」

この場にもうひとり 否、一人減ってもうひとり、ワーズに替わってその場に隱形鬼がいた。

驚くトツシユ。

「俺様が殺した筈!？」

「御前ガ殺シタノ八偽者ダ。私八御前ガ引キ金ヲ引ク間ニ六五歩以上移動出来ルト言ツタ筈ダガ？」

あれは隱形鬼の最期にしては、やけに呆気ない終幕だった。それもすべて隱形鬼の罠だったのだ。

そして、もう一人最後にやって来た女がいた。

「ご苦労様トツシユ。とても良い働きだったわ、本当にありがとう」

「フローラ！」

叫んだトツシユの視線の先で、フローラは隱形鬼の横に立った。

信じたくない出来事ではあったが、トツシユの直感がそう訴えている。

「そうか……裏切ったのか俺様たちを」

「いいえ、はじめからこちら側のスパイだっただけよ。鬼兵団でのわたくしの名は木鬼<sup>もくき</sup>」

この状況を見て、ルオを腹を抱えて笑い出した。

「あははははっ、じつに愉快だ。そうか、三つ巴という訳か。朕は隱形鬼に謀れ、君はその女に謀れたというわけか……くくくくく」

「其ノ通りデ御座イマス。此デ帝國ノ栄華ハ水ノ底ニ沈ム」

「我が帝國にどんな怨みがある？ それとも金で雇われたのかい？」

「イエイエ、怨ミデモ無ケレバ、金デモ御座イマセン。次ノ世界ニハ不要ダカラ消工テ貰ウダケノ話」

「シユラ帝國が不要だと……後の世で世界のすべてを治めることになる、シユラ帝國が不要だとッ！」

ルオの怒号と共に 黒の剣 が隠形鬼に向かつて飛んだ。

「私ニトツテ、コノ剣ダケハ厄介ナ代物……ナア、れヴえなヨ？」

黒の剣 が隠形鬼を貫いた と思ったが、そこに隠形鬼はいない。

しかし、黒の剣 は獲物を見失わなかった。

だれもない空間を 黒の剣 は突いた。

「クツ！」

突如姿を現した隠形鬼は、煌めく透明な魔導盾を手のひらの前に出し、黒の剣 を受け止めていた。

二人が戦いに集中しているのを見計らって、トツシユはアレンに合図を送った。そして、セレンを背負ったまま出口に駆け出す。

戦いなら勝手にやらせてけばいい。

だが、アレンはその場をまだ動かない。

「まだ装置が動いてるかわかんねえぞ？」

台座と共に スイシユ が床に収納されてから、何の音沙汰もない。

出口に立ち塞がったフローラが答える。

「いえ、ちゃんと稼働しているわ。スイシユを設置してから三〇分後、このピラミッドの頂上から一気に水が噴き出すわ。そして一瞬のうちに地上にある帝國は水に沈むでしょう」

トツシユは悲しい瞳でフローラを見つめた。

「帝國を滅ぼす目的のために、表の顔はジードとして、スパイまでして、そして俺様まで使ったのか？」

「いいえ、わたくしの目的ははじめから一貫しているわ。自然環境を守り、この星に緑を取り戻すこと、ジードは表の顔よ。帝國が滅びるのはその課程の一つに過ぎないわ」

少しだけトツシユは微笑んだ。

「……そうか。それならそれでいい、俺様たちはもう用済みだろ？ 行かせてもらおうぜ」

フローラの横を通り過ぎようとしたトツシユの前に茨の柵が現れた。フローラの生きているドレスから伸ばされた植物だ。

用が済んだら殺すのか？

「行カセテヤレ」

黒の剣 との攻防を繰り返しながら隱形鬼が言った。

「朕との戦いで目を離すとは良い度胸だね！」

一気にルオが猛攻を仕掛ける。

隱形鬼はルオとの戦い続けながら、まだ半分の意識はトツシユたちに向けたいた。

「帝國ヲ討チ滅ボシタ英雄ガ必要ダ。其ノ為ニ選ランダ男ダ」  
「すべて筋書き通り、俺様はおまえの手のひらの上で踊らされ

てたつたわけか」

トツシユはそう言いながら開かれた茨の柵に先へと進んだ。逃がしてくれると言っているのだ。ここで無用な戦いをして危険に身を晒すこともない。

だが！

レッドドラゴン が一瞬のうちに抜かれ、銃弾が放たれた！

銃弾は隠形鬼を外れ、遙か天井へ。

「くッ……」

レッドドラゴン を握るトツシユの腕に巻き付いた茨。それによつて弾丸は明後日の方向に飛んでいったのだ。

「さつさと消えなさい！」

フローラは茨のロープを操り、セレンもろともトツシユをピラミッドの外へと投げ飛ばした。

すでに扉は茨の柵によつて閉じられた。中に入るにはフローラを倒すしかない。

トツシユは地面に放り出されていたセレンを背負い、片手を上げてフローラに別れを告げる。

「俺様はフェミニストじゃないが、おまえだけには手を出さない。じゃあな、達者でな」

寂しそうな背中をしてトツシユは歩き去った。

そして、アレンは。

「ちよつと待てよ、俺を置いてく気かつ、どうして俺は閉じ込められなきゃいけないんだよ！」

アレンはフローラを倒す気だった

「俺はあんたをぶん殴つてでも帰るからな！」

「できるものならご自由に」

微笑んだフローラのドレスから、鞭のように蔓が攻撃を仕掛けてきた。

軽やかにアレンはそれを躲し、グングニールを懐から抜いた。

しかし、蔓のほうが早かった。

茨がグングニールを握る腕に巻き付く！

「こんなもの！」

どこかで歯車の音がしたような気がした。

アレンが蔓を引き千切るよりも早く、真っ赤な蕾が花開いて芳しい匂いを放った。

匂いを嗅いでしまった途端、アレンの躰が痺れだした。

「糞ッ……躰が……」

「神経毒よ。本来なら完全に動きを封じられるのだけれど、さすが半分機械の躰ね」

左半身が痺れて動かない。右半身は問題なく動く。

しかし、グングニールを握っていたのは左手だった。

グングニールがアレンの手から滑り落ちた。

すぐに拾い上げようとしたが、蔓はアレンの右足首をも捉えていた。

蔓が力強くアレンの足首を引っ張る。

「うおっ！」

足を掬われたアレンが転倒してしまった。

そして グングニール も蔦に拾われてしまっていた。  
隠形鬼とルオの戦いも決着がついていた。

床に倒れて動かないルオの姿。 黒の剣 も微動だにせず床に突き刺さったまま。

隠形鬼がアレンに近付いてくる。

アレンは必死になって蔓を引き千切ろうとしたが、蔓はアレンの動きに合わせて常に一定の弛みを持たせられ、引いても引いても引き千切ることができない。

「サテ、御前ヲドウスルカ、未ダ決メカネテイル」

「俺なんかどうでもいいだろ、ほっとけよ！」

「企ミガ解ラヌ以上、放ツテ置ク訳ニモイクマイ」

「企みなんかねえよ！」

「御前ノ企ミデハ無イ。御前ヲ創ツタ者ノ企ミダ。何故御前ハ創ラレタ？」

「知るかつ、俺が聞きてえよ！」

その問はこれまで何度もアレンの頭で渦巻いてきた謎だった。半身は人間として、半身は機械として、なぜ創造主はアレンをこのような躰にした？

自分に何があったのか？

それをアレンは思い出せなかった。

フローラが隠形鬼に言う。

「不安材料は消去しておくべきだわ」

「未ダ解ラヌ。敵ニ成ルカ、味方ニ成ルカ、此奴ハ両方ノ資質

ヲ兼ネ備エテイル」

すぐにアレンが口を出した。

「はあ？ あんたらの仲間になるわけねえだろ。仲間になったら、アレンキとか変な名前で呼ばれなきゃいけないのかよ？」

隠形鬼はアレンの言葉を無視して話し続ける。

「知ラ又事八知リタクナル。智ヘノ探求心ヲ私八優先スル。あれんハ此処ニ残シテ行ク」

もうフローラは口を挟まなかった。

アレンに巻かれたいた蔓がドレスに戻っていく。

「シスター・セレンに宜しくと伝えておいて頂戴」

「自分で言えよ！」

「そう。ならさようなら」

フローラはアレンに別れを告げた。

そして、隠形鬼は何も言わずフローラの躰を触って、共に霞み消えた。

二人の気配は完全に消失した。

まだ躰の痺れているアレンは立てもしなかった。

「マジやべえ。水が噴き出すとか言ってたけど、まさかここも沈むんじゃないだろうな」

「ああ、沈む」

そう小さな声で言ったのはルオだった。

床に這いつくばりながら生きた眼でアレンを見ている。

「なんだよ、生きてたのかよ」

「朕は死なぬ。死など超越して見せる」



「……あっそ。なら頑張つて生きろよ、俺は先に行かせてもらうけどな」

アレンは動く右半身を使って這いながら出口に向かいはじめた。

「行かせると思うかい？」

少年の容姿でありながら、ルオは重厚な声を響かせた。

帝國の滅びを目前にしながらも、いまだ皇帝。

黒の剣 がアレンに襲い掛かる。だが、いつのも強烈な切れがない。

どこかで 齒車 の音がごちなくしたような気がした。

アレンは今出せる全力で手で床を叩き、宙に舞つて 黒の剣 の一撃を躲した。

見た目では半身だけが機械だが、中身まではどうなっているのか、アレンも知らないことだった。中で完全に分離して機能しているのか、それすらもわからない。

ただ、今わかることは、機械の半身も調子が悪いということだ。

着地に失敗したアレンが床を転がった。

その隙を 黒の剣 が過ごすわけがない！

切っ先はすぐ目前まで迫っていた。アレンは躲そうとしたが、焦つて踏み込んだ足は痺れている左足だった。

「糞ッ！」

転倒するアレン。

黒の剣 が頬を掠めた。

アレンは動きを止めた。

頬を奔った一筋の紅い血。

黒の剣 は狙いを外れて床に突き刺さっていた。

ルオはアレンに手を伸ばしながら、床に頬をつけて動けなくなつた。

「もう一寸たりとも 黒の剣 を操れぬというのか……これほどまで悔しいことがあるか……朕は君に負けたのではない……自分の力の無さに負けたのだ」

「はいはい」

そう言つたアレンも動けなかつた。

機械の半身まで動かない。

まさか神経毒が機械の半身にも効いたというのか？

本当にそうなのか、アレンにもわからない。

「腹減つたなあ……動けるようになるのが先か、水浸しになるのが先か。もう水でもいいから腹いっぱいにしてえな。ああ、疲れた」

ゆつくりとアレンは眼を閉じた。

やがてピラミッドの頂上から大量の水が噴き出した。

ピラミッドを流れ落ちた水は遺跡を沈め、扉の開かれたままのこの部屋も、一瞬にして水に呑み込まれた。

へりの中でセレンは目を覚ましていた。

「みんなは！ まだみんながあそこに！」

窓の外に見える光景。

帝國が沈む。

激流に呑み込まれてシユラ帝國が跡形もなく消えた。砂漠一帯が瞬く間に海と化す。

水の勢いは留まることを知らない。

やがて海からはいくつもの川ができるだろう。

川は各地を巡りながら生命を潤す。

セレンは涙を流した。

「こんなことになるなんて……」

水を生み出す装置は、ただ水を生み出すだけではなく、帝國と共に多くの命を藻屑にした。

どれだけの人が逃げ出すことができただろうか？

兵士の多くはわけもわからないうちに水に呑み込まれていっただろう。

キュクロプス がアスラ城に墜落したとき、もうパニックは最高潮に達しており、統率など取れない状況だった。

へりを操縦していたトツシユは不味い煙草の火を消した。

「運が良ければ生きてるさ」

「なんなんですか、わたしが気絶している間になあがあったんですか！」

世界は勝手に進んでいく。そのことがセレンは居た堪らなかつた。

また、巻き込まれて終わってしまった。

「シスター、あんたは普通の暮らしに戻りな」

こんな出来事に巻き込まれたのに、トツシユの言葉で酷く突

き放されたようにセレンは感じた。

「なにも説明してくれないなんて無責任です！」

「たしかに多くの命が失われただろうよ。だがな、帝國が滅びたんだ。きつとこれから世界は良くなる……そう祈ったらどうだ？」

「悲しすぎて祈れません。あんな多くの命の冥福をわたし一人じゃ祈れません。ワーズワースさんも、アレンさんも、フローラさんも、リリスさんだつて……どうなったかわからないんですよ」

トツシュはセレンに何も聞かせていなかった。特にフローラのことは、このまま何も語らぬままだろう。

「アレンは簡単に死ぬタマじゃないだろう。婆さんだつてまだまだ長生きしそうだ。ほかの二人も……あの若造だけは、ひょろいから死んじまつてるかもな」

冗談のつもりで笑つて見せたが、セレンは大粒の涙を浮かべて笑える状況じゃなかった。

「ワーズワースさんのことを悪く言わないでください！」

「……すまん」

その一瞬、トツシュの脳裏を過ぎったのはフローラの顔だった。

トツシュは呟く。

「帰ったら酒でも呷あぶつて女でも引っかけて寝るか」

空に昇りはじめた夕日。

砂漠に出来た海を朱色に染める。

大量の水は多くのものを流して呑み込んだが、流せないものを多く残ってしまった。

数日のうちに帝國滅亡の噂は世界を駆け巡った。

はじめのうちは誰も信じようとしなかったが、広がる海を目の当たりにして疑う者はいなくなった。

帝國にいったい何が起きたのか？

あの海はいったいどこから湧いて現れたのか？

それを語るの一人の吟遊詩人。

トツシユの名を人々に知らしめた英雄譚を、吟遊詩人は今日も謳い旅をする。

その吟遊詩人の噂を聞いたセレンは、歌を口ずさみながら教会の裏庭に咲く花々に水をやった。

あの出来事のあと、教会に帰ってきたセレンは驚いた。

水と泥に流された花壇が元通り　いや、それ以上に美しい

花々が咲き誇る庭園に生まれ変わっていたのだ。

だれがいったい？

それを考えながらセレンは、嬉しそうな顔をして今日も花の世話をすのだった。

水に育まれた世界はこれからどう変わっていくのだろうか……？